地名研究会報

第２９号
平成２年９月２日
鹿児島地名研究会

Ⅰ．第２９回例会　平成２年６月３日（日）　於教職員互助組合会館和室

（出会者）　池田信夫・江平　望・大田照夫・木場武則・千葉昭彦・花園正志・浜崎盛雄・肥後芳尚
平田信芳・二見剛史・松浪由安・村上良典・山口静也・山崎盛隆・吉川法水（計１５名）

Ⅱ．甕藩名勝考読会　p.98～p.100

（問題となった地名および事項）　大隅国、大隅直・大隅忌寸などの姓、大隅郡、桑西郷、九州。

大隅国

平田　今、読んだところで何か問題にすることはありませんか。私自身これを読んでいて、大隅（おおすみ）というのが「山が重なった状態」なんていう表現は、これが初めてだったのですが。大隅の語源はいわゆる「隅っこの方」「大いなる隅っこ」というようなことを考えていたのですが。

二見　日本書紀までは薩摩・大隅のことをすべて日向と言ってたのですか。

平田　そう言ってたようです。

二見　そうすると、広いひろがりですね。

平田　そうですよ。８世紀の初めに先づ薩摩国を独立させて、その次に大隅国ですからね。古事記は九州を四つに分けています。九州じゃなかったんですね。日向は後世の薩摩・大隅・日向の三つを含めていました。この地域のことを、中央じゃほとんど知識としてなかったでしょうから。

二見　その頃は奄美とか琉球というのはまだ概念に入ってなかったのですか。

平田　奄美はやっとこさ使がやって来る頃です。

二見　いつ頃ですか。

平田　７世紀の末頃です。

二見　その時には奄美と言ってたのですね。

平田　奄美は当時も奄美と言ってたようですが、沖縄は「阿児那波」という表現があります。やっと情報が入ったという程度です。

大隅忌寸という姓

浜崎　「忌寸」という姓を大隅国の方は賜わったとありますね。忌寸という姓は、辞典を引くと、帰化人に賜わる姓だというようなことが書いてあります。私は薩摩半島育ちですが、あっちの方は阿多君とか衣君とかが出て来ます。「君」は皇族の子孫に与えられる、と。そう言ったようなことが広辞苑に書いてありました。そうしますと、日向国に関係する姓は両方あるようですけど、大隅の方は帰化人が多く、薩摩の方はいわゆる「君」と称する姓が多かったと、そんなふうに考えてもいいんですか。

平田　それは大事な視点でしょうね。そのように考えていいんじゃないですか。考えていいんじゃないですかと言うより、何と言えばよいかな、考古学の方でも須恵器の類で南九州に直接朝鮮から入って来たものがありはしないかとねらっている人もいます。だから、今出て来たような帰化人たちが住んでいたという証拠がないから、遺物の面でそれを確かめて行かなければならないので－－－

浜崎　ところが考古学のそういうことになると、前方後円墳なんかは大隅あたりまではあるけれども薩摩の方はほとんどないという状態。

平田　いや、薩摩も見付かって来る可能性はあると思うんですよ。

浜崎　いやまぁ、これからですね。何か逆のような気がするんですが。こちらの方は姓から行けば、いわゆる公・君である。向うは、古墳があるところは、忌寸。いわゆる帰化人の姓になっとる。

平田　いやいや、大和朝廷は帰化人を重視しますからね。大和朝廷と帰化人というのは密接な関係です。古代の文化というのは帰化人によって積みあげられたので、これを無視したらおかしいんじゃないですか。

浜崎　「君」は皇族の子孫だ、と。ところが氏姓の方は。

平田　新撰姓氏録にある皇別・臣別・蛮別というのは、姓氏録の研究者はそういう区別をしたのでしょうけれども、県主とか国造がどういう姓をもらったか、その姓が臣別であるのか蛮別であるのかと、そういう視点で見た人はいないのじゃないですか。面白い指摘をされたなと思います。

花園　99ページの下の段にある大隅守陽侯史麿について『国分郷土誌』は帰化人の子孫だというふうな書き方をしています。

平田　あぁ、そうですか。

花園　それで、大隅の方は今話が出たようなことは、帰化人の居住があったということは、いくらか言えるんじゃないかと思うのですが。

平田　確かに陽侯史麿という名前は帰化人系統の人ですよね。

大隅郡

二見　99ページの上の段のうしろから2行目に、肝坏・贈於・大隅、その次は「あいら」ですか？

平田　そうですね、「あいら」としか読めないですね。

二見　ところで、大隅というのはどの辺を言っているのですか。

平田　大隅郡というのは、私の考えでは、志布志とか今の大隅町、あちらの方に広がっていた郡だと思います。薩摩国でも大隅国でも郡の境界はしょっちゅう移動しています。他の国でも多少の移動はありますが、大隅・薩摩はとくに激しいようです。それと、幕末から明治にかけての大隅郡というのは牛根、垂水、大根占、根占、それから佐多。あちらの方が大隅郡ですね。しかし古代の大隅郡は、のちの南諸県郡に入ってしまった志布志とか大崎とか有明とか、あっちの方を言ったんじゃないかと考えます。

桑原郡

二見　桑原郡というのが、どの辺から出て来たのですか。

平田　桑原郡というのは平安時代の初めには出て来ます。それから、桑原に国府があったという記事があります。桑原国府というのは『和名抄』に出て来ます。

花園　桑原国府というのは、今の国分の府中一帯になるわけですね。

平田　国分は贈於郡になります。天降川から西の方が桑原郡になります。

花園　桑西(くわにし)という言い方も。

平田　それは従来桑東(くわひがし)　桑西(くわにし)という言い方をしていましたが、桑東郷(くわのとうごう)　桑西郷(くわのさいごう)　読むべきだろうと思います。というのは『旧記雑録』の中に「くわのさいごう」と書いた仮名書きの文書がありますから。「くわのとうごう」「くわのさいごう」と考えるべきでしょう。日当山に「東郷」という地名がありますが、「西郷」は消えてしまい残っていません。桑西郷がどこになるかというと、溝辺と隼人町真孝、内山田、それから野久見田。いわゆる隼人町の西半分が桑西郷になります。平安時代の初めに桑原郡の大領すなわち長官に宇佐の神官で酒井勝(さかいすぐる)という人が下って来ます。このことは五味先生の論文に書いてあります。その酒井勝の子孫が土着して、酒井氏を名乗り、溝辺氏を名乗り、それから西郷氏を名乗るんですね。西郷さんの先祖はこれだと思うのです。肥後の菊池から来たものじゃない。先日、溝辺に行った時の話ですが、溝辺に三つ目の西郷さんの銅像が立ったのだけども、これは歴史の偶然だ。もともと溝辺は桑西郷で、西郷さんの先祖の地だった。銅像はいい所に建ちましたね、と賞めたら喜んでいました。

九州

二見　ついでに九州ということばの由来と、四つの国だったというのを、もう少し教えて下さい。

平田　『古事記』には、四つの国を書いてあります。豊国(とよのくに)・肥国(ひのくに)・熊曽国(くまそのくに)・それから筑紫国(つくしのくに)の四つですね。これが分かれて行って、持統天皇・文武天皇の頃に、中央政府によって行政区画が整備されて行きます。その時は薩摩国と大隅国がない七国二島ですね、二島というのは壱岐と対馬ですから。そして奈良時代になって薩摩国が出来、大隅国が出来て、九国二島になります。あぁ、多褄島まで入れると、九国三島の時代があるんですね。大隅国に多褄島が併合されて、九国二島に落着きます。その九国二島を「九州」と言ったわけです。だから、四つの国の時代、七国二島の時代、九国三島の時代それから九国二島の時代。現在は八県の時代ですね。沖縄県まで入れて八県になります。九州という呼び方は九島二島時代の名残りだと思います。

二見　千字文なんかに九州という概念が書いてあって－－－

平田　あれは、中国の呼び方ですよ。

二見　あれは全然関係ないですか。全然関係ないですね。

平田　関係ありません。他にありませんか。今日はこちらを軽く済まして、各人の問題提起を主に、各人におしゃべり願った方が意味があろうと思って時間を設定しました。そちらの方に移りましょう。プリントの項目は私が受け取った段階でまとめたものです。その後連絡のあったものを書き加えて下さい。二見先生のテーマは「竹山(たけやま)」。「たかやま」ですか。それと、竹下(たけした)。これはご郷里でいつも見聞きしておられる地名で、疑問に感じておられるものです。それから、木場(こば)ですね。木場さんがお見えですから、あとでコメント頂きたいと思います。他にもありましたら今のうちに出して下さい。

花園　向花(むけ)というのを、お願いします。

平田　向花ですね。他にありませんか。それから「植物に由来する地名(1)」というコピーは、『朱欒(ざぼん)』という俳句雑誌に何か書いてくれと言うことで、先月から書きはじめました。これをコピーして来たのは、浜崎さんの疑問の地名に「足加イ」がありましたので、「アシカイ」の回答としてこれをコピーして来ました。

池田　これは疑問の地名ということじゃないのですが、地名を文化財として取扱っていいかどうか。

平田　地名を文化財ですか。

池田　地名が勝手に変えられているから。無形文化財だと思って。

平田　勝手に変えるなということですか。

池田　えー、そうです。考え方として、それでいいかどうかということを。

平田　それについては皆で議論しましょう。意見が別れるでしょうから。他にありませんか。それでは、これにもとづいて行きましょう。まず問題提起者から説明を聞くことにしましょう。1人10分乃至15分、じゅうぶん時間をとれるのじゃないかと思います。江平先生からお願いします。

日頃疑問の地名

和名抄の「二字」化地名の問題

江平　只今差上げました抜刷『橋の名いろいろ』は、前回「実方」を問題にしましたので、それをまとめてみました。ついでに知覧のことも出て来ましたので知覧町麦橋のことと、「ぐゎんぐゎら橋」というのも書きましたが、当っているかどうか。目を通して、ご批判頂きたいと思います。

平田　たくさん資料がありますね。

江平　プリントのあまりがあれば返して下さい。私の分まで配ってしまいましたので。とじたのはなかったですか。いつも後を見っこっぱっかい申し上げて、お叱りを受けているかも知れません。今のコピーの三枚目と四枚目、63ページの下の方に「実方太鼓橋」があります。前回お話申し上げたのは、校正刷をもとにしてお話申しあげたわけでした。もう一つ、65ページの方に「ぐゎんぐゎら橋」というのがあります。これは見て頂いてご叱声を頂けたら有難いと思います。そんなに詳しい厳密なものではないですから。

じゃー、本題に入ります。この綴じたプリント。皆さんご存知のことで、こと新しく申し上げるのもちょっと気が引けるんですけれども、まぁ私なりにまとめてみました。最初のコピーの右側の前半は、『続日本紀』巻六、和銅六年五月の部分です。後から２行目に、「畿内七道諸国の郡郷名は好字を著けよ、と」。これは『風土記』の撰進を命じた部分にもなりますが、諸国の郡と郷の名は好い字を付けなさい、とあります。好い字を付けよ、好い字とはどういう意味なのか。左側の史料は『延喜式』民部上ですが、「諸国は部内の郡里等の名には、並びに二字を用い必ず嘉名をとれ」とあります。つまり、三字のものは二字に、一字のものは二字にして、字の意味も好い字を付けろという法令があったわけでご存知のとおりだと思います。

それで薩摩国は先程もちょっと話が出ましたけど西海道になります。左側の史料は『和名抄』すなわち『倭名類聚抄』西海国第五十九。筑前、昔風に読むと「つくしのみちのくち」になります。その昔は筑紫国、豊国、肥国、熊襲国の四つだった。それを筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後と、二つずつ前後に分けます。「前」と「後」とは、京都に近い方が「前」だそうです。京都に遠い方が「後」。東国の場合は反対になります。例えば、陸前・陸中・陸奥。それから、日向国が三つに分かれるのは先程話があった通りです。面白いのは壱岐島。「ゆき」と読んでいたということです。

今度は大隅国・薩摩国の郡郷について。郡がいくつあるかということ。「郡」までは読み方を付けてあります。菱刈郡・桑原郡、これは先程も話題になりました。大隅国が出来たことについては、これはよく知られていることですが、さっきの史料『続日本紀』の右側の２行目に「夏四月－－－－日向国の肝坏・贈於・大隅・姶羅の四郡を割きて、始めて大隅国を置く」とあるものです。この時、新しく再編成して、桑原郡・菱刈郡も置いて大隅国が出来たものと思います。もちろん馭謨郡・熊毛郡という島嶼の方を加えて、八郡になります。薩摩国は十三郡になります。

下の方の「郷」に移ります。大隅国・薩摩国でも二字にせよということの例として桑原郡の仲川郷があげられます。「仲川」とあって、「国では中津川の三字を用う」と書いてあるところです。もともと「中津川」だったわけです。それを無理矢理「津」をちぎったわけですが、大隅国では一率のあつかいに反対したというか、慣用がなかなか抜けきれないような漢字を用いております。それから贈於郡の「志摩郷」。これは「島」で、桜島のことですが、「島」が一字だったので、二字にするためにきれいな字の志摩。志摩国の志摩なんかも、やはりこれに準じて二字になったのだろうと思います。

ところで、こういう二字化だけでなくて、薩摩国の頴娃とか大隅国の贈於、これも二字化した郡名だと思います。先程の奥藩名勝考にも出て来ましたけど、「読むべからず」と。「頴なり」、添えた言葉で「読むべからず」となっておりますが、文字力が出て来る近世から現代になりますと、とかく読まないと気が済まないとみえて、贈於(そお)と読むようになったのであって、当時は「贈於(そ)」であったということです。頴娃の方も当時は「え」であって耳から入る音声言語の場合はそれでよかったのですけれども、文字で情報が伝達されるようになり識字率があがりますと、頴娃の方もなんとか読まないと済まんということで、「えい」と読むようになってしましました。

『和名抄』は、和銅から二百年後の平安時代、10世紀半ば頃の作品です。二百年の差と言えば、これは大変な差です。源順という人は平安時代前期の歌人であって学者ですけど、実際に現地へ問い合わせたりしたのじゃなくて、文字から判断したのが多かったんじゃないかと思います。「よみ」は、他の郡郷名を読めば大体判りますが、郷の方はよみ方はあまり書いてありません。

その次、２枚目をあけて下さい。二字化の場合、どういう二字化をするのか、というのをあげてあります。一音の地名を二字化する場合の要領です。

1.紀伊国。国名です。四角を付けてあるのは、よみ方を示してないということです。「木国」、これは天平宝字八年の文献に、すなわち『続日本紀』に出て来ます。「木」を「紀」に直して、それに「紀(き)」の母音である「伊(い)」を添えて、紀伊。それを添えるけれども、「伊」は読まないのだと。紀伊国(きのくに)。それで、紀国屋文左衛門とか紀ノ川という。それが現代的な新しいものになると、紀伊山脈とか紀伊水道とか言って、「伊」を読むようになった。これは識字力があがって、文字からの情報伝達が盛んになり耳を必要としなくなったもんですから、とにかく読まないと気が済まないということで「きい」「きい」と読むようになってしまったのです。当時の人々は皆「紀伊(き)」と読んでいた。「伊」を添えても「紀伊(き)」だったわけですね。その証拠に山城国にも紀伊郡(きのこおり)という郡名がありますが、それには「岐(き)」とよみ方が添えてあります。『風土記』に「許乃国（紀伊郡）」とありますが、考え方は「紀伊」と同じです。

その次も「基肄(き)」。肥前国の郡名ですが、その下の方にある『風土記』の記事、「基肄郡、郷陸所、駅壱所、城壱所」。城は「き」と読みます。水城の城(き)です。大野城と基山。これは「城(き)」が「基」になって「肄」を添えたのですが、源順は文字だけ読み方を付けたのであって、実際に現地で呼んでいる地名を写したのじゃないんじゃないかというのが、私の意見です。

4.は、おなじような「雉怡郷」。下の方は怡(い)です。福岡県に怡土郡というのがありましたね。現在は「糸島郡」、怡土郡と志麻郡とが一緒になって糸島郡となっておりますけれども、昔から有名な怡土郡というのがあります。怡は「い」と読みますが、これは添えた文字。上は「ち」ですから、雉怡とあっても「ち」と読みます。

5.は「肥伊」とありますが、これは肥伊(び)。肥後国の「肥」というのは、『風土記』に「火国八代郡火邑」とあります。この「火」から出て「肥」を使うわけですね。

6.の「斐伊」。これは出雲国に斐ノ川という八股大蛇(やまたのおろち)伝説で有名ですね。「斐伊郷、本の字は樋なり」とあります。これは『風土記』にあるのですが、「樋速日子命(ひのはやひのみこと)此処にいます故に樋という。神亀三年字を斐伊と改む」と。神亀

三年、和銅から十年前後ちょっと下りますが、一応「斐伊」に改むと、一字の地名だったものを二字にしています。そのために母音の「伊」を添えてあります。のちには「斐伊(ひい)」と読むこともありますが、当時はなんと言っても口と耳だけの音声言語の時代ですので、やはり「斐伊郷(ひのさと)」だったわけです。その証拠に筑前国にも「毘伊郷」という地名がありますが、これは「毘伊(比) 」と読みを打ってあります。ところが、遠江国の郷名の「渭伊」ですが、「井以」と二字の読みを入れてあります。

9.〜11. は「宇」を付けたもの。「都宇（津）」ですね。備中国にある吉備津の「津」だろうと思います。これも「都宇郡(つのごおり) 」と読み、母音の「宇」を入れております。近江国・安芸国の郷名にも「都宇」がありますが、残念ながら郷名は読みが打ってありません。周防国の「由宇郷」、温泉の湯だろうと思います。

そこで問題の頴娃郡ですが、「江乃」の「乃」は「みなもとのよりとも」の「の」、「たいらのきよもり」の「の」、助詞の「の」ですね。つまり、つなぎ言葉。源順は二字に読まなきゃ済まないときは助詞を下の方に入れた。この「頴娃」という地名については、もう一枚の方をあけて下さい。以前にも問題提起があったかと思いますが、『古代国語の「え」の仮名について』。ヤ行の「え」とア行の「え」が区別されていて、平安時代の始めまで残ったケースですね。橋本進吉という人は、東大の国語学者ですが、『文字及び仮名遣いの研究』の部分です。大体のことは、これに書いてあるのですが、上の頴(え) は「ヤ行のエ」で子音を持った「エ」。下の娃(え) は母音で「ア行のエ」。昔の人は言葉をそんなに区別出来たんだろうかと、時偶思います。例えば、英語国民はｒと１の区別をしますが、日本人は出来ない。日本人の頭のよい成績のよい人でも出来ないが、アメリカ人はたとえ頭が弱くても出来るわけですから、言語体系というのはその国固有のものだと思います。やはり薩摩国でも隼人の方言があったかも知れません。「エ」と「エ」の区別が出来たんだろうと思います。

それと、これがやっぱり「頴娃(え) 」と読まれて来たことは文永四年の島津家文書に「えのこをり」というのが出て来ます。現在は識字力があがって何とか読む。二字化のためにただ添えた字だったのに読まにゃ気が済まんということで、頴娃（えい）と読んだり、「えい」と振ったりしておりますが、本来は頴娃(え) で、下の母音は添えただけのものに過ぎなかったのです。

その次、13. の「弟翳」。下の字は陰影の意味で「翳(えい)」です。右側の字「弓」、これは「て」と読みます。「国では手の字を用いる」とあり、もう一つは「勢(せ) 」と読んでおります。これは『和名抄』の一書にあります。「て」と「せ」、タ行とサ行は少し音が近かったと思うのですけど。備中国すなわち岡山県には、中世から現代まで「手庄」と呼ぶ所があります。

その次は、先程もちょっと触れました「贈於」。これには「曽於(そお)」と読みが打ってありますが、二百年後の源順が振ったのであって、和銅年間、少なくとも８世紀の頃には「贈於(そ) 」と読んだと思います。贈於君多理志佐(そおきたりしさ) と現在の読み方をしますが、贈於君多理志佐を『続日本紀』は別の所では「曽乃君多利志佐」と書いております。降伏した隼人ですけど、降伏した後、位を授けられております。上の方は「贈於君」とありますが、別の方では「曽乃君」とありますから、上の方も「そのきみ」と読んだろうと思います。

さて、その次、「クマソ」。記紀には「熊襲」と書いてありますが、風土記には「球磨贈於」と下の表現で書いてあります。ということは、これには二つの意味があるので、クマソと言っても、人間のことでなく、土地のことです。クマソ征伐といえば土地のことであったということと、もう一つは贈於はやはり「そ」と読んでいたんだということです。クマソを征伐したということを、記紀では「熊襲」と書いて、いかにもこわいものを征伐して強かったのだと言ってるようですが、風土記の、風土記と言っても九州には肥前国風土記と豊後国風土記の二つしか残っていませんが、その中に「球磨贈於」とあります。その他に播磨国風土記に「久麻曽」と出て来ます。中世・近世に至っても「曽(そ) 」と呼んでいたことは、建久八年の史料に「曽野郡」とあります。それから面白いのは、江戸時代に現在の霧島町・国分市一帯を「贈於郡(そのぐい)」と言っているわけです。「そのぐい」を一つの言葉と見て、「贈於郡郷(そのぐいごう)」と言っています。明治になって襲山(そのやま)・西襲山(にしそのやま)・東襲山(ひがしそのやま) というのが出て来ます。また「ぐい」というのは「郡(こおり) 」のことです。知覧でも、私の出身が知覧だもんですから、上郡(かみごおり) ・中郡(なかごおり) ・下郡(しもごおり) を「かんぐい」「なかぐい」「しもぐい」と言います。贈於郡も「そのぐい」だった、ということ。言いたいことは、「贈於」と書いてあっても、やはり「そ」だったということです。これを「曽於」というふうに二つに書いてあるのは『和名抄』だけで、あとの文献はすべて「そ」と書いてあります。

その次、15. これは日向国の「都於郡(とのごおり) 」現在も西都市に都於郡(とのごおり) があります。

19. は「宝飫」。穂国造(ほのくにのみやつこ) 。飫肥(おび)の「飫」ですね。宮崎県の飫肥。ところが「飫」の字が見えにくくて、目なれなかった所為か、「飯」になって、現在では「宝飯(ほい)」になっています。なお『延喜式』は宝飫、『和名抄』は宝飯と書いているようです。

最後の「呼於」。これも「乎(お) 」です。『古事記』の「紀国の男之水門(おのみなと) 」、中世の「男郷(おのさと)」、現在は「男里(おのさと)」。大阪府泉南市ですかね。

そこで、『和名抄』が二字の読みを入れたのは 3.の基肄（木伊）と、8.の渭伊（井以）、12. の頴娃（江乃）、14. の贈於（曽於）でして、これらは一番遠い所ですかね。肥前国、遠江国、薩摩国と大隅国、と。遠い所は耳の情報じゃなくて、文字からの入手ではなかったか。近い所は、山城国のものは紀伊（岐）とあるし、九州でも筑前国、太宰府に近い所は毘伊（比）だし、備中国は弟翳（弓）と都宇（津）。それから三河国、遠江国より一つ手前の三河国は宝飫（穂）です。和泉国のような呼於（乎）のような例もありますっが、ほとんどは二字に書いても一字に読んでいます。現代になってから文字力が付いて地名の読み方も文字に結びついて全部読むようになったというようなことを、二字化地名として考えた次第です。以上で説明を終ります。

平田　どうも有難うございました。印象の新しいうちに意見・質問を受けましょう。何か質問がありましたら出して下さい。私は未だ日本全国を回っていないのですが、たしか鳥栖あたりで呼ぶ山は基肄山(きやま) ですよね。それから、和歌山県に行ったことはないのですが、あれはなんですか。紀伊(き)と読むのですか。紀州のお殿様、てまり歌は「紀州のお殿様」ですよね。それから三重県の県庁所在地は「津」ですが、駅では何と発音するのですか。聞いた方はいらっしゃいませんか。「つー」と引っぱるんですか。ただ「っ」。現地でどういう読み方をするかということも、情報をつかむ必要があるでしょうね。

江平　独断と偏見ばかり申しあげますけれども。

平田　たしか郡名は贈於郡(そおぐん)ですけど、言われたように曽山さんとか。「そおやま」さんという方はいませんからね。それから曽木(そぎ)さんがいま

すね。

江平　今、私が申しあげましたことは一応の意見でして、「そお」と読んでもいいわけですよ。

平田　現在は「そお」と読んでいますけどね。

江平　古代の場合は「そ」と読むのがよかろうというような感じを持っています。

平田　二字にしろと、行政的に全国を統一して、三字は二字に縮めるわけですね。一字は二字にしろというわけで創られたわけでしょう。それが定着してしまって、うしろの意味のない文字までも読むようになったのでしょうからね。西都市の都於も、都於郡(とおのこおり)というのじゃないのですか。現在は。

江平　「とのごおり」、やっぱり。

平田　「とのごおり。」

江平　地名辞典を見ると「とのごおり」です。都於郡町(とのごおりちょう)とか言っています。今は西都市の中に入ってますけど。

平田　そういうのが欲しいんですね。現在、何と読んでいるかということ。

江平　今も「とのごおり」です。

平田　他にございませんか。

山崎　うしろの方に意味のない文字をくっ付けた場合でも、前の方の言葉で、意味の判るのがあるのか、どうか。

平田　うーん。まぁ、紀州の「き」は木が多いということでしょうね、樹木の木。それから 9. と10の「都宇」。これは「津」でしょうね。船着場の「津」。それから頴娃の「え」は、「江」でしょうね。入江の「江」。そういうふうに考えればいい。そしたら、「そ」は何かということになりますね、問題は。

江平　「そ」については、背中の「せ」を「そ」ともいう。背くの「そ」ですね。だから「クマ」はさっき話があった通り、隅っこ。これも霧島連山のうしろということで、まぁ本土中心の見方で隅っこの方。

平田　隅っこの方だ、という呼び名だろうと思うのですがね。

江平　ただ、一字の場合の語源というのは、仲々

平田　難しいですよね。

江平　難しいと思います。ただ、樋(ひ)はつまり「かけひ」のこと。鹿児島弁で「樋(ひ)」と言いますが、一字でも意味があります。

平田　それは古いかも知れませんね。

江平　そうですね、古い形ですね。

平田　樋(とい)が、樋(ひ)になったとよく言いますし、それも判らんじゃない。しかし、樋(ひ)という地名は多いですね。樋口とか樋渡とか。

江平　その辺のこまかいことは整理する必要がありますけど。

平田　もし質問が残っていたら、あとで一括して出してもらいましょう。次は山崎さん、説明してして下さい。

どっごん馬場・おいせどん川・ひとつ・はんの山・岩風呂けごん

山崎　私の方は説明も何もないのですけど、岩崎という部落がありまして、『岩崎郷土史』というのを最近出しました。その中から判らないのを拾ったのですけども。その中にも、どうだろうかというような書き方をしてあったもんですから、今日の例会をいい機会に、皆さんに教えて頂こうと思って出しただけです。「どっごん馬場」というのは、市役所の地籍の地名ではなくて通称名です。私は「六合馬場」かと思っとったんですけど、『岩崎郷土史』には「六坊馬場」と書いてありました。近所に文化財委員の先生がおられるので、そこに行って話しましたら、その先生は「六合だろう」ということでした。一町・二町の「町」にみたないという意味で自分は六合だろうと思っていたと言われました。いろんな説があって、果たして何だろうかと思ってるんですけど。

「おいせどん川」というのは昔はこの川のたもとに神祠があって、そこに肝試しに行くもんだったと言われていました。隠れ念仏みたいな感じで、お伊勢様を祀ってるというふうにしてあります。岩崎という所も隠れ念仏の所だもんだから、その所為かなと思ったら、地元の人々は伊勢さんというお婆さんの名前から出たんじゃないか、というぐらいにしかとってないみたいです。

「ひとつ」というのは『岩崎郷土史』の中でも何だろうかとしております。集落の中でもあまり建物も建ってなくて、川か道路か判らないような迫というか、そんな所です。一つ迫(ひとつさこ)という話もあれば、いやそれは違うんだという話だった、といろいろです。これも判りません。

「はんの山」というのは、郷土史を作る時に何だろうという話が出たそうです。人名の「半」から来たのだろうと片付けたそうです。

「岩風呂けごん」というのは判りません。宮崎と関係のある所のようです。宮崎の人たちとこの日は出掛けて行くという話です。岩崎の中ではないということです。のぞいたことがないから知らないのですが、何だろうかと思っています。

平田　遠慮なく質問を出して下さい。山登りの時六合目を「ドッゴメ」というようなことをいうのですか。まぁ「ロ」と「ド」はよく入れ替わるけど。

山崎　まぁ「六」に間違いないと思うんだけど。あとの「ご」が、いろいろと、わからんわけです。

平田　六合馬場というのが一番いいんだろうな。しかし「お伊勢さん」も「はん」も、おなごん人の名前？

山崎　「はん」は女の人かどうかは判りません。人の名前じゃないんだろうかということで落着いて郷土史を作る段階ではそういうふうになったというわけです。「半」は男の人の名前だろうと思います

平田　男に「半」という名前があるの？ありますか？

山崎　語尾に「～半」というのがあるんじゃないですか。例えば「半之丞」とかありますね。この場合、語尾じゃないですけども。

平田　それを省略した形？

吉川　どちらのことですか？

山崎　枕崎です。芦ヶ別府集落と言われている所なんですね。私は鹿籠という所ですけど、鹿籠郷のまぁ治安にたずさわっておったということで、非常にまとまりがあって気概がある集落です。

平田　ここにいる人達は、皆、初めて聞いたような話だろうと思うのですが、地元で年寄りの話を聞いて、それをまとめておくというのは大事なことでしょうね。

二見　この、伊勢どん。こういうのは、よく言いますよね。うちの叔母なんかは、シカとかテイとかケサとかって名前があるんですけど、皆、ケサどんとかサトどんとか、シカどんとかね、お互いにそんなふうに言ってます。

平田　人の名前のように言ってるけど、山崎さんの解釈は正しいと思います。伊勢神社すなわちそれを勧請した神祠があって、その側を流れている川と解釈すべきでしょうね。伊勢どんという婆さんが居て、そこの家の側を流れている川と解釈するのはどうだろうか。

二見　地名もそういう形で擬人化して行ったのでしょうか。お伊勢どん。

平田　「お伊勢さぁ」でしょうね、やっぱり。「お稲荷さぁ」と言うから。

二見　「どん」というのは、「殿」ということでしょう。

平田　そうですよ。鹿児島の敬語は難しいですね。他にそう言ったような類例に気付いた時には、また出して下さい。「ひとつ」は、やっぱり「一つ

迫」とか何かの省略でしょうね。「一つ」がよく付くのは「一つ橋」でしょうけどね。

吉川　「はんの山」というのは、島津さんの山ということですね。

平田　そんなのがあるのだろうか？

吉川　竜ヶ水の裏山は全部島津どんの山で、今はどうか知りませんけど、以前はあそこに住んでいる人たちは小作的な形でタキモノをとっては島津興業に出しとったのですがね。自分たちが使うタキモノは一応とって、島津興業に出す木はボロのタキモノだった、と。

平田　そういうことになると、肥後先生が詳しいのでしょうが、いかがでしょうか。

肥後　そうですね。その昔は、そうだったでしょうね。「はん」というのは。

平田　歴史解釈としてはそうなるでしょうけど。しかし、狩倉山(かくらやま) でしょうね。やっぱり、呼び方としては。

肥後　そうです。どういう地形ですか？「はんの山」というのは。

山崎　昔は山だったそうですけど、今はもう土地改良をして、そこの板敷集落の運動場になってるんですけど。

肥後　じゃー、丘ですね。

山崎　シラス台地の先っちょの方。

平田　はい、こういう地名に気付かれたら、また連絡して下さい。どうも有難うございました。次、浜崎さん、お願いします。

（郡）笠掛・尻掛・塩掛松（牧之内）魚菜・鼻面・毛込・クツ掛・スル掛・足加イ・一夜込（御領）四月金・盆小迫・横枕・世界（別府）シャケロ・瓶掛・津伏

浜崎　私は頴娃ですが、山崎さんと同じように判らんものをそのまま出してあります。ただ、以前に問題提起をした時にこれは手掛かりがありませんと言ってたものを、もう一回とり出してみました。特に、私がここにあげたのは「～掛」が多いということです。笠掛・尻掛・塩掛・弦掛・クツ掛・スル掛・瓶掛。何か関係はないのか。ちょっと判ったのは塩掛松。これは、昔、神祠があって、虫がわいた時なんかに母親に連れられて、ようお詣りしたもんだ、と。そういう話を聞いたんです。塩掛松もこれだけで、あとは全然手掛かりもありません。地形と言っても別に現地調査もしていないのです。それから牧之内のところに、魚菜(いな) 。これは海岸に関係のありそうな所じゃなくて、はるかに離れた、しかも標高 200m.ぐらいの所です。その隣に鯨ヶ元(くじらがもと)というのがあります。この前、発表しましたが、これもおかしいと思っています。鯨はいわゆる串良とか瀬々串とか串木野の海岸にある「のぼりくだりする」そういう所だとも云われています。それを登って行けば千貫平に通じます。それで、一応、屁理屈は付けてみたんですが、魚菜になりますと、全然見当が付かない。「足加イ」の方は、今、いい資料を頂きました。四月金は「しがっのかね」と、土地の人々は呼んでいるようです。横枕、これは近くに「横作(よんこつくり)」という地名があり、地割から来たのではないかと思います。横枕とか横作は地割の端のところじゃないかと思います。あとは全然見当が付きません。ご検討の上、教えて下さい。

平田　何か意見はございませんか。

山崎　最後のは、何と読むのですか。

浜崎　津伏(つぶし) 。「つんぼし」とも言います。これは知覧にもあります。まぁ、海岸から、1Km.ぐらい離れた所にあります。「津」というから海岸だろうと思えば、ちょっと離れております。世界というのなんか、「上世界」とか「下世界」という字名ですがーー

平田　「世界」。これは、あれですよ。小字名を明治の初めに付けよということで、結局役場の書記

さんとか村長さん達がやらされた。面倒くさがってげてげ付けてるわけです。そういうのが小字にはあります。特に南薩の方はーーーー

浜崎　これを書いた地主総代の名前は、はっきり判っています。

平田　いや、ですからね、「地名ものがたり」にも書きましたけどね、「名シラズ」という小字さえあるわけですね。面倒くさくなって。ですから、大きく付けようやということで、小字名に「世界」なんてのを付けた可能性はありますよ。それから、「掛」地名というのは、日本全国の小字に沢山あります。

浜崎　「掛」が？

平田　はい。今は、私は植物を選んでいますけどそれが済んだら「掛」地名を拾おうかなと思って、以前から気にはしてたんですけど。「掛」だけを小字一覧から拾い出して行ったら、既に無くなってしまった民間信仰が浮かびあがって来るような気がします。

浜崎　「笠懸」が歴史辞典に出てるようですが。

平田　そうですね。全国的に有名なのは沓掛・鞍掛ですよ。

浜崎　沓掛時次郎があるなー。

平田　これは日本全国に見られますから、「掛」だけを角川の小字一覧から拾い出して行っても面白いと思います。それから、横枕。柳田国男の『地名の研究』の中に、ちゃんと拾いあげてあります。

浜崎　どういう意味ですか、横枕は。

平田　結局、土地の区割りをして余った半端な所に横枕という地名を付けたという解釈をしていますよ。

浜崎　横作も。

平田　まぁ、そういうことでしょうね。

池田　苗字もある。

平田　横枕さんという？

池田　横枕という姓がありましたよ。

平田　それは、川内にですか。

平田　いや、私の小学校時代の同級生の女の方ですよ。名前は変な名前でしたけど、横枕という姓がありました。今聞いていて、あぁ、この人のだなと思いました。

二見　これは四月金(しがきん) と読むのですか？

平田　「しがつかね」じゃなかったかな。

山崎　「しがつかね」

二見　四月金(しがかね) ね。姶良町に目木金(めきがね)というのがありますね。目と木と書いて。

平田　目・木・金。なるほど。

浜崎　あぁ、そうですか。やっぱり、金(きん)ですか。

二見　目木金(めっがね)って言いますよ。

山崎　「くぼんたんぼ」は何ですか？

浜崎　「くぼんたんぼ」は、たんぼのことでしょうけど。

二見　やっぱり、何か金(きん)が出ますか？

平田　「シャケグチ」というのは何ですか？

浜崎　仮名で書いてありますね。

二見　酒口(さけぐち)ですね、当然。

平田　「シャケ」というのは、神社の「社家」という表現はあり得るんだな。それから、まさか魚とは関係ないだろうな。こっちまで鮭は下って来ていないでしょうね。それならば、神社の社家がーー

肥後　別府というのは、どういう場所ですか。別府という所は？

浜崎　その自然地形はどうも。地図は持っているのですが。

吉川　青戸の辺ですか？

浜崎　いや、別府は海岸の万。

肥後　海岸ですか？

浜崎　青戸は上別府ですから。

肥後　口家は、○○口の家だろうか？

浜崎　これはロ(ろ) でなく、口(くち)です。だから何かの入口だろうと思うのですけれども。

肥後　シャケ？

浜崎　津伏(つぶし) の「つぶし」。「いぶし」。どうも「伏」が多いんですよ。

平田　「つぶし」という地名も沢山目に付きますよ。

吉川　石垣方面の地名ですか？

浜崎　津伏は、石垣の海岸から別府の方に１Km.ぐらいあがった所。

吉川　石垣の方から青戸の方に、ずーっと上り坂だから。

浜崎　青戸にのぼったら、もうあそこは上別府。

吉川　はい。坂之口(さかんくち) という所になります

浜崎　「シャケグチ」「坂口」なぁー。

平田　坂を「シャケ」という所がありますか？

吉川　あの辺は独特な言葉ですからね。石垣から枕崎にかけては。

平田　あぁ、そうですか。

肥後　「坂口」か。

吉川　「坂」のことを「シャケ」というかも。

浜崎　「ハナヅラ」という地名は、どこか他にもありますか？

平田　「鼻面」というのは、肥後先生の家の側にもある。

肥後　「鼻面」は多いです。

浜崎　あぁ、そうですか。どういうふうに解釈されるのですか。

肥後　岬とかですね、それから、山の半島状の。

平田　出っぱった所。

肥後　あそこ、日当山にもあるんですよ。何ヶ所か？

平田　鼻面は多いですよ。

花園　国分実高の裏山。

平田　はい、あれですね。あそこの川が、鼻面川ですね。

吉川　知覧中学校の所にも、鼻面があります。

浜崎　知覧にもありますか？

吉川　はい、知覧中学校の上の所。

江平　舌状の先端の方を切った形の所。

浜崎　鼻みたいに突き出した所を言うのですね。

江平　そうです。

浜崎　なるほど。

江平　知覧中学校の校歌にも「鼻面岡の地よ」とあります。

浜崎　あぁ、これはいいことを聞いた。ついでに「毛込(けこん) 」は判りませんか？

山崎　これは「囲い込み」じゃないんですか。

浜崎　囲い込み？

肥後　うん、牧之内という場所からすると、囲い込み。

平田　そういうことになりますね。

浜崎　馬を追い込む。

平田　はい。

浜崎　それなら、一夜込 (いっちゃごめ) と、また関係が出て来ますかな？

吉川　「いっちゃごめ」と関係があるかも知れんな。

平田　「込め」ということで共通するだろうな。

浜崎　「けごめ」と「いっちゃごめ」。

平田　「牧」と関係する言葉でしょうね。

浜崎　なるほど。

平田　そちらの方から聞いた方が早いかも。

浜崎　これは、いいヒントを頂きました。盆小迫（ぼんのこざこ）。「盆」の付くものは何かないものですか。「迫」は大体見当が付くのですが。

山崎　ボンは「盆」じゃないのですか。

浜崎　お盆？

山崎　はい。そうじゃないんですか。違うんだろうか？

浜崎　お盆のようにくぼんでるという意味ですか

平田　そうでしょうね。

浜崎　お盆のような。ははぁ、くぼみ。

平田　盆のような小迫。

浜崎　はい。

平田　話を聞いて、ヒントを得て、またまとめて下さい。

浜崎　ありがとうございました。

可愛山・可愛山陵

平田　次は、江之口氏の分。皆に配っとって欲しいと、京都から送って来たのですが、まぁ、読んでおって下さいということです。彼はすでに２年９月２日と、地名研究会で発表する資料として打ち込んでるのですけども、９月には帰って来れないからと手紙には書いてありました。半年先の分として受けとめて下さい。彼が問題にしたいのは、可愛山。可愛山がどういう歴史的背景で出て来たかということでしょう。これはまた来年改めて連絡いたします。読んでおいて下さい。次は吉川さん、お願いします

中福良・川内

吉川　私は、以前、新聞投書で「中福良」をあちこちにお尋ねしたことがあって、まだそのことが残っているんだと思うのです。何通か回答を貰ったのですが、私が一番妥当ではないかと思ったのは、やっぱり、上の方から小川が流れて来て、堆肥みたいなものを蓄積して、結局まぁ豊かな土地になる。そしてまた、下の方は谷になっていて、その間の盆地が広くなり、人が住む所になった。その考え方が一番近いんじゃなかろうかと思ったわけです。

私の郷里は、都城市。昔、西迫村と言ったのがあるんですが、西迫村。そこに上川内(かみかわち) ・下川内(しもかわち) ・後川内(うしろかわち)・前川内(まえかわち) という部落があるんですが、いずれも中福良と似たような地形になっています。ですから、まぁ、中福良と同義語じゃないだろうかと思うのです。

この中で荒川内(あらかわち) ですが、ここも盆地なんですが、ここだけがちょっと「荒い」という字が付いています。高千穂峰の真下なんです。ここはもうしょっちゅう土石流が来たり、溶岩が流れておった所らしいんですがね、昔は。それで河川工事とか道路工事の時、深く掘り返したらですね、溶岩で焼けた松の杭や大きな岩がごろごろ出て来たそうです。それで、地名は荒川内というんじゃないか、と。

それから、質問状を出してから後で考え付いたのですけども、「川内」と書いた地名が、まだ２ヶ所あったのです。そこは小さな川内と書いて「小川内(おがち) 」と言います。それから、小川内のすぐ隣に「くぁのきがごち」というのがある。桑木川内。そこを「くぁのきがごっ」と言うのです。そこの２ヶ所だけが「川内(ごち)」と言うのです。サンズイの「河」を書いて「河内(こうち) 」と言いますけどね。あれの字が変って来たかも知れんと思うのですけど。それからこれもある先生の書かれたもので、「桑」の付く地名は崖崩れの多い所だ、と。桑木ヶ川内という所は、そのような場所です。

都城市にここの村が編入させられてから、上川内・下川内・後川内の三つを合併して「美川町」となりました。「川内」が三つあるから「三川」というのだろうと思うのですけど、「三」を「美」しい川の町に変えています。

それから、後で「竹山」というのが出て来るんだそうですけど、ここの下川内という所にも「竹山」という部落があります。小さな部落です。以上です

平田　はい。何かコメントはございませんか。

吉川　それから、慈眼寺。「ジゲンジ」か「ジガンジ」かは、この間、新聞に投書が出ていました。あれを、ただ、出しました。

平田　慈眼(じげん) 公にゆかりがあるから「ジゲンジ」が正式でしょうね。しかし、小学校では「ジガンジ」遠足と、皆、言ってますから、どこで「ジゲ

ンジ」と「ジガンジ」が変ったのか、よく判りません。それから川内(かわち) というのは、大水の時、水が増した時、川の中に入るような地形の所だとされています。「こうち」も似たようなことだろうと思いますけども。

吉川　どの部落も、いくら大雨が降っても水びたしになるような所はないのですが。

平田　あぁ、そうですか。

吉川　川が低い所を流れていまうから。

平田　じゃー、川内は「川」にとらわれちゃいけないですかな。

二見　素朴な質問ですけど、鹿児島県の川内というのは、同じ字を使いながら、最初から「せんだい」と読んでいたのですか。

平田　いや、あれは、後です。

二見　後ですか。

平田　はい。川内山称名寺というお寺の山号からです。

二見　例えば、こう書いた場合には川内(かわち) と読むのが普通ですか。

平田　えぇ、そうです。しかし、「せんだい」という地名は別にあったと思います。それと「川内」を結び付けたと思います。

吉川　私は今さっき川が低いと言いましたけど、浸食されてあぁなったかも知れんですよ。

平田　まぁ、常識的な地形地名としての川内は、増水した時、川の中にあるからというのが地名語源辞典あたりの解釈です。それから日本全国の「良」という地名を調べにゃいけないなぁと思っているのですが、「福良」とか「由良」とか。「中福良」は柳田国男も中がふくらんでいるからという解釈で中福良に飛び付いたと思うのですけれども、上福良があったり下福良があったりしますからね。「福良」という地名の分割だと思うのです。「福良」「袋」は同じような地形だと柳田国男は言っていますが、私はそれも掛詞としてあったとは思いますが、福良とか福浦とかは「福」という瑞祥地名に由来するもので、そういう意識の方が強いような気がするのです。「ふくらむ」という掛詞があったことは否定はしませんけども。日本全国の福良という地名を全部調べる必要があろうかとも思います。

江平　「豊」という字を「ふくら」と読むのでしょうね。藪藩名勝考の14ページに、「豊」という字を「フクラ」と読んでいます。

平田　「フックラ」ですか？

江平　どういうことでそう書いたのか知りませんけど。

平田　「豊(ﾌｸﾗ)」であれば顔がフックラとしているのでしょう。何ページですか？

江平　14ページの下の段。

平田　14ページですか。あぁ、ありますね。前から 9行目。下の段。

肥後　豊(ﾌｸﾗ) ですね。

二見　川内(せんだい)の方は、関係ないですね。

吉川　この本は手に入りますか。

平田　どうだろう、これは。お気付きになりませんか。あるとすれば春苑堂の２階の郷土コーナーにあるかも知れません。もう１時間半しゃべりっぱなしですから疲れましたね。５分ばかり休憩しましょう。

水流・神子と合志・紫尾

平田　次は、大田さんお願いします。

大田　私は鶴田町に住んでるのですが、鶴田町は４校区の大字になっています。鶴田に居りながら、４校区の地名がよく判らないものですから、先生方にいろいろお尋ねしたいのです。第16回例会の際に「水流」を「ツルむ」という説明をされましたが、その「ツルむ」がまだ出ていなかったようです。「ツルむ」というのは、どういうことから来たのでしょうか。それから「シビ」について論議されたようでしたが、「シビ」というのがどういうところから来たのか。「柴引」とか出ていたのですが、どこから来たのでしょうか。

平田　はい、それと神子ですね。

大田　はい。神子は西暦 700年の頃に、肥後国から移住して来て付けられたと云われています。本当に神子に移住したのかということが一番知りたいことなんですが。その頃だったら、隼人の反乱の頃だから、こちらの方は危険な状態にあるので、鶴田の神子あたりに移住したものだろうか。その辺を聞きたいのですが。

平田　うしろの方から行きましょう。薩摩国府を守るために、また隼人を教導するために、肥後国から移住したと云われています。移動地名としては宅万(たくま) という地名があります。中郷に宅満寺というのがありますから、あの辺だというのはすぐ思い付くわけですけども。肥後国に合志郡というのがあるから、その辺の人たちが移って来たんだろうと「神子(こうし) 」という地名に結び付けたのでしょうけど。

大田　移住したということは、考えられるんですか？

平田　そういう説なんです。『鹿児島県史』のですね。だから、その痕跡を残すものが考古学的にあるのか。例えば、肥後国の様式を伝える土器などが出土するのか。その辺は、まだ考古学的に確かめられていないのじゃないでしょうかね。それと、鶴田とか神子あたりにある神社が、肥後国の流れを汲むものであるとか。そう言ったのは、やっぱり地元の人が裏付けて行かなければ。私なんかは鶴田へ行ったこともないんでね、それ以上踏み込んで行けないわけですよ。

大田　それと、『神崎町史』を見ますと、神崎庄の地名なんかが全部鶴田町の中に入っているんですね。

平田　あぁ、肥前国の神崎庄ですか。

大田　鶴田町に二つ、神崎町に二つあるんですけれども。鶴田の地名が。「こうし」というのは、向うでは「高志」になっています。

平田　あぁ、そういうのが神崎庄にあるのですか

大田　はい、「シビ」については向うでは柴引の柴と、この尾の字が書いてあるんですよね。柴尾。

平田　それは柴尾(しばお) と読むんではないのですか。

大田　「シバオ」と読むのか、「シバヒキ」と読むのか、「シビ」と読むのか、それは知りません。

平田　「シビ」は第16回例会の時に話題にはなりましたが、結論は出なかったと思うんですよ。ただ「紫尾(しび)」なんていう漢音の付いた地名というのは、何か意味がありそうですね。メモをとっておけばよかったのですが、何の本だったか、読んだ本を忘れたのですけれども、仏教関係の中でですね、「シビの山」という山が中央にあって、真ん中の山という意味があるらしいですね。

大田　はい、それで、525年に空覚上人が堂を建てたという記録が『祁答院史』に出て来るわけですよね。

平田　いや、私が言いたいのは、仏教用語の中に何か「シビ」という山があって、それが仏教的な世界の中央の山、須弥山(しゅみせん) みたいな意味だったようです。その時、そのページ数やらですね、メモをとっておけばよかったんですけどもね。そういう用語があると思いますから、お寺のお坊さなたりで物知りの人に聞けばと思います。案外そっちの方から突っ付いた方が早いんじゃないかなと思いますけどね。第16回例会の話では、例えば柴引(しばひき)が訛って「シビ」になったのだろうかというのが『藪藩名勝考』にありましたが、そういうのは証明することはちょっと出来ませんからね。ただ感覚的に訛ったんじゃないかという説を立てる人は多いので

ですけれどもね。

大田　まぁ、いろいろ説はあるんですけれども。徐福が冠嶽に行って、冠嶽から紫尾山に行って、その時紫の緒を落としたとか。そういうような説もあるのですが。

平田　その徐福伝説はいつ頃からあるのですか？

大田　市来先生なんかが、やはり、そういう説を言っておられた。

平田　市来家隆先生ですか。

大田　祁答院町の誰かも、それを書いたと思いますけど。

平田　あぁ、そうですか。じゃー、あれですね。これにはこんな説がある、これにはこんな説があると、やっぱりきちんと、地元の人が整理をされて、それからこれはどうなんだろうかと議論して行く。そういう作業が必要じゃないでしょうか。

大田　そうでしょうかね。私なんかよく判らないもんですから。

平田　いえ、いえ、私なんかも判りませんよ。地元の人が一番情報を知ってると思うのですね。地名に関しての情報は。ですから土地の年寄の話なんてのは何も卑下することはないんで、土地の年寄がこんなことを聞き伝えてるなんてことをですね、きちんとまとめておくという作業は大事なことだと思いますよ。

大田　何せ、伝説のきちんとした整理が出来ていません。後からとって付けたような伝説はあるのですけど。

平田　いやいや。

大田　紫尾の神興寺の説明に石童丸が出て来るんですよね。

平田　はぁ？

大田　あれなんかは、全然時代的に合わんわけですよ。

平田　はぁ。それはそれで片付けられたらいいと思うんですよね。

大田　私はどうしても信じ切れないものだから、伝説というものをもう一度あたってみたら判るんじゃなかろうかと、自分自身じゃ思ってるのですけれど。

平田　ただ、私が－－－－

大田　道心という坊さんのことが、石塔なんかに出て来るんですよ。出て来るのだけども、室町あたりですもんね。

平田　はぁ。

大田　道心と道真。まぁ、二人いるわけですよ。

平田　はぁ。

大田　御供養殿を建てたという大円という人が知られていますが、御供養殿を再興して建てたというのも元禄時代です。石童丸とは全然時代が合わんわけです。

平田　いや、それはそれでいいんじゃないですか

大田　紫尾についても、市来先生あたりはその徐福のことを要するに皮のことにとっているようで、『祁答院郷土史』もそんなふうに書いておったようですけど。

平田　うーん。しかし、徐福なんてのは、どの頃から作り出されたのか。例えば、冠嶽に徐福がやって来て煙草を植えたとかいう話がありますが、タバコなんてのはコロンブスが新大陸を発見してから世界に広まって言くんですからね。その辺の話というのは作られた荒唐無稽な話になりますが、それでもいいと思うんですよね。それに振り回される必要はないわけですから。

大田　その次の「神子」ですが、鶴田では「神子（こうし）」と言うんですね。そして、菊池町の方でも合志（こうし）と読んでおります。こっちでは合志（こうし）としていますが。

平田　それを「こうし」と読むんですか。それは面白いな。

大田　それで、古い時代は下の方に書いてあるような加波志であって、後で皮石に変り、713年に今の合志に変ったと書いてあるんですけどね。

平田　はぁー。漢字は後から当てただけですからあまり気にすることはありませんが、菊池郡の方で今でも「合志（こうし）」と言っているのは面白いヒントですよね。地名を研究する場合、同じ音の地名というものがどう広がって行ったかということを一つ一つおさえて行かなければいけないと思うのです。

大田　それで、この皮石（かわし）ですね。この皮石から考えられるのは、薩摩郡の避石郷。

平田　避石（ひらし）？はい、はい。

大田　避石（ひらし）が出て来ますね。そう言った場合、その同じ時代であれば、向うから移住して付けたのであれば、こっちの方が近いんじゃないかと思うんですよ。

平田　薩摩郡の避石郷は今日配った第28号にまとめてありますが、「ひられ石」という地名があり、これが薩摩郡衙の解釈としては一番近いだろうと思うんですよ。それから、江平先生。「平礼石（ひられいし）」という地名が、大分県にも同じ漢字を書いたものがありましたよ。

江平　あぁ、そうですか。

平田　大分県にも「平礼石」とあり、びっくりしましたけど、何だか面白いと思いました。それから今出た合志（こうし）もそうでしょうし、同じ地名というのは、どっちが先かと後かということを調べる必要があると思うのですね。

大田　それで、肥前国の高来郡に神代というのがあって、神代（かみしろ）。

平田　神代（かむしろ・こうしろ）ですか。それでね、大田さん、さっきから面白いなぁと思ったのは、肥前国神崎庄の地名と鶴田の地名が共通するのが多いと云われたことです。肥前国とどういうつながりがあったのかを追っかけた方が面白いのじゃないですか。

大田　まぁ、そういうことで鶴田の神子は、肥前国の方の－－－－

平田　ですからね、それをずーっと調べて行かれて、肥前国とどうつながるのかを調べられた方が面白いだろうと思うのです。頑張って下さい。

大田　言葉にしてもですね、肥前の方が近いのですよ。川内・東郷・樋脇あたりは肥後の言葉に近いのですけども、祁答院地方はほとんど肥前の言葉に近い。

平田　だから、それを証明されたら面白いのじゃないかと思いますが。

大田　大した力もないので。

平田　遠慮することはないと思いますよ。

竹山（たかやま）・竹下

平田　二見先生の竹山・竹下に移りましょう。

二見　どううも貴重な時間を済みません。「竹山（たかやま）」というのは、私が育った私の祖先の土地なんです。普通は「たけやま」でしょうが、「たかやま」と言います。それで、その読み方からいろいろ考えたのですが、うちの先祖はどうも肝付氏の家来らしくて、中世の頃、大崎の方から加治木に出て来て、喜入まで移封され、喜入からもう一遍加治木・溝辺に入った一族らしいのです。それで、肝属郡あたりを歩いてみると、溝辺の地名と共通するものが目に付きます。例えば論地なんてのがありますが、あちらの方にも論地というのがあります。「竹山」というのも鹿児島県のあっちこっちに相当あるようなので、ずーっとつないでみたらどうかなと思ったのですけど。一方、「たかやま」とも読むので、あるいは肝属郡の竹山（たかやま）と関係があるのかなと思ったりしています。それと今一つ、溝辺に竹子（たかぜ）という地名があるんですよね。竹の子と書いて「たかぜ」と読むんですけど。それから、うちの近くに竹下（たけした）があり、竹口（たけぐち）というのが小字としてあります。大字は有川（ありかわ）ですが

竹子からあの辺にかけては暴れ川が多くて水が豊富です。まわりはいっぱい山と川で囲まれた所で、小字なんかも竹山のほかに竹下、中山、竹口、川窪とかね、ナメリとかヌクミズとか、山とか川に関わる地名ばかりです。それで地名を自分たちの先祖が由来したことと結び付けることも考えながら、竹山(たかやま)というのは一体どういうふうな調べ方があるのかと、その研究の方法を教えて頂こうと思って、今日は折角参りましたので話を出しました。

平田　要するに、日本全国の「竹」の付いた地名を全部リスト＝アップして、どういう特徴が現れるかというのを見抜けばいいんじゃないですか。竹の山を「たかやま」と読む例がどこにあるのか。まずデータを集めることからでしょうね。他人が集めてはくれませんよ、データは。

吉川　竹は「タカンバッチョ」の例がある。

平田　「タカンバッチョ」「タカツッボ」とも言いますからね、鹿児島じゃ。

二見　竹は「タカ」と言ってもいいのですね。

平田　そういうのですよ。そういう場合もあるということです。

二見　それでは「たかやま」と言っても、もともとは「竹山(たけやま)」のことでしょうね。

平田　竹の生えた山のことでしょうね。それと、「竹」のついた地名では「竹下」というのが多いですよ。「岩下」も同様です。やっぱり岩の下とか竹の下というのは崩れないからでしょうね。集落になり易いのでしょう。

二見　あぁ、そうですか。

平田　岩下なんてのは、びっくりするぐらい多いですよ、鹿児島県の地名では。普通なら条件の悪そうな所ですけどね。

池田　岩下・岩本。「本」があったり、「元」があったりしますが。

吉川　島津さんが持って来たというのは孟宗竹であって、それ以外のものは昔からあったのでしょうか？

平田　それは、あるでしょう。

二見　よその地域で竹山(たかやま)なんてのがある地域はないのかな。これは、まぁ、自分で探さなきゃいけないのですけど。

平田　そりゃ、そうですね。（笑い）

浜崎　熊本での全国地名研究会の時のレジュメの中に危険地名として「柿」が入っとったんですね。「柿」。とにかく崩れ易い所に、柿を植える。早く育てるためには馬の爪を下の方に埋めておく。そうすると生えて来るというようなことが書いてあったのです。

平田　あぁ、小川さんですか。

浜崎　建設省のなんとか。

平田　小川豊さんでしょう。

肥後　小川先生ですね。

浜崎　そう言えば、田舎の溝には大抵金竹(きんちく だけ) が植えてあるようですね。

二見　境目の所に金竹が植えてありますね。

平田　麓集落では屋敷の境に植えると同時に金竹の繊維は火縄にしたのですね。

二見　あぁ。

平田　種子島銃の。

二見　じゃー、全国調査をそろそろやらにゃいかんですね。

平田　頑張って下さい。（笑い）

二見　はい、どうも。

平田　木場は、いいですか。

二見　えぇ、もう時間がありませんから。

向花（むけ）

平田　それでは、向花について。

花園　「むけ」。現在は漢字で「向花」と書いております。その地名のある所は国分市の府中、国衙にあたる所と国分市役所の間と言いましょうか、

そういう地名があります。以前から疑問に思って、何とか解明出来ないかと思っておったのですけれども、似たような地名がなかなか見付かりません。さっきから話が出てますように、解明の手掛かりになりそうなのが出て来ないわけですが。『国分郷土史』に「府家」という表現があるんですね。そういうのと、何か関係があるのかと思ったりしてるのですけどね。

平田　「ふけ」というのは、あれですよ。「湿地地帯」をいう表現で、東日本に「ふけ」という地名が多く見られます。国府に府に家と書いて「府家」という解釈は、他の国府にも全然ないわけです。だから、大隅国だけいきなり「府家」という解釈が出て来るのは疑問です。それが向花(むけ)に変ったとの解釈は無理があります。「むけ町」というのは鎌倉時代には地名が出て来るのではないですか。『旧記雑録』の古いところで「むけ町」というのが出て来ます。「新町」以前だと思います。だからあの辺はいわゆる国府に付属した市場町ですかね、そのような形で発達した「町」じゃないですかね。「向花」というのは私も変な地名だなと思います。もともと有卦とか無卦というのから来たのではなかろうか。「むけ」とは、あまりおめでたくない嫌な地名ですよね。だけど－－－

浜崎　「花」を「け」と読むのは、枕崎の花渡川(はどがわ)がある。

平田　鹿児島県の「け」は難しいですけどね。

浜崎　これとは別ですか。

平田　似てはいるけど、これは当て字だろうと思います。

文化財としての地名

平田　さぁ、もう12時を過ぎましたから、最後は池田さんの提案に行きましょう。川内市で何か問題になっているのですか。

池田　いや、実はですね、私どものグループで、市長と議長に地名をあまり勝手に変えないで欲しいと陳情したのです。まだ充分研究出来ていないものを勝手に変えられると、判らなくなるということでやりました。さいわいに陳情を理解して貰えたのですが。この前、文化財審議委員会の席上で地名の話が出まして、これは余談として地名そのものを文化財にしてしまえという話が出まして、そういうことを作りあげてもいいものかどうかということを、そういうものを準備していいものかどうかを聞こうと思って来ました。地名を無形文化財として。

平田　それは、どうだろう。川内市あたりは、わりと理解すると思うのですよね。例えば薩摩国府とか国分寺跡は、私が川内高校周辺の小字名を調べて明らかになったことを知ってるわけですから、地名は歴史を知る上で大事だと理解し易い土地柄ですからね。大事だから保存しろということはいいことでしょうけれども、文化財として残せとなると、今度はどういう活用の仕方があるか、ということを聞かれたら、対応できるのか。そんなことを云わなくても、地名というものは大事なんだよと、自然に判らせた方がいいんじゃないでしょうか。

池田　そこまで行った方が消えなくていいんじゃないかと考えて、消えてなくなるよりも残しておきたい、と。例えば、川内(かわうち)と書いて「せんだい」と読むこと自体が大事なんだという考えです。

平田　川内(せんだい)を川内(かわうち)と書いて？

池田　いや、それは一つの例ですよ。

平田　「せんだい」と読むことも意味があることでしょうけどね。

池田　そういう考えです。そこまで考えなくてもいいですか。

平田　その辺、どうですか。

池田　地名というものを取扱う上から、研究して行く上から、ですね。

平田　しかし、あれですよ。地名には、例えば嫌

な地名を昔の人が付けた場合もあるでしょうしね。それから、今の人たちはいい地名を付けたがる場合もあるでしょうからね。どうなんだろう。

池田　嫌な地名もそれなりに意味があったと思うのですよ。

平田　はい。地名は歴史を探る手掛かりになる、と。もっと極端なことを言えば、土器とか石器以上に、昔の言葉を残しているから歴史を知る重要な手掛かりになる、と。まだ、ほとんど研究してないんじゃないか、と。それをいうだけでいいんじゃないですかね。文化財に指定してどうなりますか。逆に言えば。

池田　例えば、地区整理だとか河川工事とかで河川敷がなくなってしまいますね。敷地が完全に、そういう所がなくなってしまう。

平田　なるほど。

池田　ここはかつてこういう地名があったんだぞということを残しておきたい。

平田　そういうことを言ったら、行政はなおさらあれでしょう。埋蔵文化財でも調査してね、記録に残せば良いという姿勢ですからね。地名なんていう実体のないものを、どうやって残せというのだろうか。

池田　まだ完全に拾いあげられていないですね。お互いに。

平田　だから、それに対してですね、行政側はもっと積極的にね、ーーー

平田　行政の中にそういう調査機関を積極的に設けるべきだという、そっちの方で叩いた方がいいんじゃないですか。

池田　ストップすればいい。

平田　うーん。ストップしたって、そっぽを向かれちゃいますよ。

池田　勝手に変えちゃってるんですよ。ご存知だろうと思うのですけども、川内に「瀬越(うそごえ)」という地名がありますね。

平田　はっ？

池田　瀬越(うそごえ)。

平田　あぁ、はい。

池田　あれが瀬越(せごえ)になっている。

平田　なるほど。

池田　「瀬越」を係が読めなくて、ケモノ扁をサンズイに見ちゃって、瀬越と書いて仮名タイプにしてある。今度は再び漢字で入れる時には瀬越になっている。変ってしまうか、こういうことになるので残して欲しい、と。こう云うておる。

平田　はい。やっぱり、瀬越はーーー

池田　本当なんだ、と。

平田　本当なんだ、と。だから、データとしてこういう資料がある、と。こういうふうにコンピューターで変えられた。旧へ返せと、ね。そういうことで喧嘩したらいいんじゃないですか。

池田　なかなか、そうなってくれないから。

浜崎　私も頴娃町の文化財委員をしていますが、文化財保護法のどの項目にあたるのか検討したことがあります。埋蔵文化財じゃない、何じゃろかい、と。

池田　無形文化財になります。

浜崎　それで、地名は方言の中のどれが妥当なのか、どれか判らんが、とにかく面白いから調べてみようということになった。ところが、あれはよく見てみると、古記録というのがあります。名所旧跡ではないですね。古記録というのがあります。この字地名は明治22年の役場が出来た時に、全国的に調べて報告した。今はそれが登記所にちゃんと土地台帳で載っとるわけですね。役場の方は税務課の方で保存して棚が作ってある。その仮名が出鱈目なんですよ、実際言うと。若い職員がやっとる。だからこれははっきりした公簿で、古記録にある言葉だと言ったようなことにすれば、文化財保護法に合って来ると思うのですが。そんなのしか、考えられないですね。

池田　今日は提案だけです。

二見　仮名付けの問題が出ましたけど、鹿児島の場合、かなり方言がありますよね。さっき竹山を出したのは、これを通称で「たかやま」と呼んでるわけですけど。私のところの地名にも川窪と書いて「こっぽ」と読むんですよ、貫水と書いて「ぬっみっ」というのですよ、普通は。ところが、例えば貫水の方に「貫水峡(かんすいきょう)」と読ませるのですけど、今ソウメン流しの名所になってるのです。勝手に後世の人たちが現在読みにしちゃうわけです。だから地名そのものの読み方も研究を要するものがありますね。地名を大事にするという時に、原点を今作るということで、もうちょっとやらなきゃいけないんでしょうが、ともかく明治22年にどんな読み方をしているか、その時どう読んだかによって違うんですよね。仮名付けというのを聞いて非常に読みにくい文字もあるし、ちょっと難しいなと思ったのですけど。

池田　読み方は、後の問題です。まぁ、そういうことです。今日は提案だけです。

平田　はい。一番大事な根本的な問題だろうと思います。大事なことは、やっぱりこつこつと調べて行くこと。これは時間がかかるでしょうけど。その上で、皆を納得させることでしょう。

池田　一応、川内市ではいわゆる文化財審議会の方では、私たちの陳情を採択する方向です。

平田　あぁ、そうですか。進んでますね。

池田　はい、考えて欲しいという陳情です。

平田　それでいいんじゃないですか。そして、大事なんだということが判れば。

山崎　鹿児島市は、石に彫って立ててるじゃないですか。石燈籠通(いしどおり)とか、何とか。

平田　あれはね、ロータリー＝クラブやライオンズ＝クラブの人たちの仕事ですよ。一つ一つの、何とかの筋というのは。

山崎　だから、文化財の委員の方がそのつもりで頑張ったら。

平田　頑張ったらーーー

山崎　それで、ちょうど、いいわけですよ。

池田　いや、地名の大事さが、まだ徹底してないから、こちらの方で私の考え方を聞いて頂ければ有難いと思って出しました。

平田　難しいな。

池田　あんまり、問題が複雑にならんところで。

平田　判りました。

吉川　私がさっき申しました先程の川内(かわち)ですけども、あれが後川内と上川内と下川内になっていて、三つの川内を、「美川」というようになってしまった。あれなんかは私たちの年代までは判ってますけど、もう後の世代になると忘れられてしまうと思うのです。

平田　そういうのを、記録をきちんとしとけばいいと思うのですね。

二見　何か地名由来碑みたいなのを作っておけばいい。

平田　難しい面もあるんですよ。嫌な地名がありますからね。たとえば悪谷(あくだい)なんてのは。そしたら、現在住んでる人が嫌がるわけでしょう。やっぱり現在住んでる人にとっても地名は大事だから。古い地名も、新しい地名も、どっちも大事ということじゃないでしょうか。そこはよく説得すればいいと思いますが。

じゃー、今日はご苦労さまでした。次の発表者がいませんが、誰か希望者はいませんか。

國之事加佐以下十字、英多以下十二字、並據一本補、倭、原作和、今從類史一七三丁本

從五位下、據上文和銅二年正月紀補、原作詮、據谷朱一本及紀略改

制、據谷朱一本補史、金寫本无○亦宜、原闕二字、

商者聽之。○夏四月乙未。割丹波國加佐與佐、丹波、竹野、熊野五郡、始置丹後國。割備前國英多、勝田、苫田、久米、大庭、眞嶋六郡、始置美作國。割日向國肝坏、贈於大隅、姶羅四郡、始置大隅國。大倭國疫、給藥救之。○戊申、頒下新格并權衡度量於天下諸國。○己酉、因諸寺田記錯誤、更爲改正、一通頒所司、一通頒諸國。○乙卯、授從四位下安八萬王從四位上、正五位下大石王從四位下、從五位上益氣王正五位下、從四位上多治比眞人池守正四位下、正五位上百濟王遠寶從四位下、從五位上大伴宿祢男人正五位上、從五位下賀茂朝臣吉備麻呂正五位下、從五位下笠朝臣長目、穗積朝臣老、小野朝臣馬養、調連淡海、倉垣忌寸子首並從五位上。讚岐國飢、賑給之。始制五位以上同位階者、因年長幼以爲列次。○丁巳、制、銓衡人物、黜陟優劣、式部之任、務重他省、宜論勳績之日、無式部長官者、其事勿論焉。○五月甲子、制、畿內七道諸國郡鄉名著好字、其郡內所生銀銅彩色草木禽獸魚虫等物、具錄色目、及土地沃墳、山川原野名号所由、又古老相傳舊聞異事、載于史籍、亦宜言上。

部里名	頁限

凡郡不得過千戶、若餘五十戶以上者、分隸比郡、地勢不宜分者、隨狀立別郡、其不滿百戶者、隸入他郡、若不得已而聽分者、別錄申官。

凡諸國部內郡里等名、並用二字、必取嘉名。

凡諸國貢調庸者、越後、佐渡、隱岐三國、並限明年七月、長門國限四月、伊豫國限二月、但宇和、喜多兩郡限三月、土佐國限二月納訖、自餘如令、其陸奥出羽兩國、便納當國、西海道納太宰府（其出納準並調正稅帳使申送）

凡未進調庸物、長門國伊豫國宇和、喜多兩郡、明年六月卅日、越後、佐渡、隱岐等國、十二月卅日以前進訖、

自餘具交替式。

西海國第五十九

筑前筑紫乃三知乃久知　筑後筑紫乃三知乃之里　肥前比久知乃　肥後比乃美知乃之利　豐前比久知乃美知乃之利　豐後比久知乃美知乃之利　日向比宇加乃保　大隅於久知乃美須　薩摩散豆萬　壹岐島由岐　對馬島佐加之萬

日向國　管五田四千八百餘町正公各十五萬東本稻三十七萬三千百十束雜穎七萬三千百十束　臼杵宇須岐　兒湯古由　那珂中國府　宮埼三也佐岐　諸縣牟良加多

大隅國和銅六年割日向國四郡置大隅國天長元年停多禰島隸大隅國　菱刈比志加里　桑原久波良　大隅　姶羅阿比良　肝屬毛岐豆岐　贈唹曾於國府　熊毛久末介牟　馭謨五介

薩摩國　管十三田四千八百餘町正公各八萬五千東本穎二十四萬二千五百束雜穎七萬二千五百束　出水伊豆美　高城大木加　薩摩　甑島古之萬　日置比於岐　伊作伊佐久　阿多　河邊加波乃倍　類娃乃江　揖宿以夫須岐　給黎岐比佐　谿山多仁也末　鹿兒島古志萬

大隅國第百三十二

菱刈郡

羽野　亡野　大水　菱刈　桑原郡　大原　大分　豐國　答西　稻積　廣田　桑善　仲川國用中津川三字　贈唹郡　葛例　志摩國用島字　阿氣　方後　人野　大隅郡　人野　大隅　謂列　姶鵜　禰覆　大阿　岐刀

姶羅郡　野裏　串伎　鹿屋　岐刀　肝屬郡　桑原　鷹屋　川上　鴈麻　馭漁郡　謨賢　信有　熊毛郡　熊毛　幸毛　阿枚奇三郷

1. 紀伊□（国名）〔「木国」（天平宝字八年）〕
2. 紀伊岐（山城国・郡名）〔「許乃国」（風土記）〕
3. 基肄（伊木）（肥前国・郡名）〔「基肄郡、郷陸所、駅吉所、城吉所」（風）〕
4. 雑怡□（豊前国・郡名）
5. 肥伊□（肥後国・郡名）〔「火国八代郡火邑」（風）〕
6. 斐伊□（出雲国・郡名）〔「斐伊郷、本字樋」、「樋速日子命坐此所、故云樋神能三年、改字斐伊」（風）〕
7. 眩伊（筑前国・郡名）
8. 渭伊（井水）（遠江国・郡名）
9. 都宇（津）（備中国・郡名）
10. 都宇□（近江国・安芸国・郡名）
11. 由宇□（周防国・郡名）
12. 頴娃（乃江）（薩摩国・郡名）〔「元のことをり」（文永四年島津家文書）〕
13. 弟鬚（互）（周防国・郡名）／勢（備中国・郡名）〔「手庄」（中世～現代）〕
14. 嚼啖（音）於（大隅国・郡名）〔「贈於君多理志佐」＝「曽乃君多利志佐」（続紀）「熊襲」（記紀）＝「球磨贈於」「久麻曽」（風）「曽野郡」（建久八年図田帳）、「贈啖郡郷」（江戸期）〕
15. 覩啖□（日向国・郷名）〔「都於郡」（とのごおり）（中世～現代）〕
16. 都於□（石見国・郷名）
17. 斗意□（備後国・郷名）
18. 野応□（紀伊国・郷名）
19. 宝飯（穂）（三河国・郡名）〔「穂国造」（先代旧事本紀）「宝飯」（現代）〕
20. 呼啖（乎）（加毛国・郷名）〔「紀国男三水門」（記）「男郷」（中世）「男里」（現代）〕

古代國語の「え」の假名について

四　穎と娃

（薩摩國の郡名に「穎娃」といふのがあつて、三代實錄（卷四十八、仁和元年十月九日の條）に「薩摩國言（中略）穎娃郡正四位下開聞明神」とあるをはじめ、延喜式神名帳及び民部式、並に和名抄などに見えてゐる。その中、和名抄卷五には、

穎娃江乃

とあつて、そのよみ方を註してゐるが、これによれば、穎娃はエノであつて、「穎」はエ、「娃」はノを表はすもののやうに見えるけれども、娃は漢音アイであつて、決してノのやうな音は無い。想ふにこの郡は本來エといふ名であつたのを、國郡郷の名を制定せられた時、漢字二字で書く爲に、エの音節の母音を長くして「穎娃」と書いたもので、キの國を紀伊、三河國ホの郡を寶飫と書いたと同樣であらう。之を和名抄に「江乃」と訓じたのは、文字では「穎娃」と書いても、語としてはエであつた爲、「紀伊國」「寶飫郡」を文字にかかはらず、キノクニ、ホノコホリといつたと同じく、「穎娃」郡をエノコホリと呼んでゐた爲、後には「穎娃」をエノに當るものと考へるやうになつたからであらう（紀伊をキ、寶飫をホと呼んだ事は、和名抄に、山城國郡名「紀伊」に「岐」と注し、三河國郡名「寶飫」に「穂」と註してあるによつても明である）。

「さて、右に述べたやうだとすれば、「穎」及び「娃」は共にエの假名であるが、そのエはア行とヤ行の何れに屬するものかといふに、和名抄は朱雀天皇の承平年間の著で、既にアヤ二行のエの混同した時であり、殊にその郡郷の部は著者の原作にはなく、後になつて加はつたものと考へられる故、たとひ「江乃」の「江」が元來ヤ行のエであつたとしても、和名抄に據つて之をヤ行のエと決定する事は不可能である。しかし、公定せられた郡郷の名の如きは永く襲用されるのが普通であり、ことに穎娃の文字は、和名抄以前、三代實錄及び延喜式の中に既に用例があるのであるから、この文字は奈良朝又は之に近い時代に定められたものと見て誤はなからうと思ふ。さすれば、當時はアヤ二行のエの區別があつたのであり、「穎娃」の「娃」は上のエ音の母音を長くした爲に生じた母音音節エを寫したものであるから、當然ア行のエであるべきである。「穎」の字は、他に假名として用ゐた實例が無い限り、そのエは何れに屬するか決定出來ないわけであるが、上述の如く、新譯華嚴經音義の原本に「簫」の訓として擧げたフエといふ語のエに「穎」の字が用ゐてあつたとすれば、それはヤ行のエの假名であつたとすべきである。（右の如く「穎」をヤ行のエの假名とすれば「江」と同音である。さすれば、大矢透博士が、古言衣延辨證補に於て、村岡良弼氏がその著、日本地理志料にこの郡名の起源について、「郡有二大江一曰二池田湖一周凡十五里深百三十仞其名蓋取二此江一也」と論じたのを贊してをられるのももつともである。）

地名研究会報

第３０号

平成３年３月３日

鹿児島地名研究会

Ⅰ．第３０回例会　　平成２年９月２日（日）　　於教職員互助組合会館和室

（出会者）　青柳俊一・小川亥三郎・小川秀直・大田照夫・片岡八郎・桐野利彦・郡山政雄・佐野武則・浜崎盛雄・肥後芳尚・平田信芳・松田　誠・村上良典・吉川法水（計１５名）

Ⅱ．麑藩名勝考読会　　P.100 ～P.104

（問題となった地名および事項）　御鉢・鉢窪（八久保）・逆鉾・高千穂・霧島火山の噴火

御鉢・鉢窪（八久保）

平田　先日、地図を見ていて気付いたのですが、高千穂峰は鹿児島県じゃないんですよ。頂上は都城市と高原町との間。韓国岳が小林市とえびの市それから牧園町と栗野町との４市町の境界になります。頂上に噴火口がありますが、噴火口は全部宮崎県で火口壁の尾根が鹿児島県と宮崎県の境界になってるようです。霧島というと、すぐ鹿児島県の山のように考えますが、地図をよく見ると高千穂峰は宮崎県ですし、韓国岳もほとんど宮崎県です。事実、韓国岳などは宮崎県の「えびの」から登って行くわけです。－－－何か問題にしたい地名がありますか。

浜崎　102 ページの上の方に「御鉢」というのがあります。開聞岳の頂上に、二度目に噴き出た所、あの辺を「ハックボ（鉢久保）」というんですが、「鉢」というのは、結局、噴火口の意味ですか。

平田　鉢のような格好をしてるからでしょう。摺鉢のような。

浜崎　やっぱり、その形から来ているのでしょうね。

平田　はい。

浜崎　確か「ハチクボ」。「ハチ」というのはどういう字か判りません。御鉢とある、この「鉢」かも知れません。

平田　今、「ハチクボ」の話が出ましたが、スリバチのようにくぼんだ「鉢窪」と、数字の八の久保「八久保」とがあります。「ハチクボ」という地名は沢山あるんですよ。実際に回って見なければとは思っているんですが。

浜崎　ははぁ、鉢ですか。数字じゃなくて、鉢。

平田　スリ鉢のようにくぼんだ所に付けられる地形地名だろうと思ってるんですけどね。もう一つ、そんな所に「蜂」が出て来るんですかね。その両方を引っ掛けているんじゃないかと、思ったりするんですけど。

浜崎　それじゃ、昆虫の「蜂」ですか。

平田　そうですね、まぁそんな気もするんですけど。実際はスリ鉢のようにくぼんだ所という地形地名ですね。この地名を拾いあげたら、そうですね鹿児島県で 100近く出て来るんじゃないですか。「ハチクボ」というのは。

逆鉾（さかほこ）

吉川　101 ページの上の方に、荒嶽権現というのがありますが、うしろから３行目。私の郷里に荒嶽神社というのがありますが、それだと思うのです。その位置は火口から東南３里と書いてありますけど大体それぐらいあります。終戦の時までは、御神体があったんだそうですけど。

平田　「逆鉾」がですか？

吉川　「鉾」か何かは判らんですけどね。あの辺に展開して来とった陸軍の兵隊さんなんどが、終戦の時、どさくさにまぎれて盗んでいた。

平田　ほほう。

吉川　その男はそのまま入院したとか、聞くもんでした。

平田　やっぱり、たたりますか。

吉川　盗んだものは、どこにやったのか判らんという話でした。

郡山　霧島山の山頂に、鉾がありますね。あたいげんあたりも「鉾」を立てますが、あれは何だろうか。神様を祀るんだろうか。

平田　これでしょう。「逆鉾」。

郡山　これには－－－－。

平田　これは、ニニギノミコトが立てたと信じこんでおるのです。そんなのがあるはずはないので。坂本竜馬がおりょうさんと登った時、引っこ抜いてみたという話がありますね。生徒たちも、ピンと来ないというような感じで見ていますけど。ニニギノミコトが高天原から降りて来たと信じこんでるわけでしょうから。

高千穂（たかちほ）

平田　先日、「高千穂」という意味を調べたのですが、結局、何を述べているのか判らんのです。要するに、高い峰のことだ、と。地名辞典などは、いろんな説を言っているけれども、結局のところ高千穂というのは高い峰のことだということなんです。先日、『日本地名索引』を見ておりましたら、「たかちほやま」というのがもう一つ青森県にあるのです。その「タカチホ」は、どういう字が書いてあるかというと、「高乳穂」なんです。助平の感覚じゃないんですけど、高千穂峰を見たら、ちょうどいい格好のオッパイの形なんです。古代人の発想というのは、そっちの方が正しいんじゃないか、と思います。そこで考えついたのですけど、千穂というのは稲穂をたくさんという意味ですね。稲穂をたくさん積みあげたら、こういうふうに円錐形になるわけですね。だから、多くの穂を高く積みあげた形、そういうコニーデ型を高千穂というような表現にしたんだろうと思います。青森県の高乳穂山も高くオッパイのように穂を積みあげた形ということになりますね。「高千穂」というのは、そう言ったコニーデ型を指した古代の人たちの表現だろうと感じたんですけどね。日本列島の両端にそういう山の名前が残っているということは、コニーデ型をそのように言ったんだろうと思います。

吉川　そう言った形だとすると、宮崎県の高千穂郷はどうなりますか。

平田　あれは、智舗郷と呼ばれたものですよね。本来は。

吉川　あっちに、天岩戸があるとも云われますが

平田　いや、あっちとこっちとで、本家争いをするわけなんでしょう。こちらが高千穂峰になったのは、結局－－－－

吉川　どういうことになるんですか。

平田　こちらの方の政治力が強かったということなんでしょうね。さっき言ったように、高千穂峰は宮崎県で、鹿児島県に入っていないわけですが、宮崎県の人たちは、あちらの方が高千穂の本家だと言うんでしょうけれども。

吉川　あっちはでっちあげだという話も聞くんですけど。ずーっと後の話だ、と。

平田　あちらの智舗郷というのは、『和名抄』にも『延喜式』にもありますよ。ですから、今さっき言ったように、高千穂はコニーデ型の山のことで、稲穂をたくさん積みあげて豊作を願うようなことから名付けられた地名ですから、「高千穂」というような山の名前は、あっちこっちに付いてもいいんじゃないですか。

霧島火山の噴火

平田　それから102ページに、たくさん霧島の爆発のことが書いてありますが、何年はどこが噴いたなんてことが後付けられると面白いのでしょうがね。例えば、102ページの上の方に、延暦七年、贈於郡の曽乃峰が燃えあがったとありますが、曽乃峰はどの山でしょうかね。新燃岳あたりでしょうか。あっ、そうだ、高千穂の御鉢は鹿児島県ですね。

浜崎　高千穂の御鉢が鹿児島県？

平田　はい。高千穂の山頂は宮崎県ですけど。だから、御鉢の可能性もありますね。贈於郡に入るのは、御鉢か新燃岳しかないんじゃないですか。韓国岳は宮崎県ですから日向国に入っちゃうでしょう。

ここは、あんまり問題にするところはないようですね。郡山先生の話を長く聞くことにしましょう。先生、よろしくお願いします。

Ⅲ．塩の話　　郡山政雄

たいへん貴重な時間を頂きました。「塩」についてお話したいと思います。以前、『鹿児島民俗』に「塩と民具」ということについて、ちょっと書いたことがあります。資料として、コピーを付けておきました。また、奥州の塩釜神社に参りまして、いろいろ感じたこともあります。実際に塩を作る場面を知らないのですけど、能登半島に塩を作る場所がありまして、天然記念物になっております。観光地にもなっておりますので、ここにも足を伸ばしてみました。

鹿児島県には、塩釜神社はなかもんじゃろうかというようなことで調べてみました。谷山に塩釜神社があり、牛根にも塩釜神社があります。阿久根にも塩釜神社がございます。平田先生から資料を頂きましたら、帖佐にもそのような塩釜神社があるようです。塩釜と申しますのは、海辺で塩を作りました塩釜があり、それから地名が付いたのではないかと思います。そこにある神社が、塩釜神社。

塩釜神社につきましては、昔からいろいろな言い伝えがあります。奥州の塩釜神社には、いつも壺に水がためてあります。その水が、一年中、どんな日照りの日でも干あがるようなことはないと言っておるようでございます。谷山の塩釜神社の話を聞きましても、ここでは子供たちが怪我をしたことがなかったと言っておるようでございます。とに角、方々にある塩釜神社ではそのようなことを言っておるようであります。

実際に「塩」の付く地名でございますが、塩釜というのは海岸にあるのではないかと思います。また海岸から塩を内陸の方に運びますので、内陸の方にも塩に関する町があります。長野県には、よく知られている「塩尻」があります。戦国街道の一つで、塩が運ばれた道での「塩尻」ですから、塩をそこまで一応運んだ、塩の終点ではないかと考えるのですが、その辺のことはいろいろご指導頂きたいと思います。それから、山梨県に「塩山」「塩見峠」というような所があります。

鹿児島市の甲突川河口の塩屋。それから、谷山の永田川の河口付近に発達したところの塩屋。出水に室町時代から言っておったという塩屋があります。知覧町にも塩屋があるようでございます。それから串木野にも塩屋堀(シオボリ) という地名があります。鹿児島県の場合、塩を作った所を「塩屋」というのではないかと思います。

小字を拾ってみますと、国分に塩屋。東町、それから鹿児島市。大浦方面・枕崎に、「塩屋ノ前」とか「塩屋ノ下」とか「塩屋ノ元」というようなのがあるようでございます。国分の方に行きますと、塩屋・塩浜。枕崎に塩入。鹿児島市に塩月・塩入。塩入にも、塩入ノ前とか塩入川とかがあります。川内には塩入ノ前、加世田には塩入・中ノ塩入・東ノ塩入とか。吹上に参りますと、塩入・塩水流。また、

蒲生なんかにも塩出(しおで)・塩満というのがあります。蒲生から吉田に行く所に、塩杣(シオソマ)というのもあります。そのように、いろいろ塩の付く地名があります。塩が出来る海岸じゃなくて、奥地にも塩の付く地名があるようであります。

それから、実際に塩を作った所からそれを内陸部に運ぶ、その運ぶ道ですが、専属の塩街道があったようです。鹿児島県の場合も塩を運ぶ道があったようです。阿久根から薩摩郡方面に運んだ塩の道があるのです。阿久根のなんとかという人でしたが、非常に歌のうまい人で、老人会で塩の道についての歌を歌われたのです。阿久根から祁答院方面・薩摩郡方面に運んだそうですが、自分で「塩の道」と名前をつけていたそうです。その歌を聞きました。

また国分方面でとれた塩を、えびの方面に運ぶ道があったそうです。えびのとか、あちらの方に塩を売りに行ったそうです。

塩は健康によいというのでしょうか、邪を払う力があるので、子供たちが元気といいますか、体が丈夫であるというようなことで、昔は「養い子（やしねご）」と言って、自分の子供ではないけれども、親類の子供ではないけれども、子供たちと親子関係を結ぶ、いわゆる「養い子（やっねご）」をしておった。私の出身地である郡山も、東市来の江口浜から塩などを売りに来るものでした。そういうような人たちの養い子（やしねご）にする。「やしねご」にすると、体が丈夫になる、と。それで、子供の育たない家なんかは、よく養い子を出していました。そして盆・正月には養い親を呼んだり、いろんな物をやったりしていました。養い子がいる話を、私なんかの小さい時には聞くもんでした。えびの方面では姶良郡・国分方面から塩を売りに行ったわけですので、その辺の子供を丈夫に育てるという養い子があったという話を聞きます。

それから、塩の付く地名ですが、電話帳で、まぁいけんとがあっどかい、どこん辺にあるだろうかということで拾ったわけです。２～３年前に拾ったのですが。それで、塩の産地と苗字との関係を横書きにして入れておきました。例えば、姶良町・加治木町・隼人町・溝辺町・国分市・宮之城町、このような所に「塩屋」という苗字があるようです。鹿児島市内のも数えまして、計157 あります。その次に多いのが「塩満」で、鹿児島市、姶良町、国分市の辺が多いようです。「塩川」というのが90例で、国分市が非常に目立ちます。「塩田（シオタ）」は、福山町・国分市などで17例。それから「塩入(シオイリ)」。溝辺に「塩入」というのがあります。この辺では塩はとれないのですが、載っているようです。それから「塩満」「塩津」。

私の郷里の郡山には「塩賀」というのと「塩補」というのがあります。「おまんさぁ達はどこからお出でになったとですか」と聞きますと、「塩賀」は加世田から、「塩補」というのは中種子から来たと言ってるようです。とに角、塩を作っておった所の周辺に、塩の付く地名があるようです。山手の方にあるのは、どっちかというと、まぁ、他所から来た。鹿児島県の場合は、海岸地方から移住して来たようです。伊集院なんかも、相当入って来ているようです。面白いもんだと考えるわけです。

以前書きました「塩と民俗」について若干述べておきます。昔から塩についてはいろいろあります。不浄払いとしての塩、葬式とか不浄のために使う塩をさす。それから今も実際にしているわけですけれども、水神とか火の神とか、そのようなものに塩を供えます。とくに正月一日なんかは、私の所では、昔は必ず不浄払いとして塩を祀ったものでございます。それから怪我をしないようにとか、災難があった時なんかは塩を使います。お相撲さんの浄めの塩。これは「塩と呪い」ということで眺めることが出来ます。

目にものもらいが出来た時には便所に行き、北の方を向いて「メイボ・メイボ」と唱えると、なおると云われていました。これは特殊な力があるということです。目がはれた時には、ヘソの上に塩を塗ればよい、という話もありました。これは延岡で聞いたことです。それから、寝小便をする人は、夕方、フトンを背中にして塩をもらいに行けば直ったもんだというのが、北海道であったと言います。

そのようなふうに、塩とわれわれの生活が非常に密接であったので、塩は特に大事にしたわけです。最近は年々塩は非常に嫌がるだけになりましたが、生活する上では、何と言っても、塩は一番大事なものだと考えます。そのようなことで、塩と我々の生活、塩と地名というようなことがあるわけです。皆さんのご意見を頂けたらと思って、今日のことを引き受けました。短い時間で語れるものでもありませんし、簡単ですが以上で終ります。

（質疑応答）

平田　どうも有難うございました。桐野先生。『シラス研究』第２号でしたかね、あの中にだれか「塩」のことを書いていましたが。

村上　山之口さん。現在、種子島高校におられます。

平田　それと、今日紹介された『塩と民俗』と、私も以前、『隼人文化』第８号に「さつまと塩」というのを書きました。同じようなことを調べたことがあります。今、思いついたことを言います。溝辺町の「塩」の付く苗字、塩入・塩満などはほとんど南薩から移った人たちです。山奥にある塩の付くのは大抵そうじゃないでしょうか。それから、プリントのこの表、串木野のところの一番右側、これは「塩硝小屋（エンショウゴヤ）」ですね。それから、大浦の「塩硝石（エンショウイシ）」。これは、火薬のことです。以前失敗したのですが、鹿児島大学構内の発掘調査をした時に、鹿児島大学のキャンパスの小字を全部調べました。そうしたら、あすこに「塩焼」という小字が出て来たのです。鹿児島市の市営球場が「古塩浜」という小字で、それに近いもんですから「塩焼(シオヤキ)」という小字に引っかかりました。それと出て来た遺物の中に、製塩に使ったと思われる土器の破片があったので、なお神経質になったのですけれども。あれは「天保絵図」を見ますと、あすこに「塩硝御蔵(エンショウオクラ)」があったのですね。「塩焼(シオヤキ)」と読んだのは間違いで、塩硝御蔵にもとづくものでした。塩硝小屋というのは鹿児島県のあっちこっちにありますが、火薬庫のことです。

片岡　「煙」と「塩」の字を取り変えたわけですね。

平田　「塩硝」と、ほとんど書いています。

片岡　もともとは「煙」じゃなかったのですか。

平田　本来は「煙」でしょうけど。

桐野　今云われた塩硝というのは、串木野とどこですか。もう一方は。

肥後　大浦です。

桐野　大浦ですか。大浦に、その塩硝石が。

平田　火薬の方。

桐野　塩硝石は火薬で、塩に関係ないわけですな

平田　そうです。

片岡　その塩硝の中身は何ですか？火薬？

平田　えゝ、火薬。硝石と－－－－

片岡　その頃の硝石というのは、小便垂れたり、魚のワタを投げ込んだりして作った－－－－

平田　そうですね。例えば、敷根の火薬庫を塩硝小屋と言ってますからね。火薬を塩硝（煙硝）と言ってます。

浜崎　南薩方面には、塩硝蔵跡(エンシュクラアト)という所があちこちにあります。石でたたんだ小屋が残っている。

桐野　南薩にたくさんありますか。

浜崎　えっ？

桐野　南薩にたくさんありますか？塩硝小屋(エンショウゴヤ)と言ったのでしょう？

浜崎　塩硝(エンシュグラ)。

桐野　エンシュグラ？

浜崎　「エンシュグラアト」

桐野　それは火薬庫でしょうね。

浜崎　はい。

平田　火薬庫は多いと思うんですよ。

浜崎　砲台があった跡なんかにあるわけですね。

桐野　明治維新の時の薩摩軍は日本一の軍隊と云われたんだから、そうとう火薬を使ってますよ。

平田　生産量はすごいですね。

浜崎　塩については、頴娃の方に前回も話を出しましたが、塩掛松というのがあります。牧場のあたりに。塩と牧場・馬・牛とは関係はありませんか。塩をなめさせたとか。「塩掛」をそのように解釈はできないもんですか？

肥後　塩は関係があるんじゃないですか。

桐野　それは大いに関係がありますよ。

肥後　塩をなめさせることは。

浜崎　塩掛松は、牧場で塩を食わせる場所に連れて行くというようなことに関係があると解釈してもよろしいですか。

平田　なるほど。

肥後　それで、いいんじゃないでしょうか。

桐野　もう、塩は。例えば、豪州とかヨーロッパとか牧畜の盛んな所でもですね、牛に食わせる塩をどうするかということは大きな問題で、風習もいろいろあるわけですよね。これは日本のことなんですけど、飼っている牛や馬を集めるのは、簡単に集めがなるもんじゃなか、と。塩を持ってですね、二・三匹に食わすと、喜んで奇声をあげるんだそうですよ。そうすると、他の牛がどんどん寄って来るそうです。そういう話をしましたがね。これは鹿児島の人ですよ。塩に全然関係のない人なんですがねがねそういう話をしましたがね。本当にそうだろうと思いましたがね。ヨーロッパでも豪州でもそういうことです。塩というものは、人間に欠かせないものであると同時に、動物にも絶対に欠かせないものですから、これがなければ生命の維持が出来ないのですからね。現在、日本人はあまり豊かになりすぎて、塩を余計にとるな、あんまり食うなと言うてますけど、これがいよいよなくなってごらんなさい。塩をとるために、どれほど努力をしなければならないか分らんと思うのですよね。塩というのはそんなものです。それと、あんまり銭を使うな使うなと言ってますから、あんまり銭を使わんのですが。日本ほど塩に恵まれた国民というのは、そう余計にはおらんですよ。世界の文明国でですよ、塩にこれだけ恵まれたという所は、あんまりないです。私も塩を研究したことがありますから、そういうことはよく分っておりますがね。砂漠とかですね、アジア大陸の真ん中に塩が多すぎるんですよ。それは岩塩なんですが。世界の塩というのは、海岸じゃなくて陸上に塩はあるんですから。もともと陸上にあった塩が流れて行って海の塩になったのですから、岩塩・陸上の塩が塩のはじまりなんですよね。これを余計に持っている所は、やはり砂漠に近い所ですね。

平田　世界史的に見ても、漢の時代「塩鉄論」というのがありました。塩と鉄。世界史では塩と鉄をにぎったものが権力をにぎって、ずーっと支配して来たわけです。塩の歴史というのは、いい加減に考えてはいけないと思います。

桐野　実際そうですよ。塩がなければ生命を維持できないのですからね。大事なものなんですよ。だから、あんまり塩を取んな取んなということばっかいの考えじゃなくてね、そんな考えでおったら研究は出来ない。面白くなくなる。「塩鉄の利」というのは中国史を調べると判りますしね、塩鉄の利とかそれを専売にしたことなど聞いたことがあります。

そういう言葉が生まれているぐらいですから、塩というのは非常に大事なもんですよ。それと、鉄も非常に重要で、だから重要なものだけを専売にして、これを握れば国は豊かになる。島津さんは専売の神様みたいなものですからね、もうちょっとでも銭になれば木綿針一本から専売にしたというんですから、これは気が利いとった。しかし、島津さんが塩を専売にしたということは、考えれば、そういうことは聞いていないが。

平田　薩摩の塩は不思議なんですよ。というのは明治維新の原動力になったのは薩摩と長州だと言われます。薩摩は黒砂糖の専売、長州は塩田が経済的背景にあった、と。そういう具合にね、普通言います。ところが、薩摩と大隅の塩田の総数は、長州と大差はないのです。しかし薩摩は赤字で他所から移入した、と言われます。本当だろうかと思うのですよ。

桐野　塩を移入したと言うんですか。

平田　そう書いてあるんですよ。旧記雑録には。

郡山　おっしゃるように、塩というものは非常に大切なものです。例えば、味噌を作るとか醤油を作るとか漬物を漬けたりして長持ちさせるとか、人間の知恵には本当に感心させられます。

桐野　食糧というのは、昔から保存が非常に大事だったんですからね。食糧の生産は一生懸命にするけれども、そればかりではない。人間はやはりそれを保存して食わなければ、食わならんかった。そうすると、塩がやっぱり要ったわけです。あるいは干すとかね、それから炊いてそれを干すとか、いろいろな方法があり、人間は知恵をしぼっておったわけです。塩は人間の生活に絶対に必要であった。そういう大事なものであるわけです。それでね、今お話を承っておったんですが、非常に良く研究していらっしゃると、ほんとに感心しました。鹿児島県の事ばっかいじゃなくて、県外のこともよく研究されて非常にいいことだと思います。今後、他の人もですね、続けておやりになると、これはいい結果が得られるんじゃないかと思いますがね。

平田　それとですね、もう一つ、今ならですね、鹿児島県には実際塩田で苦労しやった人がたくさん残っているわけです。だから、今のうちに塩作りの方法とか、道具とか、これは集めなきゃ、なくなると思うんですよ。若手は頑張ってください。

桐野　それはそうですよ、やっぱり。恐らく民俗学の人も塩のことについては研究していなさるとは思うんですけれども、私は気付かんですね。

平田　案外やってないんじゃないですか。

桐野　そいでですね。「塩と民俗」、これは非常によいテーマですよ。こんなに良い、すばらしいテーマはないと、私は思うんですがね。もう少しね、他の民俗学の人たちもね、積極的にね、やっていいテーマだと思いますがね。

<u>無塩（ぶえん）</u>

浜崎　塩は民俗学的に大事だと言うことですが、私どもの所では、方言に「ぶえんのいお」という言葉があるんです。ブエン。俺たちゃブエンを食うちょっで元気がよかとよ、と。塩なしを「無塩」と書いて「ブエン」と解釈しているのですけど、それでよろしうございますか。

桐野　ブエンの魚というのはね、私は他所でも相当長い間生活して来たのですけども、やっぱり無塩の魚（ぶえんのさかな）という言葉を使います。

浜崎　えー。

平田　結局、あれですよ。古代はですね、例えば奈良時代とか、平安時代。都に魚を送りましょう。その時、腐るもんですから、全部塩漬けにして送ったわけですよ。だから「無塩の魚」というのは、上流階級の人でもなかなか口に入らなかった。そう言うことですね。ほとんど有塩だったわけですよ、魚は。

桐野　いやー、私などはブエン、ブエンと鹿児島で聞いて育ったもんですから、他所に行ってブエンと言ったらおかしかどねと思っちょったとですよ。ところがね、東京へ行ったらね、学生の頃でしたが教授の大先生がですよ、「ブエンを食う」と言うことを言いやっとですからね。やれ、こりゃブエンというのは標準語じゃもんじゃねと、私は思ったんですよ。それから、どこへ行ってもブエン、ブエンと平気で言うようになりましたがね。本当にね、ブエンというのは鹿児島語のおかしか言葉じゃろかいと思っちょったのが、豈はからんやですね、日本の良か言葉でですね、しかもブエンの魚というのはよっぽどの衆じゃなかや食もならんのですよ。銭を持っちょっ衆じゃなかや、そりゃー。そいでね、ブエンの魚を食える、ブエンという言葉をよく説明できるということは、これは有難いことだと私は思いますがね。

片岡　結局とり立てという意味でしょう。塩なしということでしょう。

桐野　はい、塩がないという意味。

片岡　だから、今、取ったばかりだということ。

桐野　塩が付いていない。

浜崎　いわゆる、生魚。

肥後　鮮魚です。

桐野　私は川内ですけどもね。川内はすぐ行けば久見崎とか、海に近いのですけども、ブエンの魚というのは全然ないわけじゃないんですよ。ところが私どもの貧乏育ちはね、ブエンの魚というのはほとんど親が食わせたことはないわけですよ。正月なんかもですね、刺身と言えばね、塩漬の鯖を刺身みたいに切って、それを刺身じゃっど、刺身じゃっどと言って食わしよったですもんね。塩漬の刺身をね。そんなことでね、ブエンというのは、これは貴重品だった。海のそばでも貴重品だったと思いますよ。えー、いいですか。

平田　はい。

桐野　私は、ちょっとお尋ねしたり、いろいろ申しあげようかと思います。先程、塩の道ということをおっしゃいましたね、塩の道。これは非常に良い言葉ですから。私どもが地理をやった、その始めの頃ですね、昭和10年代ですが、塩の移入路というのを大学の先生などが研究されて、非常に有名になりました。日本の塩の移入路、どうせ海岸にしか出来ないのですから、塩の出来るのは。海以外に出来るのは、栃木県にですね、塩の井戸というのがあるんです。私は見たことはないのですけど、お書物には書いてあります。そこに行けば塩がとれる。いや、とれると書いてあります。その他の所は、みんな、塩は海岸から持って来た。日本列島は南北に細長いわけですから、海岸といえば、日本海の方の海岸と太平洋の方の海岸と両方あるわけですね。両方から持って行くわけですよ。だから武田信玄と上杉謙信の話が残っているのです。武田信玄の所には太平洋側から塩を買っていたのだけど、塩の道を押えられて困ってしまった。その時上杉謙信が日本海の塩を送って助けたという話もあるわけです。それで先程塩の道に関して塩尻（しおじり）という話をなさいましたが、こういう言葉を、塩尻という地名があることをご存知であるのは、よほどの研究をしていなさることだと思うんですよ。塩尻というのは長野県の真ん中辺にあるのですが、あの辺は全然塩のない所ですから、海岸の方から持って来なければ塩はないのです。持って来るのは日本海の方と太平洋の方から持って来る。そして、それが落ち合う所なんですね。塩の尻なんですよ。一番の塩の尻なんです。それで「塩尻」という地名が付いた。私はそれを研究している先生から、その塩尻の話を具体的によく聞きましたがね。ここは、ここから、こういうふうにしてやって来る、と。海岸の方からやって来て、奥地では小さな川舟で上げるんですね。川舟で上げたら、それから先は馬に乗せる。馬も行かんごとなれば人間が背中にかつぐ、というふうにして運んだという話を、研究している先生から聞きました。太平洋の塩はここまで来た、と。日本海の塩もここまで来た。そして、ここに塩尻という地名を付けたんだという話を聞いた時は、本当に感激しました。塩尻という地名は、日本ではあんまりないのです。幾つかあるだろうと思いますが、一番有名なのは長野県の塩尻です。それもよく調べていらっしゃるので感心しました。塩の道の一番おしまいの所に塩尻という地名が出来たというのは、これは人間の常識として、まぁ自然ですよね。それとですね、もう一つ、地図がどこかありましたね。

平田　一番うしろ。

桐野　一番うしろに地図がありますね。「鹿児島県における製塩の概要」ということばの下の方に書いてある。この地図はですね、恐らく専売局で作ったものだと思います。日本では、塩が専売になったのは明治38年です。これは政府が銭が要ったからですよ。日露戦争で銭が要ったからですね、軍備の支出の一面として塩を専売とした。さっきの話のように専売にすれば、もうかるわけですよ。生産から販売まで、みんな政府が握るわけですから、その利益というのは非常に大きいんですよ。これはその頃の図だと思うんですが。そこにね、塩田の種類を書いてあります。凡例のところを見ますと、●が入浜式塩田。これが一番多い。今、塩田はありません。イオン交換膜法になったからですね。最後の塩田は入浜式塩田で、これは最も進んだ塩田であったのです。それから、その次の次、○がしてありますね、揚浜式塩田。これは中世以来、入浜式塩田が現れるまで盛んであったのですけれども、鹿児島県のような田舎では、まーだ、その揚浜式塩田があったのです。それで、鹿児島県の南の方を見ますと、○がたくさんありますよね。これは揚浜式塩田。鹿児島県でも、垂水とか新城。垂水・新城は書いてありますね。この辺は揚浜式塩田で非常に有名であったわけです。それから、入浜式塩田。鹿児島県の奥の方には●がずーっと並んでおりますが、これは入浜式塩田で最も進んでおった塩田。塩田の最後であります。そして、昭和三十四・五年でしょうかね。その頃まで続いてイオン交換膜法という製塩に変りましたから。全国には瀬戸内海をはじめ相当数の塩田があったのが、イオン交換膜法というのは全国に２か所。長崎県に１か所、それから福島県ですかね、「いわき」と言えば。福島県かな。

平田　福島県です。

桐野　福島県ですか。長崎県と福島県に、イオン交換膜法を残したのです。その２つで、日本の塩は全部需給出来るということになった。これは食料塩だけです。工業塩は、日本の塩じゃとても高くついて、やっていくことは出来ませんから、外国から輸入しているわけです。豪州とかメキシコとか、そういう所から天然のただみたいなのが入って来るんです。食料塩は、そういう２つのイオン交換膜法の塩田で、今は作っております。それと、上から二番目に、⊖印。自然浜塩田というのがありますね。自然浜塩田。串木野、えー、これで間違いはないんですが。それから枕崎、大浦。そんな所が自然浜塩田ですね。最も原始的な塩田で、揚浜式塩田以上に原始的であった。串木野に45町歩の塩田があったのですが、自然浜塩田だったのです。それから市来もそうですよ。それから、◎の天然湧出式塩田というのがありますね。これは注目していいと思いますよ。これに関する地名も欲しいのですが。阿久根にあります。阿久根のところに◎があるでしょう。ただ一つです。鹿児島県の専売局が、えー今は専売公社ですが、専売局が管轄しているものの中ではね、一つしかなかったのです。これは、天然湧出式塩田。天然湧出式という言葉は、専売用語です。専売局が使っ

た言葉なんです。だから、普通どこでも使っておりません。それはですね、海岸ではないのです。これは阿久根と書いてありますが、海側じゃろうと思ったらいけない。内陸なんです。田圃の真ん中。あすこにちょっと山がありましてね、山よりも手前の平坦地なんですよ。田圃なんですよ。その田圃の所に昔からの塩水が自然に湧いて来よったのですね。塩水が自然に湧いて来よった。その湧いて来る塩水を煎熬(せんごう)して、煎熬というのは炊くわけです。そうして、塩をとっておった。しかし、天然に出て来たんだから天然湧出式というわけですね。こういう塩田というのはね、まぁ、日本全国を見てもそう余計にないと思いますが、私はそれは気が付いておりません。九州については一つ一つの塩田をほとんどみんな知っとりますけど、こういうのでは知りません。これは大昔から存在しておったのですが、ここの辺の地名が知りたいのです。なんとか塩という言葉で呼んでおったことをちょっと憶えておるんですけど。よーく記憶しなかったのです。あの近く方で調べてみて下さい。だけど、もう、全然湧出しておりませんから、止められておりますから現在はありませんよ。現在は人工でどんなにでも出来ますからこれは現在はありません。しかし、ここに昔からあったんだから、どういう地名が付いているのか。あるいは塩屋というのが、あるかも知れませんね。

平田　それは、三国名勝図会に書いてあります。

桐野　書いてありますか。

平田　はい、阿久根の塩のことが。それは以前から気が付いていたんです。

桐野　昔から有名だったことが、それで判りますね。地名の呼び方に変化はなかったかどうか。これは地名のいいテーマになって行くんじゃないかと思いますがね。

郡山　それは、いいことを聞きました。あすこに行ってみるとですな、浜の所は山になっておりまして、ほとんどーーーー

桐野　山ですな。

郡山　田圃は今は荒れていますけど、そこに塩釜神社があります。どうやって塩を作いやったとですかと、聞いても、今はもうわからんのです。

桐野　うーん。あの辺に、海岸の塩があるはずはないのですよ。海岸の塩は絶対あり得ない所です。天然湧出式。天然湧出式という言葉は専売用語ですから、そういう塩田が日本にないもんだから、天然湧出式という名前を専売公社が作って、それで塩の行政を進めとったわけです。「塩」は、ほんとに、いい研究テーマですが。どうか、よろしく。

平田　たしかに、塩はいいテーマですね。鹿児島は塩田が多かった所です。さっき言ったように今のうちに調べる必要がありますね。元気だったら田舎に入り込んで行くんですけどね。今ならまだ探り出せると思います。

片岡　三角形の塩手籠(しおで)。鹿児島県だけなんでしょう。

平田　塩テゴ。ニガリをボタボタ落しよったやつでしょう。

桐野　ニガリを落すんだから、他の所にもあるのじゃないでしょうかね。ニガリを落して、純粋の塩だけ残そうというわけでしょう。あれも、やっぱりね。一つのね、塩の民俗あたりで、どうしても取りあげねばならぬ問題ですよね。あれは、残ってる所がありますかね。私なんかは、子供の時には炊事場のそばには、親が掛けているのを、よく見よったのですから。こいでおかべを作ったっでなぁと、垂れたのを見せて、そげなふうに親はいっかすいもんじゃったですよ。だからね、あの辺の民俗をね、もう少し、民俗学の方々がね、おやりになればいいことじゃないかと思いますがね。

片岡　最近、檀太郎という料理研究家が書いたものに、ペルーの山の中に「山塩」が出る所があって

その塩をなめたら、うまかった。今のイオン交換なんとかというので作る日本の塩は何の味もしない。無味乾燥だ、と。山の中の塩のうまさを考えると、日本人は本当の塩の味を忘れているのではないか。料理をする人は、皆、精製塩を使っているのではないか、と。そんなもので日本料理の味だと思ったら、とんでもない間違いだ、と。結局、世界中の料理を食って回って料理評論家として名をなしたが、もう止めた、と。一番うまいのは、塩イワシ。塩イワシが一番うまいんだという結論でした。（笑い）

平田　なるほど。

桐野　塩イワシが一番うまいということは、私も聞いたことがあります。そうしてですね、あれは赤穂義士の赤穂ですよね。赤穂は塩田が非常に多かった所ですから。あの藩は、何藩ですかね。

平田　赤穂藩。

桐野　赤穂藩ですか。藩の経済は塩で大きくもてとったわけですね。以前、あそこの塩が何故有名になったかということを調べておりましたらね、こげなふうに皆が言いおったそうです。赤穂の塩は甘いと言いおった、と。塩は甘い。それは、なんちこっじゃろかいね。赤穂の塩はからいと言えば、それはよか塩じゃと言うかも知れんけど。赤穂の塩は甘いと言ったそうです。今ね、おっしゃったようにですよ。ペルーの塩は甘いというのは、そのようなことなんでしょうね。やっぱり、塩も本当はそげんとがよかちゅうこっやんそなぁ。それで赤穂の塩で料理をすればよかと言うこっじゃないですか。

平田　色々な塩談議になって来ましたが、何か他に、質問はありませんか。脱線ついでに言いますが赤穂の塩と吉良の塩。最初は吉良の塩が出回っていたのですよ。赤穂が市場に殴り込みをかけて赤穂の塩が吉良の塩に代ったわけですよ。だから、吉良義央が赤穂の殿様にそっぽを向いたわけで、そこから忠臣蔵が始まって行くのです。塩が喧嘩の種子ですから。「塩」というのを取り扱えば、歴史はいくらでも面白くなるんですけどね。

桐野　塩の歴史とか、塩の民俗というテーマは、いいですね。含蓄が多いですよ、これは。

平田　大きなテーマですね。

桐野　うん。

平田　さっきプリントを回しました。吉川さん、郡城辺の苗字を打たれたんですが、どうですか。これを作られて。

吉川　そうですね。先程も話題になりましたが、南薩方面からの移住者が多いのですよ。もともとの地元の名前というのは少ないですよ。例えば、北諸県郡の山田町。あすこなんかは、安永ぐらいの桜島噴火で集団疎開させられた所です。私の所は昔の三股町ですけど、そこには川辺郡方面から来た人もいますしね、祖先の人たちは大概移住して来た人たちです。こちらから移動した人たちが多いのです。

平田　なるほど、いわゆる「庄内送り」と云われた人たちですね。

吉川　そうですね。西岳の隣が庄内なんですね。

平田　はい、何か質問・意見はありませんか。

大田　先程出て来た地名ですが、吉田の塩杣(シオソマ) というのは、どういうふうに考えたらよいのですか。私はあすこを通る度に気になるんですけど。今朝も通りがかりにおばさんに聞くと「シオソバ」と云われているということでした。吉田の「シオソバ」

郡山　吉田は「シオソバ」と言いますか。

大田　「シオソバ」と言います。

郡山　どの辺ですか。

大田　そうですね、桑の丸の先の方です。何か、迫のような所です。私も今朝はじめて、おばさんに聞いて判ったんですけども。

郡山　あの辺は、昔は海やったわけですね。

大田　その辺は判りませんが、大昔だったらそう

いうことがあったのかも知れません。「杣」というのが、どういうものになるのか。判らんのですが。

平田　何かご存知の方はいらっしゃいませんか。シオソマですか、シオソバですか。

大田　木ヘンに山と書いてあるんですが。

平田　杣(ソマ)ですね。塩杣(シオソマ)？

大田　塩杣はその近くに停留所があるんですね。

浜崎　あの辺を通って不思議に思うのが、高速道路の入口の近くに宮之浦という学校がありますね。宮之浦。そこのヤブを通り抜けて行くと、奥の方には佐多浦・西佐多浦とかいう集落があります。あの辺の山の中にも二つほど「浦」が付いている。今、塩の話が出て来るというのは、入り込んでいたのかどうか。

平田　いや、そうじゃないんですよ。万葉集の時代の言葉で、万葉集には「ウラ」という表現がよく出て来るのです。「末」を「ウラ」と読むのです。

浜崎　はぁー。

桐野　よく「ウランサキ」というでしょう。「ウラサキ」というのは。

浜崎　「モト」に対する？

桐野　木の枝の先の方。

平田　先の方を「ウランサキ」というわけ。だから、あれは海岸と考えてはいけない地名ですよ。

桐野　「浦」というのは、海岸だけじゃないんですよ、今云われた他に、西浦という所もあります。姶良町にですね。

浜崎　私もはじめは、ないごて、こげん所に浦というのがあっとかと思ちょったんです。そうしてですね、聞いたんです。あれは誰やったかな。

平田　唐鎌？

桐野　あれは、誰けね？

平田　唐鎌？

桐野　唐鎌君よ、唐鎌君やった。唐鎌君が、いやその浦というのは、穂先の方のことだ、と。実際、われわれも「ウラサッ」と言いよったですな。木のウラサッと言いよった。だから、海岸とは違うと。

平田　（「塩杣」というバス停の写真を見て）、あぁ、これが「塩杣」ですか。普通は塩木山(シオノキヤマ)というけど。

肥後　どこから薪を出すか、そのそばでしょうが

平田　塩野木製薬という大きな会社がありますね、もともとは塩之木でしょうけど。塩之木山から塩を焼く松の木を伐ったと思うんですよね。海岸との結び付きというのも重要なテーマだと思います。今、肥後先生がその「杣」も「薪」と関係があるんじゃないかと、ヒントを出されましたね。

松田　加治木に塩木山(しおきやま)という地名があったけど。

平田　それは、そうですよ。

松田　塩を作る？

平田　タキモノの山。これは相当な量を使いますからね。だから山と海は結び付いていたんですよ。この会は自由なことを言いあって、それをメモする会ですから、どんなことでも言ってください。何かヒントになることが出て来ると思いますよ。（「塩木山」を二字に書き写せば「塩杣」になる。編集者後記）

桐野　今の話のようにですよ、塩を炊くには燃料が絶対にいるわけですからね、だから山と結ばんことには塩は出来んわけですよ。そういうものは他にどんなものがあるかというと、例えば製鉄ですね。製鉄も山がなければ出来なかった。それで、はじめは山に製鉄所をもって行った。小さな昔の製鉄所はね、だいたい山にありますよ。それからもう一つ、山の木でなければ出来んのは、レンガ焼きですよ。レンガは日本ではあまり有名ではないですけどね、中国では、あの万里の長城ですね、万里の長城を作るために、華北はみんなハゲ山になってしもうた。何千キロという万里の長城を作るには、次々にハゲ山にして行くほど、木をみんな伐ったんだろうと思うのです。そのために、まだ回復出来ないのが現実だというようなことを、私なんかは聞くもんでしたが、ほんとにそうかも知れません。そうすっとね、塩をたくのと、製鉄をするのと、それからレンガを焼くとか、やっぱり燃料が必要であるわけですよね。そうした燃料はどうしたかということ。燃料のある所に行く。工業と燃料指向性ということを言うんですが、製鉄所は大体燃料のある所にもって行ったんですよ。現在でもそうですがね。みな、石炭のある所に大きな製鉄所をもって行かざるを得ないのですよ。釜石がこの前、火を止めましたけれども、釜石に製鉄所が出来たのは、鉄もありましたけど、あの辺の木材を燃料に使うためだったんですね。

平田　『三国名勝図会』には、神社の御祭神の名前が書いてありますが、あの中で「塩土老翁」を祭神とするのは大抵塩田に関係がある神社じゃないでしょうかね。そっちの方から整理することも必要かも知れませんよ。

小川（秀）　先程、阿久根の塩田の地名の話がありましたが、たしか「潟(ガタ)」。記憶がどうもはっきりしないのですけど、たしか「潟」と言ってたようですけど。

桐野　何がですか。

小川（秀）　潟。

桐野　潟、えー。

小川（秀）　たしか、聞いたことがあります。潟という所は大抵塩を作っていた。

桐野　潟はもうどこでも、鹿児島では塩を作る所です。串木野辺でも、潟と言います。

小川（秀）　潟山(ガタやま)とか、指宿の潟口(ガタぐち)とかですね、塩を作る所は、大抵、潟と言います。塩は潟で作っていた。

平田　それは、そうですね。

小川（秀）　そこに地名が付く。たしか、阿久根も、そんな記憶があるんです。

平田　「潟」は、これでは、天然の入浜になるのかな、それとも自然浜になるのかな。

桐野　「潟」はね、やっぱり自然浜ですよ。それ以前は藻塩焼ということでしょうね。それから自然浜になった。自然浜になれば一応「塩田」というてよい。藻塩を焼くという時代は、これは塩田の形態ではないわけですよね。この自然浜というのもね、専売用語ですよ。それから、海岸より高い所の塩田は、揚浜式塩田。入浜式塩田は海岸より低い所にある。堤防を作って海の水を入れる塩田ですから、満潮面より低い。これが入浜式塩田。満潮面より高い塩田が、揚浜式塩田。自然浜から揚浜式、入浜式と変化して塩田はストップになったのですが、塩田の寿命というのは長かったのですよ。古代から中世の揚浜、近世の入浜というふうになって来て、それが昭和の三十年代まで続いたわけですからね。塩田の寿命は非常に長かったのです。それを台湾でも朝鮮でも塩田をやってるわけですよ、現在もね。日本のように科学の進んだ所は、イオン交換膜法というような方法で塩を作り始めているだけであって、朝鮮や台湾ではまだ塩田をやってるわけです。だから塩田の寿命というのは非常に長かったというふうに考えていいと思うんです。

平田　塩は結局植物性の食料を余計に取るようになってからですから、弥生時代以降に塩が必要になって来る。縄文時代は動物に含まれている塩分をとっていたから、そんなに使わないわけですけどね。ところで、鹿児島の場合、製塩土器はしっかりした形ではまだ見付かっていないし、製塩遺跡も確認されていないわけです。今後どこかで見付かるとは思うのですが、製塩遺跡というのは未確認です。

小川　松尾先生の説をちょっと説明します。長野県には、塩という地名が多いのです。塩尻とか塩原とか。その中に、塩分とは無関係な塩という地名が

あるという。それはどんなのかと言いますと、「シボる・シボむ」という言葉に関係があるらしい。松尾説によると、地形がしぼんだような所、山がしぼって来る、しぼむ、しぼんで来る、そういう意味だという。だから「塩」という地名が多いというわけです。長野県の塩尻なんかは、海の塩と関係のあるまぁ、塩の道の尻でしょうけど、それでは説明の付かない所が多いということです。大口市に山野という所がありますが、そこに上塩(かみしお)という地名があります。塩分とは全く関係のない所なんです。どんな所かと言いますと、両方に山がありまして、山と山の間に平地があるわけです。それは、たしかにしぼんだような格好になっています。そんな所に上塩という地名があります。そこを通った時にどうも解釈が出来んと言いよったのですが、松尾先生の説をもって来ると解釈が出来るような感じがしたわけです。「シオ」というのは、昔は「シホ」と書いておったもんです。「シボむ」の「シボ」と「シホ」とは発音が非常に近いのですね。まぁ、そういうことです。

それからもう一つ。種子島の西之表市に大字住吉という所があり、そこに「塩尻(しおじり)」という地名があります。海岸でしてね、塩の道とは関係がない。その辺には塩屋という地名もありますが、この塩尻はどうやら製塩に関係がある地名のようです。「塩尻」という言葉を広辞苑で引いてみますと、昔の製塩、相当古い製塩法でしょうか。砂を集めて、富士山型に、円錐形に積みあげるわけですね。これを「塩尻」と言います。これに塩水をかけて、そのまま天日に干しておくと、乾燥した砂に塩が固着するんですね。それを、まぁ何と言いますか、スノコの上に塩水をかける。そして、塩分を濃くする。それを煮詰めるやり方の古い製塩法があります。その砂を積みあげたものを「塩尻」というわけです。広辞苑なんかを見ると、よく載っております。それで揚浜式ともちょっと違う製塩法があったようにも思います。西之表市の塩尻という地名は、「塩尻」を作って製塩をしたんじゃなかろうかと、そこを通る時にそういう気持がしたわけです。長野県の塩尻とはちょっと意味が違うように思うのです。それから先程話題になった阿久根の自然湧出式ですが、あすこに行って聞いた話ですが、海面よりそこが低い、と。だから塩が田圃から湧いて来るんだという説明でした。昔、塩を炊きよった所の庭先に塩釜神社がありました。小さな祠でしたが。また、西之表では溝を掘って、そこから塩水を汲みあげたりした。それを「エゴ」というんですね。まぁ、そういうことを聞きましたので、参考までに。

平田　えーと、何に書いてあったのか。その文献を思い出せないのですが、竜ヶ水は別名塩ヶ水とも言った時代があります。また、ここは塩屋という苗字が多いのです。砂浜がないので、もっと古い形の塩を汲んで来て炊いてた時代があったんじゃないかなと思います。

今日はいろんな情報交換が出来ました。鹿児島県は塩の産地であったこと。塩を作らなくなってからだいぶ経ったが、今なら塩作りを経験した人たちが生き残っているからその情報を入手出来ること。これは地名研究だけでなく、民俗学や地理学などの研究分野でも大事かも知れません。そういうテーマがあるんだということを確認しただけでも大きな収穫だったのではないでしょうか。－－－－－（以下は事務的連絡であり、省略。）

都城市並びに都城経済圏苗字分布

苗字	都城市	高崎町	高城町	三股町	山田町	山之口町	末吉町	財部町	計
塩井	2								2
塩入谷	3								3
塩浦	1								1
塩川	5				1		5		11
塩田	2			1					3
塩谷	3								3
塩塚	3								3
塩月	2			1		1			4
塩出	1								1
塩平	1								1
塩福	1								1
塩見	2								2
塩満	5		6	1		1		1	14
塩屋	8			1					9
塩水			1						1
塩崎				1					1
計	39		7	5	1	2	5	1	60

塩の雑談（地名研究会）　郡山政雄

一．塩釜神社

1　宮城県の塩釜神社

2　本県の塩釜神社

（1）　鹿児島市の塩釜神社

（2）　根占川南の塩釜神社

（3）　阿久根の塩釜神社

二．塩の道

1　信州の塩の道

2　阿久根の塩の道

三．塩のつく地名

1．大　字

（1）鹿児島市

①　鹿児島湾奥西岸甲突川河口部左岸の塩田地

②　永田川の河口付近（市へ合併後谷山塩屋という。）

（2）出水市

室町時代から見る地名

（3）知覧町

薩摩半島南端中央部に位置し、南は東支那海

（4）串木野市

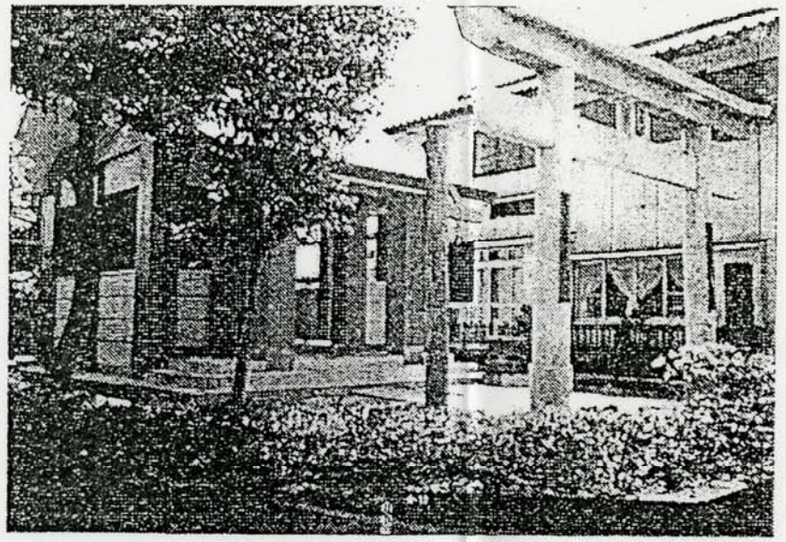
下名　塩屋堀の地名

2．小　字

小字名	塩屋	塩屋	塩屋	塩屋前	塩屋下	塩屋堀	塩屋道堀	塩元	塩浜	塩土	塩入	塩入道	塩入川	塩丸	中塩入	東塩入	塩水流	塩井戸	塩硝石	前原塩元	五門塩屋	屋上塩入	塩硝木屋
市町	国分	東町	鹿市	大浦	大浦	枕崎	枕崎	国分	大浦	枕崎	鹿市	浦生	川内	川内	加世田	加治木	吹上	浦生	大浦	国分	枕崎	阿久根	串木野

四．塩のつく氏名

市町村氏名	姶良	加治木	串木野	牧園	霧島	溝辺	福山	国分	宮之城	樋脇	入来	川内	串木野	伊集院	郡山	吉田	鹿児島市	計
塩屋	6	4	13			1	6	12	2	2		6		8			97	157
〃 満	5	3	28					3				2		1		1	64	107
〃 川	1	1	1	1	5			54									27	90
〃 田							6	5		1	2	1	2	1			39	57
〃 入		6	1		7	12		1						9			18	54
〃 水			1	4	3	4		1									7	20
〃 津																	14	14
〃 谷												10					3	13
〃 賀		1	3									1			1		6	12
〃 盛							2	9									1	12
〃 崎																	7	7
〃 沢																	7	7
〃 井				1				1									3	5
〃 見											2	1					1	4
〃 向																	4	4
〃 釜																	3	3
〃 村																	3	3
〃 脇	2																	2
〃 留	2																	2
〃 福			1														1	2
〃 霧									2									2
〃 浦															1		1	2
〃 先									1									1
〃 鶴									1									1
〃 森																	1	1
〃 倉																	1	1
〃 官																	1	1
〃 丹																	1	1
〃 塚																	1	1
〃 瀬																	1	1
〃 飽																	1	1
〃 山																	1	1
〃 根																	1	1
〃 原																	1	1
〃 野																	1	1
〃 出																	1	1



谷山の塩釜神社

塩とその民俗

郡山政雄

はじめに

古代製塩の「おもかげ」を伝承する「お釜神社（宮城県）」に参拝して、実際に潮水を汲んで荒塩を採集して神前に供える貴重な神事の例祭と、四〇〇年の歴史をもつ世界最古の「天日製塩法」の能登珠洲市の無形文化財の「揚浜製塩場」を見学し、また、「塩の道」で有名な「千国街道」に足を入れて、現代の減塩を言われる言葉を聞いて。昔は人々は生きて行くために如何に塩は貴重なもので、如何に苦労して塩を求めたか、塩とその周辺を発表します。

(一) お釜神社の藻塩焼神事（宮城県無形文化財指定）

陸奥一之宮正一位塩釜神社は古い歴史と、いくつかの重要文化財でその名を誇っている。「塩釜さま」のその末社のお釜神社は、古い手振りで塩を作る「藻塩焼神事」を、今も特殊神事として伝えている。

1、お釜神社の塩焼神事

七月四・五六日の三日間「塩土老翁」の故事にちなんで、四日は海藻（ヒジキ）を刈る。藻刈神事で、五日は松島湾内の「釜の潮」で満潮時の潮水を汲み、それを旧来の神竈の上に竹で編んだ櫚に濾き、四日に取った藻を広げて、その上から鹹水を注いで窯に貯

え、火打石で竈に点火して時間をかけて煮つめ、荒塩を採集する。これは古代の製塩法のおもかげを伝える唯一のものといえる。

このお釜神社には「塩土老翁」の神から製塩の技術を教えられた時の四個の神竈が保存され、潮水が常に満たされている。この上には屋根も無く、雨も陽もさすが、竈の水はどんな大雨にも水があふれることなく、日照りにも水が減ることが無い。江戸時代には神竈の水が変色すると何かの異変がおきると信じていたという。

境内に「牛石」という変わった石がある。塩土老翁の命によって海水を運んだ、一頭の大牛が石になり、「牛石大明神」となったと。

(二) 日本の製塩史

①天日製塩法

天日に海水がさらされて、白い結晶をつくる製塩法

②直煮製塩法

海水を釜に入れて新を焚き結晶塩とする。

③藻塩焼製塩法

藻刈―乾燥―焼藻―灰塩―溶出―鹹水―前煮第二つの方法は、溶出―鹹水が無く、灰塩を固めて作る方法、また別に、灰塩の工程を通らず、海藻から鹹水を溶出して煮つめる、お釜神社の方法などがあるという。

④揚浜塩田製塩法

石川県無形文化財製塩法

⑤入浜式塩田製塩法

塩田に直接海水を入れてつくる方法で、瀬戸内海地方に江戸時代（元禄以後、宝暦、明和（一七五一―一七七二）にかけて、無統制な塩田開発で塩の生産過剰、価格の暴落、不売製塩が多く出た時代という。

⑥流下式製塩法

海水を流して、移動させ風力によって、水分を蒸発させる方法である。入浜式製塩は流下式塩田の発生をもって、昭和二十七年閉幕をつげたという。

⑦イオン交換法

やがて、製塩史に新しい時代を開く、イオン交換法に移る。イオン交換法は、製塩者の長年の夢で、海水中の水分九七％を追い出して三％の塩をとり出すもので、昭和三十九年始められ、昭和四十七年三月塩田が全面廃止されて、イオン交換法により、化学塩（塩化ナトリウム）（99％）炭酸マグネシウム（0.15％）となり、昔の塩はカマスに入って、塩カマスから「ニガリ」が出ていたが、現在の塩は、紙袋入りとなり、水気が無く、ニガリを添加した特別の塩も出ている。

(三) 能登の揚浜塩田による製塩

海岸に近い砂浜の適当な土地をえらんで石垣を築いて囲む、広さは四、五十坪から百坪位で、それに最良の浜砂を運んで平坦にならし塩田とする。塩水を人力で海から汲みあげ、これは製塩に適する気象条件の夏だけしかない、能登地方で発達したものである。

(イ) 塩田において

(A) 第一日午後

1、海水を塩田に撒布

2、骸砂を塩田に撒布

3、骸砂を均す

4、海水を骸砂に打ちかける

(B) 第二日午前

1、骸砂を集める

2、鹹砂を端間桶に入れる

3、藻垂及び海水を鹹に注ぐ

(ロ) 浜小屋に於て

1、鹹水を蒸発させて濃度を増す

2、濃鹹水を濾過脱水

3、清浄濃鹹水を熱すると粗製塩が出来る

(ハ) 珠洲市揚浜式製塩技術

・珠洲市無形文化財指定の製塩法

1、揚浜塩田　三三〇平方m

2、採塩量　一・五トン

3、採塩技術者　角花菊太郎

各作業段階に熟練し、特に荒潮桶（担桶）での採水作業、引桶の中に入って打桶で行う撒潮作業、柄振で鹹砂を集める採鹹作業など、長い年月の間に磨かれた研えた技術は立派で堂に入ったものである。

(四) 塩と交易

(1) 塩の道

長い年月、塩を海水から得て、これを運んだという塩の道は各地にある。中でも新潟県の糸魚川市から長野県の千国や大町市を通り松本市までつながる、延長一二〇kmの「千国街道」は保存状況などから代表的であるといわれる。この道は永禄十一年（一五六八）越後の上杉謙信が、北條や今川氏の塩止めに苦しんだ、武田信玄とその領民に塩を送ったという、「敵の塩」で有名で伝承されている。

この塩の道、千国街道で「塩の道祭り」が盛大に「歩こう旅姿」で、五月四、五日両日大町、白取、小谷で、当時の苦労をしのびつつ行われる。「塩の道」「千国街道」の著者、田中欣一さんは、行列と一緒に歩きながら、古道を歩くことで、その土地の歴史、文化を知って貰いたいものですといわれる。

(2) 本県の塩の道

加治木や帖佐方面から、宮崎県えびの市、加久藤、栗下方面へ、秋になると馬に塩の荷をつけた「塩負馬」が行って、新しくとれた籾と同量交換をしたという。

また、えびの市の人たちは、「子どもが」元気に育つように、塩売りを親分に頼むと良いという伝えがあるというので「ヤシネオヤ（養い親）」に頼んで、盆、正月には塩売りに鏡餅を贈り、村祭りに招いて、ご馳走をする風習があり、鹿児島の各地にも、塩と人のゆかしい交流の歴史が残されていた。

串木野の農家は、自給のほか、入来、祁答院、山崎方面まで馬で、籾一俵、塩一俵の物々交換を明治三十八年、塩の専売が公布

された後も、官位の払下げをうけた問屋や仲買人から購入して行商する人も多かった。

(五) 塩とその民俗

(1) 塩と信仰

平安初期禁中の年中儀式や制度を記した「延喜式」には、神への神饌として塩を供え、また「塩湯」、「塩水」をもって浄めるとある。この「塩をもって浄める」といった風俗がいつ頃から日本に定着したかは分からない。

(イ) 不浄祓いとしての塩

お葬式や死者に接した時、自家の入口で少量の塩と水で身を浄める。このように死に関した不浄を「黒不浄」という。

赤子や出産や女性の月事や産褥も不浄と見なして「赤不浄」ともいって塩をもって浄める風習もある。

(ロ) 塩の呪性

水神や地神の祟りで病気になった時、井戸端や地神に塩を置く、いやらしい人の去った後に塩をまき不浄払いをする。

(2) 塩の撒布

「塩はお葬式やお通夜の凶事に登場し、神祭りの前で撒く塩、おみこしに撒く塩、門前払いに撒く塩など塩を撒布すると、すべてが清浄となり、災難、怪我を避け得るものと考えるのである。

(3) 相撲と塩

お相撲さんの撒く塩を「清めの塩」ともいう。土中の汚物を清め、地中の邪気を払い、土俵を清め口に含んだ「心」気を清め、緊張感を高めるためといわれる。これは江戸勧進の組織制度が整備された、元禄時代に始まったもので、塩と紙と水で「ミソギ」を行った作法で、力水、清め水、紙は力紙、清め塩と（日本民俗）にある。

(4) 塩とまじない

①メイボ（ものもらい）　便所に行って、北方にむかって「メイボ散れ」と唱えながら塩を「へい」にすりこむとよい。（徳島、鳥取）

②ノメ（目の縁がはれる）　人に知られぬように（ヘソ）に塩を入れると治る（盛岡）

③寝小便　ふとんを背おい近所に塩をもらいに行くと治るという（北海道）

(5) 偶諺の中の塩

①あの人は塩気がない。…ネジのゆるんだ人

②塩っぽい…たしかな人、すぐれた人

③塩をしてやる…キュウキュウ徴す

④塩をなめてこい…苦労してこい

⑤塩をなめなめ稼げ…一生懸命辛抱せよ

⑥塩踏みにやる…奉公に出して苦労させる

(6) 塩の効能

①塩の解毒作用

塩の民間療として、塩水、塩湯は便通によい、下痢、泥酔、風邪によいといわれ、毎朝塩茶を飲むと年中無病であるともいう。

②外用の例

塩で傷口を洗うと化膿しない、霜やけ、雪やけ、毒虫にさされた時、塩で洗い、虫歯の痛どめ、塩温石を熱した布や袋に包んで

冷えた所や痛いところにおくとよいと。

(7) 味つけする塩

塩の欠乏に苦しんだ人々は、塩を貯える知慧が、味噌、醤油を多く作って貯え、漬物を年中絶やさない工夫をして、塩が無くなって困ることのないようにした。

(8) 塩に関することば

塩の使い方によって、甘塩、ひと塩、立塩、低塩、呼塩、化粧塩、ひれ塩と使用法がある。また、塩加減、塩辛、塩気、塩煙、塩鮭、塩瀬、塩出、塩断、塩煮、塩花、塩浜、塩外、塩水、塩刻、塩蒸、塩焼、塩物などがある。

(六) 本県の塩釜神社

(1) 塩釜大明神

鹿児島市塩屋町字七曲二八九

一、祭神 塩土老翁

二、由緒 不詳 寛永五年 山伏和泉坊の申出により、此所に勧進すとある。

(2) 塩釜神社

鹿児島市谷山塩屋町一〇五六

一、祭神 塩土老翁

二、神体 鏡

三、氏子 上塩屋上、中、中塩屋

社殿はもと射場前に鎮座していたがのち現在地に遷座、境内に社殿改築記念碑がある。この中塩屋、小松原、東塩屋、西塩屋の各地は藩政時代谷山塩屋と呼ばれ、塩の産地であった。

この塩釜神社は「塩釜大明神」とも呼ばれ、製塩業者の守護の神で、また塩釜さまは子供すきで、神社で一人も子供が遊んでいない時は神様は気嫌が悪く、境内ではどんなに遊んでも怪我をすることはなく、またこの地方には子供の流行病が無いと言って、村人たちは無病息災と製塩漁業航海と安産を願い、村人の信仰が厚かったという。

(3) 塩釜神社（塩竈大明神）

川南塩入瀬脇にある。勧請年月日や由緒などわからない。御神体の座木像一体があるはず。境台に六地蔵と延享五年（一七四八年）二月廿日建立奉再興の石塔（上部なし）がある。お祭りは旧六月十二日、旧十一月十二日の二回。神社前附近の田んぼを塩浜田ぼといって、明治初期以前の塩田の跡であるとの伝えがある。塩入神楽を奉納していたが、戦後途絶え、最近復活した。神楽の面が溝渚兵衛宅に保存してある。一説に社殿の花水をつければ腫物がなおるという。

(4) 塩釜神社（阿多郡市俣町）

塩竈大明神（でみじんさま）

入口は杉の丸太の鳥居に塩釜神社とある

元は部落の人の奉祭。三月かつぎが祭礼

橋口菊蔵が管理

石祠に寛保七年（一七一〇）とある。

(5) 塩釜神社（鹿屋市輝北）

かごしまの郷土歴史資料に

塩田の近くに塩釜神社があったと

いうが現在は畑になって、その畑

の隅に 石祠（大正十一年）がある。

1．鹿児島における製塩の概要

藩政時代までは自給自足中心の経済であり，しかも塩は生活必需品であることから，製塩は県内の海岸地帯で多くみられました。塩田としては，干拓などの土木技術が発達した近世に入浜式が出現する。

図Ⅰ

「鹿児島地方局史」（日本専売公社編）より作成

地名研究会報

第３１号
平成３年６月２日
鹿児島地名研究会

Ⅰ．第３１回例会　　平成２年１２月９日（日）　於教職員互助組合会館
（出会者）　大田照夫・小川亥三郎・小川秀直・郡山政雄・千葉昭彦・浜崎盛雄・肥後芳尚・平田信芳・二見剛史　（計９名）

Ⅱ．甕藩名勝考読会　　P.104 ～P.106
（問題となった地名および事項）　ミヤマキリシマ・高千穂・霧島・韓国岳・一杯

ミヤマキリシマ

平田　今日の箇所はだいぶ難しかったようです。読んだところで何か問題にしたいものはありませんか。そうですね、105 ページの下の方に、ミヤマ＝キリシマ。ツツジのことを「キリシマ」と呼ぶという説明が書いてあります。オハラ節の文句「花は霧島」とあるのは霧島の山ツツジのこと。去年の五月、『文化ジャーナル鹿児島』に書いたものですが、これと対応すると思って、参考までにコピーして来ました。この「オハラ節に見える地名」の左側の下の方、下の段の５行目あたりに、島津重豪がミヤマキリシマの鉢植えとか、タバコを江戸城中で宣伝したんだろう、と。私がそのような推理をしたわけですが。『大石兵六夢物語』の作者、毛利正直が『煙草記』というのを書いております。その中に「車田」とか「竜王」という銘柄が出て来ますが、江戸城中でも知られていたということが書いてあります。江戸城中で知られるということは、殿様が持って行って宣伝したということですから、これは重豪あたりが宣伝したなということを物語っていると思います。この『甕藩名勝考』では、ミヤマキリシマを鉢植えとして楽しんだということについて、寛文年間に藤堂和泉守が霧島から取り寄せて宣伝したというようなことです。これも一つのルーツではないでしょうか。それよりも、やはり島津の殿様が宣伝したのが大きかったと思うのです。それから、これはもっと整理する必要がありますが、『甲子夜話』に、江戸城中での大名たちはすることがないので鉢植えなんてのを一生懸命やっていた、と書いてあります。それで、霧島のツツジというのは名高かったと思うのです。ただし、「ミヤマキリシマ」という名前を付けたのは牧野富太郎で、新しい時代のことですから、ミヤマキリシマという名前はなかったのでしょうが、キリシマというツツジの鉢植えは古くからあった。それが「花は霧島、タバコは国分」という民謡の由来になります。

高千穂

平田　ちょうど一週間前、高千穂に行き、夜神楽を見て来ました。霧がかかっていましたが、コニーデ型の山はないかときょろきょろ見回したところ、随所にあったようです。刈干切唄の故郷ですけれども、草刈りの時期になると高くピラミッド型に切った草を積みあげるんだそうです。数多くの稲穂を、千穂を高く積みあげるということから、千穂郷という名前が生まれて来たんだろうと思います。日向国風土記逸文に、ニニギノミコトが霧にとざされて道がわからなくなったとき、土人、そこの人たちが穂を集めて杈を霧に向かって投げたら霧がはれると

いう話をした。稲穂を、籾を高く積みあげたということが「千穂」という意味だろうと思います。余談ですが、高千穂夜神楽はよかったです。平安か鎌倉の神楽が、そのままずーっと残っているような感じでした。来年また行こうと思います。徹夜でやるんだそうです。三十三番は、なかなか聞けるものではありません。

霧島

郡山　霧島はツツジが多くて、ツツジの霧島からまぁ、霧島となった。私のところ、郡山には花尾山という地名があるわけですが、花尾山はいろんな種類の花がきれいであったから、花尾山と名前を付けたというわけですけれども、これは根拠があって。

平田　いや、霧島というのは、霧の中に島のように浮かんでいることから－－－－

郡山　あぁ、それから来てるわけですか。

平田　はい、それからです。霧島の山に生えているツツジを「キリシマ」と名付けて鉢植えにして喜んだのですね。

郡山　山が先で、ツツジが後。

平田　それは、そうですよ。

郡山　あっ、そうですか。

平田　国分あたりから見ると、ちょうど霧が下にかかって、高千穂峰や韓国岳が島のように浮かんで見えることがあります。文字通り、霧島という感じです。島のように浮かんで見えるわけですから、霧島という地名が付くわけですね。そこにあるツツジですから「キリシマ」と名付けた。そして、江戸城中で大名たちがこれをもてはやしたわけです。また「ミヤマキリシマ」と命名したのは、植物学の分類上では、牧野富太郎ということです。

二見　霧島という地名は、全国的にはないんでしょうか。

平田　うーん、どうですかね。あると思いますよ

二見　ありそうで、なさそうで。

平田　ありそうで、なさそうで（笑い）。いやーそこまでは。『地名索引』を持って来ておれば、すぐ引けるのですが。鹿児島県には霧島という地名はたくさんあります。霧島神を勧請して霧島神社を建てるわけですから、それから霧島という地名が付けられます。鹿児島県には何十箇所もありますよ。それは信仰上の地名ですから。

韓国宇豆峯神社・韓国岳

平田　これは以前調べたことですが、昨夜『延喜式』で再確認しました。「韓国〇〇神社」と付くのは延喜式には十一社しかありません。延喜式の神名を引いて来ましたので、書いておきましょう。式内社は全部で3,132 。このうち「韓国」「韓」などが付く神社は十一社あります。韓神社(カラカミノヤシロ)というのが宮内省に二つあります。宮内省三座の中で韓神社が二座あります。それから韓国神社というのが、河内国志紀郡にあります。韓国伊太氏神社。これが出雲国に六つあります。意宇郡に三座、出雲郡に三座あります。韓国〇〇神社というのが出雲国だけで六つあるわけです。他に「カラクニ」が付くのは、韓国息長大姫大目命神社。これは豊前国田河郡にあります。あと一つは、国分市の韓国宇豆峯神社ですね。大隅国囎唹郡になります。「韓国〇〇」と付くのは、式内社ではこれだけです。式内社以外にもあるかも知れませんが。そうすると、出雲国・河内国・豊前国・大隅国、これだけしかありませんから、大隅国の韓国宇豆峯神社は、当然、豊前国の流れを汲んだものと言えるわけです。韓国宇豆峯神社の説明板にも、豊前国から移って来て神を祀ったと、はっきり書いてあります。大隅国設置当時に、「韓国〇〇」というものが移って来たことは、はっきりすると思います。韓国神社と韓国岳はからめて考えなければならないだろうと思います。朝鮮半島南部にあった加羅国と関係があるのでしょうね。韓国岳は韓国神と関係のある山の名前だというのが

正しいのではないでしょうか。

浜崎　伊太氏(イタテ) 神社とありますね、３番目に。頴娃町大川に、いわゆる「釜蓋(カマブタ)どん」というのがあります。字が違いますけど、やはり「イタテ」と言います。そして、武の神様だということで、戦時中なんか特にお参りがあったんです。頴娃のものは「射楯兵(イタテツワモノ) 神社」。「射楯兵」と入口に書いてあります。戦時中非常に大事にした。普通は「釜蓋神社」です。大宮姫を迎える時に釜の蓋が飛んで行ったというのです。その意味で有名でした。「イタテ」、何か共通するものはないかと思って。

平田　いや、それは分かりませんが。うーん、『延喜式』神名に、まだ他に「伊太氏」と付くのはありますよ。「イタテ」だけを追求すれば何かつかめるかも。しかし－－－

小川　重永先生の書いたものにですね。

浜崎　何かありますか。

小川　はい。この「射楯神社」というのはどうも新しい。明治に作ったのじゃないか、と言うのですがね。

平田　新しい？

浜崎　棟札にはですね、全然武の神様らしいことは書いてないのです。五穀豊穣とか国家安寧とか、そんなのが主でありますけど。

小川　開聞神社の文書には竈神と書いてあるんです。竈の神様。

浜崎　はぁー。

小川　竈の神様。重永氏はそう云うています。あれは竈神、と。

浜崎　カマドの神様ですか。は、はぁー。

小川　カマド荒神みたいなものじゃないですか。それで、射楯兵神社というのは、あれは明治になってから作ったのじゃないかというような話でしたがね。

平田　その他に、韓竈神社。カマドですね。韓竈神社というのが、やはり出雲国出雲郡にあります。それから「カラタチの花」というのがありますが、「カラタチ」は韓の太刀が尖っていたことに由来するのでしょうが、丹後国竹野郷に枳発神社があります。加良比乃神社というのが伊勢国安濃郡にあります。三重県の津は安濃津。博多津・安濃津・それに坊之津が天下の三津。そこにも「カラヒノ」という名の神社があります。現在もあるのかは知りません。その他に、韓国関係の式内社を拾うと、越前国敦賀に「シラキヒコ神社」、能登国鳳至郡に「ミマナヒコ神社」「ミマナヒメ神社」というのが出て来ます。韓国関係の式内社は以上です。結論は、韓国神を祀った山、それが韓国岳の由来だろうと思います。

二見　高麗(コマ)と韓(カラ)とは、違うのですか。

平田　高麗(コマ)？あれは、高句麗でしょう。

二見　あれと韓(カラ)とは全然違う？

平田　違います。（朝鮮半島の略図を板書）　南の方が韓国ですね。北の方に高句麗というのがありました。高句麗は 668年に、唐と新羅に挟撃されて滅びます。この時、高句麗の人たちが南と北に分かれて逃げます。南の方、日本に逃れて来た人たちが関東地方に土地を与えられて住みつき、高麗人(コマビト) と呼ばれるようになります。東京都に狛江(コマエ)という地名などが出て来るわけです。

二見　狛江？ありますね。

平田　それから、韓(カラ)というのは、これは南の方に三韓というのが、馬韓・弁韓・辰韓とあるわけですね。高句麗が北の方を統一するのが４世紀。南の方では同じ４世紀の頃、馬韓が百済、日本でいう百済(クダラ) ですね、弁韓が任那(ミマナ) になるわけですね。辰韓が新羅(シラギ) になります。百済と新羅は問題ないのですが、任那は日本の歴史では任那日本府というのが６世紀まであって、562 年任那日本府

が滅んだということになっていますが、朝鮮および韓国の歴史家は「任那」という存在を認めないわけです。加羅国と言ってるわけです。これから来ているのです。釜山のちょっと西の方に金海という所がありますが、そこが加羅の本拠地です。２週間ぐらい前、金海の古代史研究会の人たち50人ばかりが、いわゆる加羅国の人たちと、いわゆる熊襲は先祖が同じということで、霧島神宮に参拝に来たという記事が南日本新聞に出ていましたけど。このつながりだと思うんですが。

一杯

浜崎　いい機会ですから質問します。106 ページの上の方に「酒の一杯」というのが出てきますね。註のうしろから２行目。この「一杯」というのが、郷土史を作るときに問題になったのです。というのは、頴娃の古記録に「芋焼酎百人に付き三杯半宛」の節約令が出ているのです。それが頴娃町の昔の郷土史に出ているのです。その例を引いて、川越先生の『南国風土記』をはじめ、いろんなものに利用されているのです。問題は、その「一杯」はいくらかということ。川越先生は「一杯は二合七勺である」と書いておられます。頴娃郷土史には「一杯は二合七勺である」と書いてあって、何も根拠を書いてないのです。あっちこっち聞いてみても、焼酎会社に聞いてみても判らん。ところが『入来郷土史』には「一杯は三合」と書いてあります。肥後先生の紹介で、あの、なんという先生でしたかね、入来の。

平田　本田先生？

浜崎　本田先生に、電話で根拠は何ですかと聞きましたら、川添家に昔焼酎を計ったドンブリというのが伝わっている。試しに水を入れてみたら、ちょうど三合あったから、三合と書いた、と。ところが頴娃の場合は二合七勺となっている。二合七勺と書いてあって何も根拠がない。昔の度量衡というのは適当に計るというようになるんじゃないか。ところが、明治になっていわゆる西郷どんの戦争の時、各地方から徴発しとるのです。頴娃の方では味噌何椀・醤油三十杯とある。「杯」がまた出て来る。醤油三十杯は、今さっきの要領で、焼酎の二合七勺の計算の三十杯を出したものか。度量衡について一杯の何かがあったんじゃないか。あるいは地方によって違ったのか。どなたか、何かご存知じゃないでしょうか？

肥後　以前、屋久島のことを調べた時に、「杯」が出て来ました。あちらでは、まだ使っているようです。はっきり何合とは言えないのですけども。場所・場所によって、少しぐらいの差はあるんじゃないかと思います。これは原口虎雄先生にも聞いたのですけど、原口先生もそういう意見でした。本土と屋久島とは違うかも知れませんが、屋久島と本土とはだいぶ違った桝目でやっていたんじゃないかとも思います。

浜崎　頴娃の古記録に云々と引用されるもんですから。本家本元ではさっぱり判らんのに。

肥後　あぁ、そうですか。

浜崎　これは蟹江先生なんかのグループも本を出しておられますが、からいもの本を。からいもの研究者に聞いてみたり、焼酎「白波」の研究室に聞いても、そういうのは答えが出て来ません。

郡山　私のところにですな、講の記録。二百数十年にわたる講の記録があるんです。その講の記録に三合というのがあるわけです。一杯のことが出て来ましたが、昔は一杯ちうのは三合じゃったたんどかいというような話ですけど。

浜崎　入来町のそれと合っていますね。川添家というのは出水から養子に来た家だそうです。その家にあるのかと聞きましたら、あるはずだということです。

平田　うーん、尺・度量衡というのは難しいですね。

肥後　難しいですね。畑の広さにもいろいろ表現がありますから。

平田　畝町(セマチ) がありますね。うーん、１ツカと言ったり。

肥後　あれは、場所によって違うのですね。50歩＝１ツカ，という所もあるし。

郡山　一升蒔・二升蒔という、田圃を「蒔」というわけですが、それも50歩あったり、いろいろで

肥後　そうですね。

平田　なるほど。

肥後　畑の広いところは、一升蒔とか。

浜崎　一ツカ？

二見　「ツカ」といっているようですね。

郡山　私のところでは、「１ツカ」と言えば25畝のこと。

浜崎　「ツカ」というのと、「蒔」というのが。一升蒔とか、二升蒔というのが。

郡山　畑はあっちこっちで呼び名が違うんですな。畑は「ツカ」という。１ツカとか、２ツカ。

浜崎　は一、そうですか。私は「ツカ」というのは、いわゆる山を。これは汚い話だけど、人糞を使う。それで、畑が１畝であれば、山をいくつか作って、そして混ぜて、それに種子を入れて一升蒔やったら一升入れて、混ぜて、肥料桶で蒔いた。その山を「ツカ」と思っとったんですが。山が２つ出来たら「２ツカ」の畑ということになるんでしょうな。

肥後　肥料は正解かも知れませんね。

平田　あぁ、そっちの「塚」から来たんですか。

肥後　いや、わかりませんけど。

平田　二束二把という昔の租の単位。束をツカとも読むんじゃないですか。

肥後　あー、だけども、「ツカ」というのは広いのですよ。

平田　もっと、広いのですか。

肥後　うーん、50歩ぐらいはある。

平田　あぁ、それは広いな。

浜崎　度量衡は、地方によって、いろいろ違っておったと考えていいわけですね。

肥後　うーん、そうですね。

浜崎　というのは、私どもの研究会で違ちょらせんかとか、非常に厳重で全部統一されていたはずだとか、いろいろ意見があるもんですから。

平田　ちょっと休みましょうか。

谷山と山川

平田信芳

今日は佐野先生が「喜界島の地名」を話す予定でしたが、シラス研究会の巡検とダブってしまったので、それは次回にするとして、臨時に話をします。この「谷山と山川」の整理にとりかかったものですから、会報が仕上りませんでした。後日、送ることにします。

「谷山と山川」というプリント２枚に、まとめておきました。山が浸食されて谷が出来る。それから山を流れる川が山川(ヤマガワ)です。山川草木といえば山・川・草・木。自然景観すべてを、そう言った言葉で表現出来ます。それから、昔ならば敵・味方の符号として「山」といえば「川」と答える。「谷」と言って「山」と答えてもよさそうな対照的な言葉で、これが一つの地名になるのは何か変だなと疑問を持っていたのです。そういうことで「谷山・山川」というのに以前から注目しておりました。

谷山は10世紀前半の『和名抄』に出て来るわけですが、これは「谿山」と書いてあります。谿・谷はどちらも「タニ」と読むのですが、谿は水が流れる方ですね。水が流れないのは谷（コク）と言ってる

ようです。だから谷川とか谷川の水という場合には「谿」の方がいいように思うのです。そういう区別があるようです。和名抄には谷山郷と久佐郷の二郷があるようです。久佐(クサ)郷と読むのでしょうか。谷山は地名が残っています。伊勢本とか刊本には、一説に「谷上郷」という郷がありますから、谿山郡は二郷だったと考えられます。久佐郷はどこだったか判りませんが、入佐(イリサ) という地名もすぐ近くにありますし、草野貝塚で知られる草野という地名もありますので、実体は判りませんが、谷山郷と久佐郷の二郷があったとみてよいでしょう。

12世紀末の建久図田帳になると「谷山郡二百町」という形で現れて来ます。『三国名勝図会』は古い形の「谿山郡」を書いています。さらに『三国名勝図会』は、谿山郡には伊佐智佐郷と山田郷の二郷があることが書いてあります。伊佐智佐郷というのは現在でも伊佐智佐神社というのがあり谷山郷の惣廟だったことから谷山郷イクォール伊佐智佐郷と考えてよさそうです。もう一つ山田郷がありますから、谷山または谷上郷と山田郷から一字ずつ採って「谷山」という郡名が生まれたとする複合地名であればうまく行くんですけども、まぁ、そうは問屋がおろさんようです。伊佐智佐郷、別名谷山郷。これには福元村と和田村が含まれる。現在の大字でいうと、上福元・下福元・塩屋が江戸時代の福元村ですね。和田村というのは、和田と平川が含まれておった。山田郷は山田村と宇宿村。現在の大字でいうと、山田と中。「中」というのは現在中山(チュウザン) と言ってる地帯ですね。それに五ヶ別府(ゴカベッブ) の一帯。

鹿児島県の谷山だけで「谷山」という地名を考察するのは冒険ですので、『日本地名索引』や『日本歴史地名総索引』などから拾ってみますと、14例、「谷山」という地名がありました。これらは大字以上の地名です。①は宮城県白石市の地名だと思うのですが、分県地図では探し出せませんでした。座標軸から見ると、山奥の地名です。②以下は地図で確認しました。②岐阜県揖斐郡－－村谷山、③兵庫県多紀郡丹南町谷山、④兵庫県出石郡出石町谷山、⑤徳島県那賀郡－－町谷山、⑥高知県高岡郡仁淀村谷山、これらが山奥にある谷山になります。高知県安芸郡馬路村谷山、福岡県糟屋郡古賀町谷山、これらは谷山川の谷口部に位置します。大分県日田郡天ヶ瀬町出口字谷山、鹿児島県和泊町谷山。和泊町には行ったことはないのですが、これらは山奥になるのでしょうかね。(『鹿児島県地名大辞典』によるともともとは「田舎平」であったが、昭和18年、大島支庁長谷村秀綱と村長事務取扱登山明竜の名前から一字ずつ採って「谷山」という地名を作った、と)それから、鹿児島県では根占町川北に谷ヶ山という所があります。もう一つ、京都府右京区になるのですが、分県地図では見当りませんでした。

右側に「山奥」と付記しておきましたが、「谷のはじまる山」とか「水源のある山」を谷山と呼んだのじゃないかなと思います。そういうような所に谷山という地名が付いているようです。

もう一つ、万葉集と八代集を当ってみました。万葉集は大伴家持が 759年に編集したもの、八代集の最後の新古今和歌集は藤原定家が1205年に編集したといわれています。８世紀から13世紀初めまでの歌集に使われている言葉は、一つの面白いものさしになると思います。そこで、「谷」という文句、「谷川」の表現、「山川」という表現が、これらの歌集に幾つ出て来るかを調べ、それを数字化したのがレジュメの図表です。これを見ますと、初めのうちは「谷」という表現が出て来ますが、後撰和歌集で２、拾遺和歌集は０、後拾遺和歌集は１、金葉和歌集は１、詞花和歌集が０、というふうに「谷」がとだえるわけです。千載和歌集と新古今和歌集でまた出て来る。「山川」というのは、ずーっと出て来ます。万葉集に「山川、27」というのは、やはり特徴的です。

山川と谷川を比較すると、「谷川」という呼び名は、12世紀の金葉和歌集で４、新古今和歌集で３というふうになります。これは新しいなと判ります。時代的にみて「谷川」という表現は新しい呼び名、「山川」は古い表現になります。歌人たちが、時偶「山川」という古い表現を使ったと理解できます。万葉集および八代集を見ると、それらが数字的に出て来るということですね。これは当然じゃないでしょうか。万葉の人々は、山奥へどんどん入って行った。だから、山川を見ていたのでしょうが、平安末から鎌倉になって来ると、貴族たちは山に入って行くことはなかったから、出掛けても谷川、山の入口で「谷川」を詠んだということでしょう。「山川」を詠むのは想像だけに過ぎないのではないか。そういう奈良の貴族たちの行動範囲、万葉歌人の行動範囲と、平安貴族の行動範囲というのは違っているということを、「谷川」という表現と「山川」という表現は示していると思われます。

そこで今度は「山川」というのは何かということです。鹿児島県の方の資料になりますが、「山川」という地名例はそこにあげた通りです。『鹿児島県地名大辞典』には次の史料を引用してあります。『旧記雑録』前編 389号文書になりますが、文暦二年(1235)八月二十八日の関東下知状に「揖宿郡地頭島津忠綱」これは島津忠久の二男。その舵取として「同郡山河の住人、字は阿波三郎信元男」がいたとある。これが「山河」という地名の初登場ですね。その次はまだ当ってないのですが、恐らく『旧記雑録』後編の一ぐらいになるんじゃないかと思いますが、山本氏日記、弘治元年(1555)五月二十四日の条に「山川へ蒲生の者、唐船へ乗候」と。唐船とは倭寇の船のようです。「十人来り候を打詰め候由、使僧を以って頴娃殿に申しあげられ候」。頴娃の殿様頴娃氏が山川を支配していた頃のようですね。これが「山川」の初登場です。

その次『三国名勝図会』で山川郷を見ますと、揖宿郡山川郷山川湊というのが出て来ます。後世は福元村、別名山川村という。それから、成川村。正保四年(1647)頴娃郡の大山村が山川郷に合併されている。慶安三年(1650)岡児ヶ水村が山川郷に合併される。現在の山川町は福元・成川・大山・岡児ヶ水、この四大字構成が基本ということですね。

山川(ヤマガワ)と山川(ヤマガワ)と呼ぶことについてですが、「やまがわ」というのは「山の中の川・山中を流れる川・山から流れ落ちる川」。もう一つは「山の側」、サイドですね、山側、それから来たという解釈もあるようですが、ちょっとそれは無理なような気がします。それから「やまかわ」と呼ぶのがあるわけですね、「山と川」。山川アナウンサーという有名なＮＨＫのアナウンサーがいますが、苗字では「やまがわ」さんはいないけど、「やまかわ」さんはいるようですね。「やまがわ」さんは聞いた覚えはないのですが。

そこで今度はさっきの谷山と同じように、山川(ヤマガワ)と山川(ヤマガワ)という地名例を出してみます。「山と川」・「山の中の川」と、地図で見比べるんですが、どうもはっきりした差がないようです。「やまかわ」と呼ぶのは、茨城県結城郡八千代町下山川、富山県高岡市山川、京都市下京区山川、福岡県久留米市山川町、福岡県山門郡山川町、鳥取県東伯郡赤崎町山川、山口県厚狭郡山陽町山川、長崎県諫早市山川町。これらが「やまかわ」と読むようです。『日本地名索引』では、これらの中でも「やまがわ」と読んでいるのもありますが、人文社の『分県地図』索引の振り仮名で「やまかわ」に分類しました。「やまがわ」というのも『分県地図』のよみで分けました。栃木県足利市山川・埼玉県大野郡岡部町山川は「やまが」と仮名が振ってあります。千葉県鹿取郡児美川町山川・金沢市山川は「やまご」

これは「やまがわ」から来ているのでしょう。高知県香美郡香美町山川、長崎県南高来郡有家町山川、熊本県天草郡有明町山川、それに鹿児島県揖宿郡山川町。沖縄県の伊江島にも山川があります。

ほとんどが山から流れて来る川と理解できるのですが、鹿児島県の山川町は、山奥から流れて来るような川、そういう地形的なことが考えられるのだろうか、と思うのですね。そうしたら、例えば大山の「山」と成川の「川」とを一字ずつ採った合成地名だと考えればよさそうなんですが、さっき見た通り、後世の山川郷は初め福元・成川で構成されていた。福元のことを山川村と言ったようですが、これだけでは複合地名だということは出来ません。

そこで、小川先生は山川の方なんですが、本当に山深くて山川がありそうな所なんでしょうか、山川町というのは。あれは「やまがわ」でなくて「やまかわ」、どちらなんでしょうか？その辺がお聞きしたくて、問題提起をする次第です。

それから(3) の鹿児島県の小字一覧に見える谷山と山川ですが、残念なことにルビが振ってないのが多いのです。ここにあげたものでも、川辺町とか市来町とかは振り仮名が振ってありますが、他のものは正確には「やまがわ」と読むのか、「やまかわ」と読むのか判りません。(2) の山川については一つ一つこれは「やまかわ」だ、これは「やまがわ」だと、ご存知であれば教えて頂きたい。

「やまがわ」であれば、山奥を流れる川。それから広まって行った地名でしょうし、「やまかわ」となれば、山と川が一緒になって出来た地名と考えざるを得ません。まぁ、そういうことです。そんなことでお茶を濁したいと思いますが、小川先生、いかがですか。山川（やまがわ）は。

〔質疑応答〕

小川　小字一覧の下の方に、(2) 山川とありますね。1.が山川（やまがわ）、樋脇町市比野。それから、宮之城町舟木に山川（やまかわ）とありますが、これらは「山の川」で「ヤマンコ」という。

平田　どっちもですか？

小川　舟木が山川（ヤマンコ）。

平田　舟木が山川（ヤマンコ）ですか。

小川　舟木に行きますと、「山の川」を訛って「ヤマンコ」と言うております。そこへ行ってみますと、山蔭に湧き水があるんですな。その湧き水を「ヤマンコ」と言っておるようです。山川町の山川は今の麓にあたるわけですが、もと山川村と言ったのを大正年間に福元村と名前を変えております。つまり昔の山川村と成川村とは別の所なんですね。成川村の方には「川」が流れておるわけで、まぁ古い本には「鳴川」、音が鳴るを。

平田　音が鳴るを？

小川　「鳴川」と書きます。あすこに小さな滝があります。それで鳴川というわけです。水成川(ミナリガワ) なんかも同じ意味（水鳴川）ですけれども。昔の山川村、まぁ福元村。おっしゃったように川がないのです。ところが、川がないけど、湧き水が山の中腹に二ヶ所ほどあります。私の考えでは、その湧き水を「ヤマンコ」とか「ヤマンゴ」と言ってたのではないかと思ってるわけです。成川地区の山の中に「山之川（やまのがわ）」という字がありますが、土地の人は「ヤマンコ」と言っております。そこには湧き水があり、田圃が約1町歩ぐらいありました。その湧き水の所に田圃を作っとったようですが、現在は作っていないようです。

山之川(ヤマンコ)という所には、行ってみると、大抵湧き水がある。屋久島にも山之川(ヤマンコ)という所が二ヶ所ぐらいあります。安房に一ヶ所、尾之間に一ヶ所、山蔭に湧き水があります。そこでも「ヤマンコ」と言います。室町時代のポルトガル人の船長が書いた手紙に、山川に停泊したことについてホンコンからの報告ですが、それにはローマ字で「ヤマンゴ」というふうに書いてあります。それは『山川郷土史』に出ておりますが、現在の郷土史にはなく昔の『山川村郷土史』に、その船長の書いたというのが出ておりました。「ヤマンゴ」と。あの頃は「ヤマンゴ」と言うておったようです。それで、山川（やまがわ）というよみは、わりと新しい読み方ではないかと思っておるわけです。山川村の「やまがわ」は、もともとは「やまんご」だったと思うのです。また「ヤマンゴ」が訛って「ヤマンコ」になっているんじゃないか。小字一覧の下から二番目に川内市麦之浦山川に「ヤマゴ」となっておりますが、これなんかも「ヤマンゴ」に発音が似ていると思います。

以前、川内の赤沢津(アカサワツ) という所に行ったことがあります。そこで湧き水はないかと聞きますと、もとは山の中に『山之川(ヤマンコ)』があったと、地元の人が言ってましたので、あの辺でもやっぱり山の湧き水のことを「ヤマンコ」と言っておるようです。赤沢津というのも元々は湧き水に関係があるようなので、そう思いました。仏教用語では仏さんにあげる水を「閼加(アカ)」と言ってるようです。小舟の底にたまった水を「アカ」という。ゴミも垢と言いますが、サンスクリット語で「アカ」というのは水を意味するようです。「赤」という地名の中には、そういう湧き水に類するのもあるんじゃないかと考えます。川のない山川。山川はおかしいと思って調べてみたら、そういうことです。「ヤマンゴ」という湧き水を意味するんじゃなかろうか、と思った次第です。

平田　「ヤマンゴ」という山の泉からヤマンゴという地名が付き、それが為政者によって「山川」というふうに文字を当てられた。そうすると、山を流れる川がなくても「山川」という地名は付いて来るわけですね。いいことを聞きました。有難うございました。

浜崎　先程の話の水成川(ミナルガワ) ですね、あれの上流に「水成川(ミナイゴ)」という涸れ川があります。それも「川」という字を書いたものと「水成郷」と書いて「ミナイゴ」と仮名を振ったものとがある。漢字は、まぁ当て字でしょうけど。それで、山川の「川」はもともとは「ゴ」と発音しとったのか、他に何か文字があって「ゴ」と言っておったのか、「川」が方言化して「ゴ」になったのか、音韻上の問題はどうですか。

小川　種子島・屋久島あたりでは「川」を「コ」とか「ゴ」と云うておる。

浜崎　字は、やっぱり、この「川」をですか。

小川　えー、「川」という字を書いて。鴨女川(コウメガワ) という川が、西之表にあります。あっちの衆は「コウメゴウ」と読んでいる。川(ガワ)と読まずに。

浜崎　方言で考えたら解決するのでは。例えば、谷山であれば「谷」のことを薩摩の辺では「タン」とか「タイ」という。だから谷山(タンニャマ) という言葉も、谷を「タン」という方言から始まって谷山(タンニャマ) という呼び名が生まれたんじゃないか、と思うのですが。

小川　それはそうでしょうけど、谷を「タン」というふうに訛ったのはわりに新しいんじゃないか。そう思われますがねー。昔はやっぱり谷(タニ)と言っていたんじゃないかと思います。谷(タン)とか谷(タイ)と訛るのは、江戸時代の初め頃じゃないかなぁと思うのですが。上村孝二先生という方言を研究されている鹿児島大学の先生は、わりと新しいとされています。奈良時代から今のような方言を使っているんじゃない、と。

浜崎　えー。

小川　今の方言で古代の薩摩語を当てはめて、そうじゃないかと解釈するというのは、ちょっとおかしいんじゃないですか。甑島で気付いたのです

が、雨が降った時、こっちじゃ「ウッチャメがすっど、早う雨戸を閉めんか」と言うでしょう。甑島では「ウッチャメ」とは言わん。「打ち雨(ｳﾁｱﾒ)」という。

浜崎　ウチアメ？

小川　なんごて「ウチアメ」なのか。甑島の言葉はですね、薩摩方言の古い時代の姿をそのまま伝えておるのが多い。

浜崎　打ち雨がウッチャメに訛ったのは、新しいものであるのが判って来ますね。あぁ、いいことを聞きました。

小川　甑島でいろいろ聞くと、甑島のことばは古いな、これが薩摩語の昔の姿だなと思うことがままあります。

二見　川を「コッ」という例が溝辺にあります。川久保(ｶﾜｸﾎﾞ)と書いて「コッボ」。コッボンガワと言いよったですもんねー。「コッボンガワへ行たっせー、水浴び(ﾐｯﾁｬﾋﾞｰ)すいが」と言うていました。

浜崎　コッボですか。

二見　川久保と書きます。それを「コッボ」と言います。聞いていて、これは例になるなと思いました。

小川　指宿に、湊川という所がありますね。

浜崎　はい、浜に。

小川　あれは、土地の人は、湊川(ﾐﾅｯｺﾞ)と言います。

浜崎　ミナッゴ、なるほど。

二見　大字・小字というのは、いつ頃から言うようになったのですか。

平田　明治22年の市町村制施行の時に、それ以前「村」と言ってたのを「大字」にしたんですね。村の中の細かい地名を「小字」と言った。

二見　そうすると、明治以降ですか。

平田　いや、それ以前も小さい地名はありますが、「小字」という言い方になるのはその段階といいでしょうね。

二見　少なくとも明治になって、今の大字・小字できちっとしたという向きがあるわけですか。

平田　それは県によって違いますけどね。中央政府の命令通りやった所もあるし、面倒臭がって〇〇村〇〇の〇番から〇番と、番号で済ました所もありますしね。わりに、昔の地名というか、畑とか田圃には一枚一枚ごとに呼び名があるわけですから、それは大事にして小字に採用しているようです。

ありがとうございました。谷山というのは、谷口とか谷上などと山田あたりの複合地名のような感じもするわけですが、あるいは谷が始まる山から谷山と付いたかも知れんませんが、山川（やまがわ）は小川先生の説明ではっきりして来ました。湧き水を「ヤマンゴ」と言い、それから山川（やまがわ）という地名が広がって行ったんだなということのようです。

浜崎　「ヤマンゴ」は、よかあいやなぁー。

二見　地名の山川(やまがわ)と人名・苗字の山川(やまがわ)ですがーーーー。

平田　苗字は山川(やまがわ)。

二見　やまかわ？

平田　山川(やまがわ)さんという人がいますか？

二見　それでは、山川(やまがわ)アナウンサー。山川(やまがわ)という姓があるんですか。

平田　山川(やまがわ)という苗字は人はいますよ。鹿児島で山川(やまがわ)さんというのを聞いたおぼえはないのですが。

浜崎　山之川(やまのかわ)。「之」の付くのはありますね、かなり。

小川　そうですね、指宿の方に。

小川（秀）指宿の方に、「山之川」の姓はありますね。

平田　山之川がありますか。山川(やまがわ)はない？

小川　ないですね。

二見　谷山(たにやま)はありますよ。

平田　谷山という苗字はありますよ。だから苗字のあるのは、逆にいうと、地名としても古いわけです。鹿児島県で一番いい例は、「向嶋」という苗字はあるが「桜島」という苗字はない。だから「桜島」は新しい地名だなとすぐ判る。向嶋(むかうじま)が元々の呼び名ですから。山川(やまがわ)という苗字がなければ、山川(やまがわ)という地名は新しいということじゃないでしょうか。加治木もあるし、頴娃も指宿も郡山も苗字にありますね。ただし、鹿児島は地名は古いけれど苗字は見当たらない。大分や大阪には鹿児島さんがいますが。鹿児島姓は早い時期に移されたのでしょうね。

浜崎　小川先生。頴娃の「平丹過(ﾋﾗﾀﾝｶﾞ)」は、「丹」という字だけれども、これを「谷」に置き換えて、いわゆる谷底のあたりを言ったとする解釈は成立しませんか。

小川　谷川？「タンガ」はですね、私の考えではあれは当て字ですよ。

浜崎　「谷」の当て字じゃないだろうかと思うのですが。

小川　いや、そうじゃないと思いますよ。あれは本当のところは「丹」という字じゃなくて「旦」。日の下に一。

平田　元旦の「旦」。

小川　「旦」と「過」、過ぎるという文字。朝を「旦」という。

浜崎　はい、はい。早朝。

小川　「旦過」。これが本当の表現です。「旦過(ﾀﾝｶﾞ)」というのは何かというと、諸国を回る旅僧すなわち、坊さぁを泊める家を旦過という。昔、あっちこっちに多かったらしいのです。

浜崎　坊さんを泊める家。旦(ｱｼﾀﾊﾔｸ)、過(ｽｷﾙ)という字を書いて。これが当て字になって意味が判らなくなった。

小川　「タンガ」という地名はね、県下、あっちこっちに、あることはありますよ。

浜崎　ほほう。

小川　それが本当らしいですな。

平田　それは面白い。

小川　北九州の小倉に、旦過橋(ﾀﾝｶﾞﾊｼ)というのがあるんですね。

浜崎　ほほう、その旦を書いて。これはいいことを聞きました。

小川　坊さんがですね、夜おそく来て、朝早く過ぎ去って行く。そういう意味らしいのです。

浜崎　古語辞典なんかには、出て来ますか。

小川　もちろん、出て来ます。

浜崎　えぇ。

小川　頴娃の麓、あれは江口の辺ですけどね。頴娃の方には、相当、寺が多かったと言います。

浜崎　寺のそばになりますね。

小川　旅の僧も多かったんじゃないでしょうか。

浜崎　谷の底みたいな所だから、「タン」は谷の当て字だと思ったのです。

小川　谷底じゃないのです。急な斜面ではありますが。

浜崎　上は上で、「集(ｱﾂﾏﾘ)」という地名がある所ですから。

小川　そうですね、谷ですから。「ヒラタンガ」はもともとは「ヒラ」と「タンガ」とあったものが合併して「ヒラタンガ」というようになった。ヒラは斜面を意味する地名です。「タンガ」のある所も急斜面。急斜面に家があったのですかね。

浜崎　頴娃の人も、これは誰も知らなかった。これは、いい勉強になりました。

平田　このように、しゃべっていたら情報が入りますね。

浜崎　もう一つ、一人でしゃべって大変恐縮ですけど、お礼を申しあげねばならんと思いまして。と

いうのは、私が持って来た仏像の拓本の文を、わざわざ会報に書いてくださった。その中に「頴娃郡長崎庄左箙」と書いてありましたが、その地区の古い地図が出て来ました。原口泉先生が頴娃に来て、講演をされた時に持って来られた資料の中にありました。「左箙」と仏像に書いてあった地名が原口泉先生の持って来られた地図に載っていました。与謝野晶子の歌碑の立っている瀬が「左箙瀬」。

平田　そういう「瀬」があったのですね。

浜崎　はい、そう、ちゃんと書いてありました。あの辺は現在「瀬平(セビラ)」と言いますが、左箙がその起源だった、と判りました。左箙というのは、地形からいうと非常に険しい所。矢をさす箙(エビラ)のような格好をした非常に険しい山で、それから出来た地形地名だろう、と。それが現在の「瀬平」になったんだという結論に達しました。近く、町指定文化財に指定する段取りになっております。会報に取りあげて下さった文章と原口先生の地図とが合致しましたので、間違いなかろうということです。よろしうございました。

平田　それは、どうも有難うございます。あと10分ちょっとですが、1月13日に入来に行くと本田先生と連絡をとっております。本田先生の方から、一体何名来るのか、公文を出してほしいということです。公文を出すほど人数が行くかなと、困ったなと思っているんですが。地名研究会から教育委員会に公文を出したら、いろいろ面倒をみて頂ける。今日お集まり方で、1月13日に行けるという方は挙手をお願いします。まぁ、10名ぐらいと答えておきますか。そんなに沢山行くとは考えられないので。川内の人たちは、今日は五味先生の講演会があるということで来れないとのことなんですが、13日は参加するということでした。

小川（秀）小正月になりますからね。

平田　あぁ、そうですね。

二見　入来町では、どういう所を。

平田　入来麓、清色城跡、歴史資料館それと入来院家墓地でしょうね、すぐ近くですから。足を伸ばしたら、あれは何神社というのですか。「君ヶ代」の起源・発祥地という神社。

小川　大宮神社。

平田　大宮神社ですね。それぐらいだと思いますが。2時間で回るとすれば、そんなに回れない。

二見　現地解散ということですか。

平田　そういうことです。

二見　現地集合、現地解散。

平田　10時集合にしましたから、集まる場所は清色城大手門跡の所でしょうね、城の前の広場が一番わかり易いでしょうから。

次回は3月の第一日曜日、佐野さんに「喜界島の地名」をやってもらう予定です。本当は今日がその予定でした。じゃー、今日はこれぐらいで。まだ、早いですね。そうでもない、時計は止まっているようです。これで終りにしましょう。

谷山と山川

1990. 12. 9.

I. 谷山

(1) 和名抄 ……「谿谷山」郡 多仁也末
- 谷山郷（伊勢本 谷上郷）
- 久佐郷

(2) 建久図田帳 ……「谷山」郡

(3) 三国名勝図会 ……「谿山」郡
- 伊佐知佐郷
  - 福本村（上福元・下福元・塩屋）
  - 和田村（和田・刈）
- 山田郷
  - 山田村（山田・中・五ヶ別府）
  - 宇宿村

(4) 「谷山」という地名 ―― 日本地名索引・日本歴史地名索引・分県地図

① 宮城県白石市(?)谷山　山奥
② 岐阜県揖斐郡春日村谷山　山奥
③ 兵庫県多紀郡丹南町谷山
④ 兵庫県出石郡出石町谷山
⑤ 徳島県那賀郡上那賀郡谷山　山奥
⑥ 高知県高岡郡仁淀村谷山　山奥
⑦ 高知県安芸郡馬路村谷山　標高1109mの山
⑧ 福岡県糟谷郡古賀町谷山　谷山川の谷口部
⑨ 大分県日田郡天瀬町出口字谷山
⑩ 鹿児島県和泊町谷山　山奥？
⑪ 鹿児島県川辺郡川辺町上山田谷山
⑫ 鹿児島県鹿児島市谷山（旧谷山市）　谿谷山郡谷山郷
⑬ 鹿児島県肝属郡根占町川北谷山
⑭ 京都府京都市右京区谷山

（意味）谷のはじまる山、水源のある山

万葉集と八代集		谿(谷)	谷川	山川(山河)
万葉集	759	10		27
古今集	905	6	1	4
後撰和歌集	951	2		1
拾遺和歌集	998			7
後拾遺和歌集	1086	1		2
金葉和歌集	1125	1	4	4
詞花和歌集	1151		1	2
千載和歌集	1187	11	1	1
新古今和歌集	1205	3	3	4

II. 山川

(1) 山川（やまかわ）の初見

1. 文暦2年（1235）8月28日の関東下知状に、揖宿郡地頭島津忠綱（忠久二男）の梶取として、同郡山河住人宇綾三郎延元男がいたとある。（旧記雑録 前編一 389）
2. 「山本氏日記」弘治元年（1555）5月24日の条に「山川へ蒲生之者、唐船乗候て、十人乗候を打つめ候よし、便僧以頴娃殿被申上候」とある。

(2) 三国名勝図会 ―― 揖宿郡山川郷・山川湊
- 山川郷
  - 揖宿郡福元村（山川村）
  - 〃 成川村
  - 頴娃郡大山村 ―― 正保4年（1647）合併
  - 〃 岡児ヶ水村 ―― 慶安3年（1650）合併

(3) 「やまかわ」―― 山の中の川、山中を流れる川、山から流れ落ちる川。
「やまかわ」―― 山と川、山と川。

(4) 山川（やまかわ）の地名例

① 茨城県結城郡八千代町下山川
② 富山県高岡市山川
③ 京都市下京区山川町
④ 福岡県久留米市山川町
⑤ 福岡県山門郡山川町
⑥ 鳥取県東伯郡赤碕町山川
⑦ 山口県厚狭郡山陽町山川
⑧ 長崎県諫早市山川町

(5) 山川（やまがわ）の地名例

① 栃木県足利市山川町
② 埼玉県大里郡岡部町山河（やまが）
③ 千葉県香取郡小見川町山川
④ 石川県金沢市山川（やまご）
⑤ 高知県香美郡香我美町山川
⑥ 長崎県南高来郡有家町山川
⑦ 熊本県天草郡有明町山川
⑧ 鹿児島県指宿郡山川町
⑨ 沖縄県伊江村山川

Ⅲ. 小字一覧に見える谷山と山川

(1) 谷山

1. 谷山尻 ------ 川辺町上山田
   谷山下，谷山迫尻，谷山平
2. 谷ヶ山 ------ 根占町川北
3. 谷山迫（タニヤマサコ） ------ 市来町川上
4. 谷山田 ------ 指宿市東方
   下谷山田塩入，谷山田塩入東，谷山田尻

(2) 山川

1. 山川 ------ 樋脇町市比野
2. 山川 ------ 宮之城町舟木
3. 山川 ------ 末吉町岩崎
   山川ノ下
4. 山川谷 ------ 末吉町深川
   下山川谷
5. 山川迫 ------ 末吉町深川
6. 山河 ------ 鹿児島市下福元
   山河平
7. 山川 ------ 鹿屋市大姶良町
8. 山川 ------ 吉松町般若寺
9. 山川（ヤマゴ） ------ 川内市芋之浦
10. 山ノ川 ------ 指宿市東方

入 来 町 巡 検

鹿児島地名研究会・入来町郷土史研究会

Ⅰ．日時　平成３年１月１３日（日）

場所　入来町歴史資料館・入来町麓・清色城跡・入来院家墓地・大宮神社

（参加者）　青柳俊二・大田照夫・斧淵慶喜・上田　丙・郡山政雄・木場武則・重永尚志・田口三雄・辻原貴志・中村明蔵・肥後芳尚・肱岡修一郎・平田信芳・船迫孝二・本田親虎・本田碩孝右田幸雄・宮原景彦・山口　望・山口静也・吉岡輝猛・吉川法水・その他若干名。

Ⅱ．事前説明（於入来町郷土資料館）

平田　本田先生に、入来で史跡見学会をしたいとお願いしましたところ、入来町郷土史研究会と合同研究会にして欲しいということで、こういう運びとなりました。実際に見て回るのが勉強ですので今日は本田先生にすべてをお任せしたいと思います。５～６年前『歴史と旅』という雑誌に、鹿児島の地名と苗字を書けと云われて、入来の紹介を兼ねて書いたことがあります。それが再度掲載されるということで、近くまた出て来ます。読み返してみましたが、訂正をするところは一ヶ所でよいようです。どういうところかと言うと、「去年、博多の浜で入来の人々が元寇で戦死した先祖の七百年祭をやった。七百年祭を子孫がやれるのは、日本全国を見ても、入来だけだろう」というところの「去年」を「数年前」に直すだけで、あとはそのまま使える文章でした。もう一度、入来の紹介をすることになりますので、ご承知ください。本日は、入来の方々にお世話になります。

本田　皆さん、今日は。入来町郷土史研究会の会長をつとめております本田でございます。平田先生には以前から麓の国道問題で大変お世話になっております。鹿児島の方から熊本の方へ行く国道 328 号線の拡幅の話が起こりましたのが、昭和50年なんです。その道路を町から真っ直ぐにする関係で元の御仮屋の下の広場を道路にするという。そうすると大体一直線になるわけです。交通上は便利になりますけれども、そんなことをしてもらったら、昔の史跡は、ちんぐゃらっなる。とんでもない。とくに入来は、ご存知の通り、入来文書があり、土地の様子・概観・景観などを残して置かなければならないと云われる所ですので、そういうことをしてもらいたくないと、史跡保存運動を起こしました。初めのうちはなかなか抵抗が強うございまして、なんのかんのと云われました。その時、平田先生は新聞に何回も、何十回と言いたいほど、史跡は守らなければならないということを強く訴えて下さいました。今朝の新聞にもまた平田先生の鉄道問題に対するお考えが載っておりますが、ほんとうに警鐘を鳴らし続けて下さる先生で、私どもはどれだけ助かったか知れないと思います。お蔭様で入来の史跡は昔通りに守る、拡げないということが、はっきり入来町の方針として決まりまして、このような資料館も作りましたし、それから、むしろ昔の様子に復元しようというふうになって来ました。大変ありがたいことだと思っております。本日は遠い所からわざわざ大勢お出で頂きまして、一緒に勉強してくださるということは本当に有難うございます。ここで時間をとるのもなんですから、一言ご挨拶申しあげます。それでは、入来の教育長さんにご挨拶を頂きたいと思います。

車田教育長　お早ございます。本日は入来で地名研究会ということで、よろこんでおります。私ども

行政の者としましても、こういう機会を活用させて頂き、さらに文化財行政を進めていかなければならないと考えております。入来の文化財は全国的にも誇れるものを持っております。私自身まだ日が浅くて充分勉強もしておりませえんけれども、県の行政担当者の方々のいろいろなご指導を受けながらやって行きたいと考えております。県・町合わせて二十余りの指定をしておりますが、充分な整備まで、未だ至っていない実状でございます。今日は担当の職員も入れておりますので、今後の文化財保護等についてのいろいろな御示唆・御指導を頂けたらと思います。そのような意味で、本日はどうかよろしくお願い申しあげます。

本田　次はこのプリントについて、ちょっと説明いたします。地図の方をご覧ください。苗字を書いてありますが、これは幕末から明治の初めの配置地図で、この△印のある所は、その後、他の人が入っている所です。下の方に注意書きがありますが、この印は室老家、家老を勤める家です。藩政時代の入来は私領地でしたので、郷三役と申しました。他所では郷年寄、これは後では「曖」と呼ばれます。それから組頭、この字（与頭）も書きます。それに横目。薩摩は百十三の外城があったとよく云われておりますが、一般の外城では郷三役と言っておったのです。年寄・曖と一般に言っておった。ところが加治木とか重富とか入来などの私領地においては、曖と言っておりません。全部、役人と言っております。与頭と横目は同じなんですけれども、名前は。その役人になる者の家が家老家の家であって、これは家柄が決まっておったわけです。これにはそれを書いてあります。長男の家は資格がありますが、二男・三男は出来ないわけです。どんなに二男・三男が優秀であっても、実際上の役、いわゆる年寄にはなれない、というような習慣だったようです。家老家の家柄を見ますと、全部、入来院家に近い親戚の家柄なんです。入来院家の血筋とそう関係のない家柄もいくつか混じっております。今の役場の所が種田家のあった所です。それから松井家、田中家。田中氏はもと本田ですが。それから福崎家、市来家。松井、福崎、市来、山口、それだけですか。まぁ、そういう家柄が家老家です。どんな家かと言いますと、種田氏は入来院家の祖先の渋谷氏が、第一代の人が、入来に来た時からの一番古い家老家で、これは特別です。人吉の相良家の分家なんです。松井氏とか福崎・田中・本田ですが、もともとは島津さんの家来であったのが、島津家から入来院家に養子に来られますので、その時付いて来たお付き家老ですね。お付き家老の人々が明治維新まで家老をやっておりました。市来氏はもっと古くて、戦国時代に、市来を島津さんが滅ぼした時に、市来氏が入来に亡命して来て麓に住まっておった。そういう名家だから、家老の家柄のように優遇されたわけです。

この地図は私が十数年前に書いたものですから、城山が全部は出ておりませんが、城山の一部分の所に求聞持城（ぐもんじょう）というのが出ております。求聞持城というのは、すぐそこです。城山のうちで、一番高い所です。求聞持というのは、お経の名前、虚空蔵求聞持法というお経の名前。虚空蔵求聞持法というお経を知らなければ、何故付いたか判りませんが。入来で一番大事なことは、虚空蔵求聞持山の頂上から日の出を見ますと、冬至の太陽の出る山、立春の太陽の出る山、春分の太陽の出る山、立夏の太陽の出る山、それから夏至の太陽の出る山とあるわけですね。どこを見ても必ず、何かの神を祀る施設があるということです。そして、神社は皆、ここを中心にして、こっちの方にも、反対の方にも、並んでおるんです。冬至の神社の如きは、蒲生の先の吉田の山神からです。吉田に山神という地名があります。山神を祀ってある。この山神から、延々二十四～五キロ、川内川まで一直線に神社が並んでいる

のです。びっくりするほど。ドット＝マップを作ってみましたら、面白い形が出来ました。そのことを昭和53年でしたか、正月の民俗学会の時に発表しました。新聞社の人がこれは面白いからと言って、入来の初祭りを南日本新聞に載せてくれました。

川内の可愛山ですね、八幡様。八幡様を中心にした神社配置と、国分地方の高屋山陵を中心とした神社配置がそっくり同じなんです。日の出の方向に一致します。奈良も畝傍山を中心にして、夏至・冬至の初日の線で、ハンコを押したように、設計者が同じ人であったように、同じ形式の神社が並んでおります。お寺も並んでおります。奈良の５万分１図を買ってみましたところ、畝傍山を中心にして南北に何十キロも、いくつも神社とお寺が並んでいる。びっくりするほどです。これは少なくとも奈良時代以前だと思うのです。私はそれまでは、神社というものは部落・部落の、村々の人々が話しあって此処に建てようじゃないかと言って建てたんだと思っていました。これを見てから考えが変りました。そんなのじゃない、と。ちゃーんと、その地域の大将が居って、お前の所の神社は此処に建てろと云わなければ、こんなふうに並ぶはずはないのです。飛鳥でもそうですから、これは日本全国そうなっているのだろうと思います。それで、鹿児島県内の先生方にも頼んでいるんですけれども、あなたの所もそうなっているんだから調べて下さいと言いましたが、「なっちょっさみやんせ」と言ったのは、伊集院の有馬先生だけです。「本田さん、おはんの言やっごっじゃった。伊集院もそうなっちょった」と。伊集院もそうなっている、私の言うようにですね。

これは昔の人が暦を作ったしるしだと思います。暦がなければ、農業は出来ませんので。このことによって、暦のない頃から入来も川内も国分の方でも野蛮だったと考える時代の人々が野蛮じゃなかったと思うのです。ちゃーんと１年は365 日と¼という

ことを知っておっただろうと思うのです。知らなければ暦は出来ませんし、農業も出来ません。我々が考えた以上に、そういうことをする役人がおって、いろいろ調べて、あそこから太陽が出たから、今、種子を播けとか、あそこの山から太陽が出たから、今度は苗作りをせよとか、そういうことの資料作りをした証拠だと思うのですよ。県内には、そういうものが沢山残されているわけですから、それを調べなければいけないと思います。

入来に小学校が私と一緒ですが、藤井重寿という方がいます。古代の歴史を調べることに関しては、藤井さんは県内でもトップ＝クラスの研究者だと思うのですが、この藤井さんが発見されたものがあります。それは『千台』に載っておりましたが、あの八重山(ハエヤマ)ですね。これは「ハエヤマ」と読むのです。「ヤエヤマ」じゃないのです。「ハエ」というのは、九州ではあちこちにあります。戦後、間違えて「ヤエ」というようになりました。この八重山の所に、祀りの中心がある、と。八重山の向うは郡山。そこから見ると、霧島・高千穂。それから西を見ると、八重山です。可愛山・可愛山陵は 120度の方向にある。ということは、昔の人が日の出を観測した所で、霧島からここが 120度あるということは、ここが30度あるということですから、ここから見ると、夏至の太陽はここから出るということなんですね。その夏至の太陽は八幡山に沈むということです。そっちが30度です。そういうのを発見されました。すばらしい功績だと思うのです。

それで、虚空蔵求聞持法とは、奈良時代に天然痘が流行して大臣たちが十一人でしたか死にましたので、とんでもない悪い病気だ、何とか祈らねばと言うことで、虚空蔵様を祀って求聞持法のお経を唱えよと、お触れが出たそうです。何か天災地変が起こりますと、これをやったわけです。いつもやるもんですから、地名になってしまったのですね。川内は

どこだったかというと、川内市体育館がある所、住連木之丘(ｼﾒﾉｯｶｵｶ) という丘です。この住連木之丘という丘がまた、八幡様から見ると、太陽の登る線上にあたる。この山を虚空蔵山(ｺｸｯﾔﾏ)ともいう。国分にも虚空蔵山があります。そして、明治の初めまでは、非常に大きな千年を越す大木があったと言いますから、ちょうど入来と同じです。入来の場合少なくとも千五・六百年以上の大きな木が、ほんのこの前まですぐそこに立っておったわけです。惜しいことをしましたが、昭和11年に伐りました。木の値段が今の金額で五千万円。もっともっと使いでがあったかも知れません、今の五千万円よりは。そんな大木でございました。そういうところに調べが一致しているということです。だから、中世に領主が武威を張ったように、古代においてもここを治める大将がおったんだと言って間違いないんじゃないか、というようなことを考えます。これをしゃべり出すと、２時間ぐらいはしゃべってしましますのでこの辺でとめます。

平田　もう、30分になりました。今、配られたプリントで、この場で質問したいという方は出して頂けませんか。一つ、よろしいですか。11．山之川(ﾔﾏﾝｺ)とありますが、山の上に何か水の出る所でもあるのでしょうか。この「ヤマンコ」はどこの？

本田　「ヤマンコ」の研究では、ご存知の小川先生ですね。小川先生の説があります。私も小川先生から教えられました。鹿児島県には「ヤマンコ」というのは沢山あるわけですね。宮之城の辺やら指宿もだったかな。

平田　山川もです。

本田　屋久島にもあるし。それで、この地図で言いますと、一番右の方の真ん中に山之河(ﾔﾏﾝｺｶﾜ)とございますですね。小さな谷川でして、東の方の山を見ますと、山が並んでいて、一番高い山が愛宕山なんですが、そこにのっとるのが山王岳ですね。その次が白鳥山。この山王岳から、夏至の太陽が出るのです。山之河川は入来川に入るわけですが、出る所が暖かい水ですから、山水が。オヤシツケバと言っていました。

平田　山之河は、オヤシツケバになるのですか。

本田　お正月前に、大豆をカマゲの中に入れて、此処に漬ける。地名としては、明治の初めの役場のお役人は、オヤシツケバという所に仕方なしに「大豆漬」と付けた。小川先生のご研究で、私も初めて知ったわけです。これは地名研究会のお蔭と喜んでおります。入来麓の山之河(ﾔﾏﾝｺ)は、山之河というのは此の川なんですけれども。ここが子供の水泳場なんですよ。もう今はほとんど浴びいませんけれども、水泳場の所を山之河というのです。しかも、こっち側の道路を山之河馬場という。暖かい水の出る所が、山之河。

吉川　さっき、聞きましたけど、市来さんという所のことですが。

本田　市来さん？

吉川　昔、御典医をしておられたという話を聞いたのですが。

本田　何ですか？

吉川　御典医、お医者さん。

本田　明治の？

吉川　市来さんは御典医だったかということ。いつ頃か知りませんけどね。

本田　明治の？藩政時代の話ですか？

吉川　何か、御典医だったと聞いたんですけど。

本田　島津斉彬公が鹿児島に藩主としてお出でになってから、薩摩の衆は大世間(ｳﾋﾟｹﾝ)を知らんからいかん、と。どんどん藩外に出て勉強をしろとおっしゃったんですね。殿様の言うことですから。入来では、その選に入ったのが私の祖父と市来さんでした。二人とも医者です。私の祖父は大阪に行って勉強をしました。市来さんは鹿児島で勉強した。

吉川　市来さんは、どこだろうかと思って。

平田　あぁ、地図の上で。

吉川　何軒もあるもんだから。

本田　その真ん中に、市来氏と、○印があるでしょう。十文字馬場のところ。

吉川　あぁ、そこですか。

本田　そこだったのです。今はこっちの方に。今の市来さんは、勝田の所。山王馬場（上之馬場）の真ん中の所に△印、勝田・勝田・中島・川崎とあるでしょう。真ん中のところ、役場の前。明治の初めの頃は、そっちの方でした。

平田　本田先生、どうも有難うございました。あとは現場に行って。

Ⅲ．現地巡検

山之河川（やまんこがわ）

本田　あそこの川が山之河川です。あの山王岳を北枕にして寝ている人物だと考えて見て下さい。乳のところが一番高い所です。脚がずーっと行って。これは横脇の方から見ると、もっと奇麗です。ちょうど仏様が寝ていらっしゃるように見えます。足がとどいた所に長い山が見えますね。あれが烏山。春分の朝日が烏山の右の角から出るのです。ですから私はびっくりしました。なるほど、烏だ、と。その烏は太陽であるはずです。大きな巨人が天磐船に乗っておりまして、磐船の神様が烏なんです。福岡の珍塚古墳の壁画に描かれている船のへさきに烏がのっておりますが、同じ考え方だということが判りました。

御仮屋馬場（おかいやばば）

本田　此処の馬場が、御仮屋馬場です。上が仮屋だったもんですから。ここを道路にすると言ったので、かちんと来たわけです。こんな所を道路にされたら小学校の人たちには役に立たなくなりますから、危くて。今はもう守るということになりまして、本当に良うございました。どうします。上まで登りますか。

平田　折角ですから、ちょっとあがって、大手門跡から見おろしてもいいのじゃないですか。

本田　見おろしますか。じゃー、あがって下さい。あれが山王岳です。2750m.ずつ、びしゃっ、びしゃっと区切って、川内川の向うまで神社が一直線に並んでいます。鳥越の神社、副田の大将軍、そして山王岳というふうにつなぐと、一直線になる。烏山の角から春分の太陽が出たということは、意味がある。もう、びっくりしました。

郡山　横尾岳というのは、その一部分をいうと、私は聞きましたが。

本田　横尾というのは、長いあれをいう。八重山という時は、もっと広いわけ。一番高い所は横尾。横になっていますからね。

五輪塔

本田　五輪塔で大事なのは、ここにあるのです。相輪が九つあります。大体、九輪あるのは南北朝以前と云われます。室町になりますと、これは略されて半分ぐらいになります。戦国はこんなもので三つか四つです。だからこの上の相輪だけは古く、下にもっと立派なのがあったはずです。相良家と入来院家は非常に仲がようございました。島津に対抗する上から、まぁ小さい者同士が手を握り合うわけで、その証拠だと考えられます。亡くなった黒田、えー黒田なんちう人じゃったけなー。

船迫　黒田清光。

本田　あぁ、清光先生。あの黒田先生は、これは南北朝時代の相良の分家の稲留じゃんさなぁと云われましたが、それは判りませんけれども。南北朝時代は間違いないだろうと思います。

平田　入来の墓石の石材は、どこで採りますか。

本田　向うのまるい山があったですね。あの下が今でも立派ないい石材が出ますよ。

平田　何と呼びますか、入来では。なに石と言い

ますか。

吉岡　長野石でしょうね。

本田　場所が長野ですから。

平田　そうすると、ほとんどが長野石ですね。しかし、これは鹿児島の石ですよ。反田土石(タンダドイシ)

本田　ここに延命地蔵さんがあるんですが、これを作ったのはおかたさんという人、これに書いてあります。おかたさんという人は、その時の領主が入来院定勝という人で、島津継豊の四男坊。殿様の息子さん。その定勝さんの兄さんが島津久峯で、知覧の旦那さぁです。知覧の庭園を作ったのは、久峯だと云われます。その弟の定勝が入来に来て、俳諧を薦めました。入来院では非常に盛んになりまして、俳諧の教科書が、鹿児島県に一つしかないものが残っております。入来では文学の神として神社に祀りました。その娘さんがおかたさんなのです。伊集院の町田家にお嫁に行っておったら、旦那さんが亡くなって帰って来られた。旦那さぁの妹さん。困るんですよね、実際。どこに置きようがないからそこに家を作った。そこに家があるでしょう。この家を南屋敷と言った、南屋敷(ミナミャシッ)。今は松下さぁの家。ここに住まわしたのです。

平田　下の池は昔のままですか。

本田　はあっ？

平田　別の話ですけど、池は昔のままですか。

本田　いや、池は大正時代。

平田　大正時代？

本田　いや、あったのを修理したわけです。あいことは、小さいのがあった。

平田　わかりました。

本田　そいで、この家のうしろの上の方に、この墓があったもんですから、気色が悪かったとみえてこういうものを作って観音経を書いて入れてあるんです。もう取りました、穴があいておりまして。明治維新の頃捨てちゃいましたので、三十いくつしか残っておりません。これを拝みますと、長生きすると、私はもう何十遍拝んだか知れません。

平田　先程、私が聞いたのは、この石は鹿児島の反田土石なんですよ。鹿児島で採った石です。それから、ここらあたりは加治木の桃木野石ですね。ほとんどは地元の石だろうと思ってお尋ねしたわけです。それで、長野石ということが判りました。しかし、主なものは鹿児島から石を持って来ているようですね。

三歳淵（さんぜぶち）

本田　地図で地名を見てください。えーと何番？あー、10番、三歳淵。今は「サンジャブチ」となっていますが、三歳淵。ないごて（何故）三歳淵というかというと、その千年以上の大木が、神様木だもんですから、その神様の木に三月三日の日にお参りしたんです。お参りするのが、三歳になる駒。馬は三歳が人間ならば成人ですから、入来の三月三日は馬の成人式だったのです。各村々から、村中の部落・部落からシャンシャン馬ですね、鈴懸馬に着飾らせて、鈴懸馬を引いて、ここに集まってお祭りをした。私は竜神木だと思ってるんですが、その木を拝み、そして麓の馬場を引いて回る華麗な祭行事があったのです。県下で鈴懸馬のあった所というのを小野重朗先生に聞きました。入来、溝辺、横川、菱刈、ちょうど真ん中どころにずーっと残っておったということです。菱刈の場合は有名な水神様があります。川内川沿いに。あすこのお祭りを聞きましたら、やっぱり今でも子供は乗せんが、人形は乗せるそうです。その水神様の祭りに。水神祭りがあった時に、ある馬が気狂いみたいになって飛び込んで、死んでしまった。昔は、淵が深かったとみえて。それ以来、三歳淵と名が付いた－－－－

平田　三歳駒の淵。

本田　そいで、ここに水浴びに来ますと、私の親父が言いました。三歳淵は三歳馬がけ死んだ所じゃっで気を付けんにゃいかんと、しょっちゅう言っておりました。

入来の一番新しい記録は、天保九年の日記でございます。西郷さんが生まれる一年前。私の祖父は天保九年生まれ。西郷さんよりも一つ年令が多うございます。祖父の生まれた年の日記があります。それが無くなったのは調所広郷の天保の緊縮令じゃないかと思うのです。

犬之馬場（いんのばば）

平田　この塵捨場は、何と言いますか？

本田　掃除ツボ。

平田　何ツボ？

吉岡　掃除坪。

本田　塵捨場ですよ。昔は、屋敷境の木が、防火用の木になる高い木が多かったのです。そいで葉が散るでしょう。そんとを掃除して掃きこむ所。

宮原　出水でも掃きためてごわしたが。

本田　掃きだめですよ。

宮原　はい、出水でも。

吉岡　ここで葉っぱや塵を焼ったくった。

宮原　あっちこっちに多かしたな、昔は。

平田　これは、昔の人の知恵ですね。

本田　捨てる人が多かったから「インノババ」。犬追馬場というのは県下各地にあるでしょう。ところが、藤井さんは入来はそいじゃないと云やいわけです。昔の倉院があった所だから「院之馬場」と。

平田　なるほど。

本田　それが証明さるれば、なんちはならんとごわんどんな。

平田　犬を追いかけるには狭いもんな。確かに。

入来院家・御屋敷・入来院家墓所

船迫　ここに石塔があるわけは、特別なわけは。

本田　それは、旦那さんの家だから、領主の家だから。入来院さんの家を、いわゆる御屋敷を付けて「御屋敷の衆」と云うた。鹿児島の入来屋敷は現在の県庁の所でしたから、「御屋敷(おやしっ)」と言えば黎明館の前が本当の御屋敷だったわけです。それで入来院さんの娘さんたちには、まぁ、現代は言いませんが、昔の人たちは「誰さん」とは云わない。幸(サチ)という人ですと「お幸さん」とは云わない。「お幸さぁ」という。「様（さぁ）」を云わるっとは入来院家の人ばっかい。もう、今の衆は言いませんけど。

この六地蔵なんかは、まぁ、入来院家の中では新しいものです。ぞんざいに作った墓です。これは1650～1660年の頃です。昔の寄せ墓。船瀬の延命地蔵と同じですね、地蔵さんは。排仏の時もこれだけは傷を付けていないのです。他の所は、皆、鼻をゲンノウか何かで打ちかいた無残な格好をしとりますからね。さすがに、領主の家だけは。

平田　手を付けられなかったんですね。

本田　やいきらんじゃった、と。

平田　だから、いいんですよ。

本田　そいで、残ってる。これは、島津家から入来院家に養子で入った重時の墓で、関ヶ原で戦死しました。

平田　二十八才。

本田　この十二代の墓は、市比野にあったのですけど、入来が一番強かったのはこの人の時代です。この人の妹が島津貴久の奥さんで、伊集院の妙円寺がその菩提寺。その子供が、義久・義弘・歳久ですか。これも経塚なんです。お経が入っています。一字一石、観音経を三巻とありますから、観音経は三千いくらの漢字で出来ているようですから、三巻と言えば、九千からの小石が埋けてあるということですな。掘ってみろごっあったんどんなぁ。墓であるのか、そういう石か。それから、これはお妾さん。三百年も昔は、いかに妾が多かったかが判りますな。

船迫　この家紋は何なのですか。

本田　とにかく、島津どんからの養子だらけですから。

船迫　ここに家でもあったのでしょうか。

本田　何かあったとごわすかな。

平田　あぁ、覆いがあったのですね。

船迫　上にですね。向うにもあっど、同じようなとが。

本田　これは殿様の娘さん。この人は旦那さんが早く死んで、入来の尼将軍みたいな力を持っておった方です。

平田　尼将軍ね。

本田　入来温泉を開業したり、非常にいいことをしてくれた。

船迫　これだけあれば、墓の管理が大変だな。

秋葉神社

本田　この上の方に「アッカさぁ」があった。秋葉神社。入来文書に名が出るのは、大体、元寇の後です、多分。元寇の時、入来部隊は北九州で全滅しましたので、その後勧請したのじゃないかと思うのです。伝説としましては、入来の最高家老の種田氏が向うに行って祀り申しあげたというふうに伝えております。

大宮神社

本田　入来で一番大きな惣社が大宮神社でした。ここで奉納される神楽の舞が、この中に書いてあるように「君が代」です。昔から歌われておりますが神舞の文句を書いたものは、1801年か1802年。文政の前は何ですか。

平田　文化・文政の以前？

本田　文政の前は何ですか？

木場　寛政？

本田　寛政の後、年表を見れば判ったんどん（享和です）。その頃写したのを持っておるのですが、神社のお祭りの時に歌う和歌があるのです。元旦には何、春は何、夏は何、と。その記録の古いのが、文禄元年です、豊臣秀吉の頃。だから、その頃からずーっと、あるんじゃないか、と。

笛の曲の古いのが、鎌倉時代の寺尾家文書にあります。南北朝時代の前後、いや、鎌倉時代だ。鎌倉時代の笛の曲が残っていますから。その曲は今でも吹くのです。黄鐘調（おうしきちょう）ですが、普通の西洋音楽で言えば、短音階の曲です。

明治13年に歌われた「君が代」は、どこの「君が代」が基本だったかということは、今までは大山元帥がまだ大佐の頃、薩摩琵琶の中に「君が代」とあるから、それがいいとおっしゃったのでそれを使ったというのが通説だったようですけれども、昭和10年頃からどうもおかしいという人が出て来て、大山元帥の頃の薩摩琵琶には「君が代」という言葉はなかった、あれを付けたのは大正時代だということが判って来ました。それ以前に「君が代は」と当り前に歌っていたのはどこか、となった。それは入来の神舞だということで、入来の神舞がそのもとになったんだということです。今の県庁の所が入来屋敷だったわけですから、大山元帥などは知っていたはずだというようなことをいう学者が出て、入来がそのもとじゃないか、と。そんなら、いっぺこっぺ吹聴しよう、発祥地だ、と。

平田　言うた方が勝ちじゃということで（笑い）

本田　名乗りを先にあげた（笑い）。じゃなかち誰じゃい言わならんじゃないかい、と。それから、四百年前の他の歌の記録が残っており、今も祭の時に歌うのです。そうすると「君が代」も昔からあったはずだ。何度も何度も写して祭の歌を継いで行くわけです。六百年前の笛の曲が今も吹かれるのですから「君が代」も昔からあったということになる。

平田　ここの神舞は、いつするのですか、秋？

本田　大宮祭りは九月九日。いわゆる、おくんちですよね。その日を、お日待ちと言った。一晩かかりますから、八日の晩から始めて夜が明けるから。

入来麓の地名　1991.1.13　本田親虎

1. 清色城（キヨシキ）（入来城．城山）

イ．本丸　ロ．中之丸　ハ．西之城（ニシノジョウ）　ニ．松尾城

ホ．求聞持城（グモンジ）（虚空蔵山（コクンゾヤマ））　ヘ．物見之段（モノミノダン）（鐘撞堂段（カネツッドンダン））

ト．瀬戸之口（セトンクチ）　チ．砂走（スナバシイ）　リ．後之迫（ウシトンサコ）

2. 仮屋（カイヤ）（お仮屋）　3. 仮屋馬場（カイヤンババ）　4. 下門口（ゲモンクッ）

5. 仮屋下（カイヤシタ）（平田地頭館跡）　6. 作り道（ツクイミチ）　7. 南屋敷（ミナンヤシキ）

8. 船瀬（フナゼ）　9. 船瀬馬場（フナゼンババ）　10. 三蔵渕（サンゼブチ）（サンジャブチ）

11. 山之川（ヤマンコ）　12. 山之川馬場（ヤマンコンババ）　13. 上之馬場（カンノババ）

14. 新馬場（シンババ）　15. 十文字馬場（ジモシババ）　16. 犬之馬場（インノババ）

17. 中之馬場（ナカンババ）　18. 市来殿下（イチッドンノシタ）　19. 岡元殿下（オカモトドンノシタ）

20. 夜越場（ヨゴシバ）　21. 竹之渕（タケンフチ）　22. 尾迫（オサコ）

23. 尾迫馬場（オサコンババ）　24. 延命院（エンメン）　25. 竪馬場（タッババ）

26. 窪園（クボジン）　27. 峠（トゲ）（東郷家）　28. 古春（コシュン）

29. 赤城之前（アカギ）　30. 庵之坂（アンノサカ）　31. 町野（マチノ）

32. 小園（コゾン）　33. 寿昌寺（ジュショシ）　34. 寺之前（テランマエ）

35. お石塔（オセット）　36. 向山（ムカンヤマ）　37. 蓮昌寺（デンショシ）

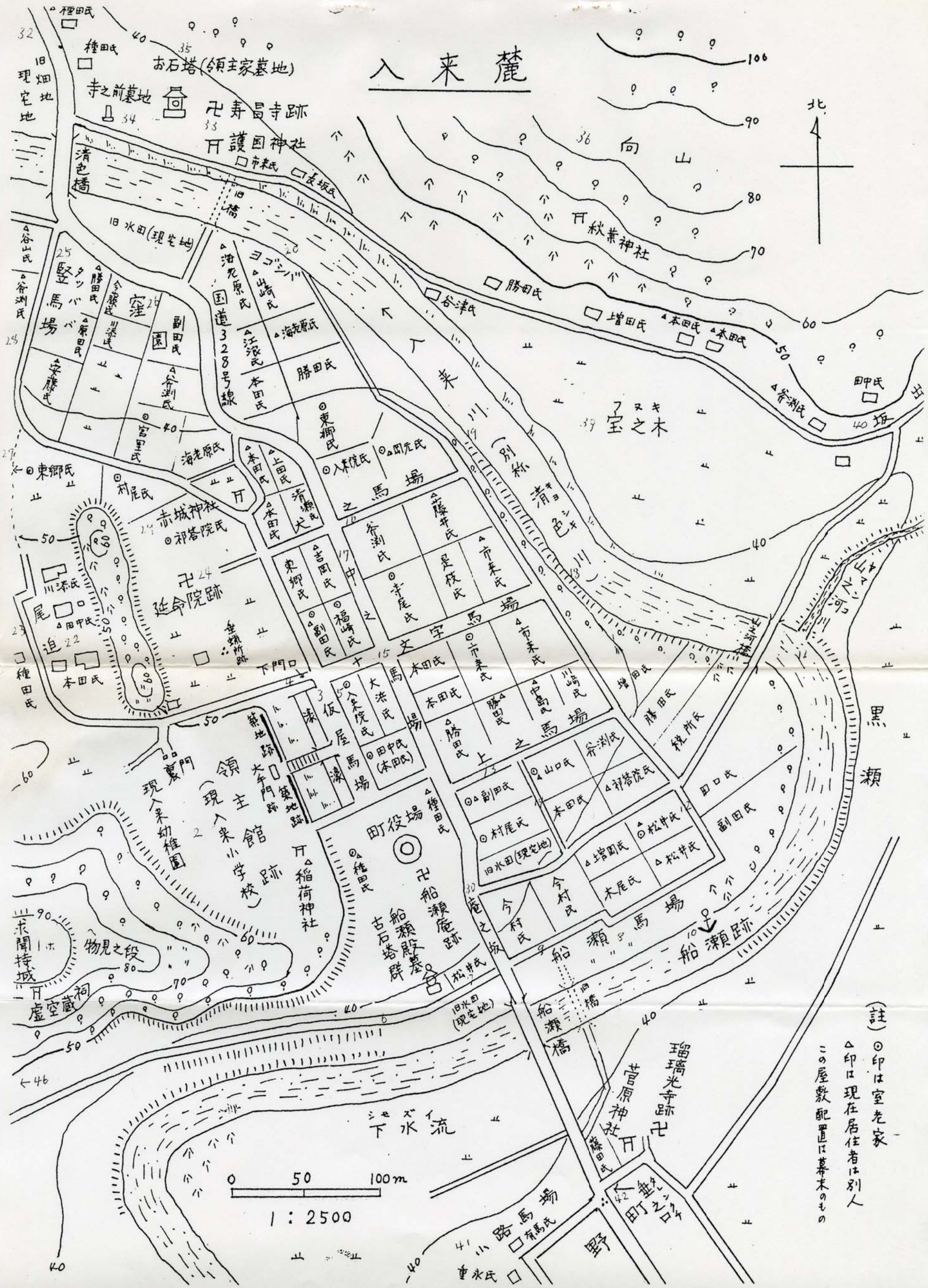
38. 小田之平（コダンヒラ）　39. 宝之木（フヌキ）　40. 坂出（サケデ）

41. 小路（シェッ）　42. 垂之口（タレンクチ）　43. 昌了寺（ショロシ）

44. 上水流（カンズイ）　45. 下水流（シモズイ）　46. 虚空蔵（コクンゾ）

47. 久木宇都（クッノト）　48. 国心院（コシニン）　49. 古市（フリッ）

入来麓



（註）⊙印は室老家
△印は現在居住者は別人
この屋敷配置は幕末のもの

地名研究会報

第３２号
平成３年９月８日
鹿児島地名研究会

Ⅰ．第３２回例会　　平成３年３月３日（日）　　於教職員互助組合会館和室

（出会者）　大田照夫・小川亥三郎・小川秀直・納　栄蔵・桐野利彦・小園公雄・佐野武則
中西僚太郎・浜崎盛雄・平田信芳・松田　誠・松浪由安・村上良典（計１３名）

Ⅱ．慶藩名勝考読会　　P.107 ～ P.111

（問題となった地名および事項）　路作・神社（明神・権現・祠）・建部神社・東京・霧島の自生稲

路作（みちつくり）

浜崎　108 ページの上段、うしろから７行目、霧島のところに「路作」とありますが、これは道のことですか？

平田　それでよろしいと思いますが。

浜崎　実はこれについてですが、頴娃町の郷土史を編纂する時に話題になったことがあります。新田文書の中に、放生会をやるための割り当てがあって頴娃院の人たちはこれこれのものを作れというのがあるのです。その中に「道二段」というのがある・相撲二人とかですね。「段」というのは字引を引いてみると、昔の距離を表わす単位で、１段は６間。近頃はカッコして約１２ｍ．面積の単位とすると、１段は、なんぼですかね。

平田　三百六十歩。

浜崎　それから反物の場合は鯨尺で二丈一反云々と書いてあります。それで、この道二段とか三段というのは、距離なのか、面積なのか。道路を面積で割り当てたものなのか。

平田　距離ですよ。

浜崎　距離で割り当てたものか、それが問題になっておるんですが。字引を引くと、昔の距離の単位というのが一番先に出て来ます。

平田　それでいいんじゃないですか。

浜崎　そうすると、頴娃ののはちょっと違うことになる。私の担当じゃなかったのですが、いろいろ問題にした結果、面積のこととして正誤表を作っているのですが。

平田　面積の単位、長さの単位など、いろいろに使いますよ。

浜崎　何段何歩をお前のところは受け持てと、今の感覚からすればおかしいような気がするんですが

平田　それは日本史の人が詳しいのでしょうが、元寇の時、石垣を村ごとに負担させて、面積に応じて何間何尺作れと云っていますからね。

浜崎　その時に、「間」で？

平田　いや、一町が一尺、一段が一寸という割合です。お前のところは、これだけの面積があるからこれこれの長さを負担せよということを云ってますからね。面積と長さというのは比例していたのじゃないですか。何段の田畑所有者は、どれだけの負担をするという－－－－

浜崎　とに角、祭りの場所を作るのに、道をどれだけ作れ、と云ったのじゃないかと思うのですが。道路は、まぁ、幅があるから面積にはなることはなるでしょうな。

平田　いや、長さ・距離でも示されるんじゃないですか。

浜崎　昔の距離をいう、一段は六間というのを

採るべきではないかと思うのですけれども。

平田　それでよろしいのではないですか。

浜崎　異論は出なかったのですが、そちらの方に賛成してくださいますか。

平田　辞書に書いてあるのでしょう。

浜崎　書いてはありますけど。

平田　その通りでいいのじゃないですか。

浜崎　面積も、もちろん書いてあるわけですけれども。はい、どうも。

平田　例えば、あれがありますよ。一歩二歩の歩ですね。歩(ブ)と読んだ場合には面積、歩(ホ)と読んだ場合には長さですか。

浜崎　あぁ、距離ですね。

平田　だから、昔の人はちゃーんと心得ていたんでしょう。

吉川　それは、あれじゃないのですか。田圃の呼び名で一升蒔とか二升蒔というて広さに対してこれだけ蒔きなさいという、大体のきまり、きまりというよりは基本的なものがあっでしょう。それと同じような解釈じゃないのですか。

浜崎　頴娃院に、「院」という表現が出て来るのです。頴娃院に課したのが、道路がいくら、相撲取を二人、それから「埒」というのが出て来ます。土手という意味のようですが、それが何丈という形で出て来る。二段なら二段で済めばよいけど、三丈という単位も出て来る。ここは二段何畝かなぁという気がしないでもない。

平田　前回も問題になりましたが、そういう度量衡のよび名というのは難しいですね。地域によってものさしが違いますから。

浜崎　時代によっても違いますね。

神社と明神

浜崎　これも教えてくださいませんか。今日は神社がたくさん出て来ますが、神社・明神・権現それから祠。最上大権現、高千穂神社という、ね。

平田　うーん。一つ一つは。どなたか、はっきり分けて答えられますか。私なんかは歴史辞典をみてあぁそうかと理解するだけですが。

浜崎　辞典を引くと、権現というのは仏が神の姿になって現われたもの。結局は本地垂迹説から来ている。

平田　神仏混交でしょう。

浜崎　明神が仏の方から見た神のよび名だと云ったようなのが書いてあるのですが。そうすると、神社というのはだいぶ後世なってから出来た名前じゃないか。普通はみな、明神とか権現とかいう。時代の古いのはそんなふうになっているようです。例えば、元禄の頃の郷改帳などは、ほとんど明神となっている。大明神があったり、大権現があったりするわけで、神社というのが出て来ないのです。麑藩名勝考には相当数の神社が出ているのですが、昔からあったのでしょうな。

平田　延喜式の神名は、ほとんど全部、神社・社ですよ。

浜崎　現在のいわゆる神社は、みな、神社。稲荷大明神などというのは、残っているかも知れませんね。本地垂迹の考え方から、こういう名前が出て来たというのをそのまま信じていいものかどうか。

平田　それでいいのじゃないですか。

浜崎　そうすると、同じ時代の神様で、神社で通して来ているものと、権現で通して来ているものは何か？

平田　権現とか明神というのは仏教関係の影響の強い場所でそういう呼び方をするわけでしょう。本来はみな神社であったはずですよね。だから――

建部神社（たけべじんしゃ：武大明神）

吉川　うちの近所に、こういうのがあります。武の、西駅裏の建部神社ですね。私なんかは「デイメさぁ」と、云っています。

平田　武大明神。

吉川　祭神は武大明神なのです。しかし神社の名前は建部神社とついとるんです。土地の人は、新しい人は別ですが、昔から居った人はですね、あすこを「デメさぁ」と云うんです。「デメ神社」とか。これは今おっしゃる大明神ですか、その神様そのものをばそのまま云うて、神社というのは別にまた正式な名前で呼ぶ。普通、われわれがいう場合には「デメさぁ」という。そういうふうに分けたのじゃないですかね。もともとは一緒だった。神社も大明神も。

小川　江戸時代までは大明神と云うておったのを明治になったら神社に直したのです。

吉川　建部神社というのは、もともとは根占町にあったんだそうですね。これを高麗町にもって来て高麗町からさらに現在の西駅の裏の所に。根占に行けば、建部神社も、建部という集落もあります。

平田　ほう。

小川　武岡は建部神社の「タケ」を採ったという説があるのですよ。

吉川　えー、それもあります。「タテベ」というよみ方と「タケベ」という両方ありますね。

小川　「タケベ」が本当でしょう。

吉川　どっちが正しいかなと思ってるんですけど

小川　根占から来たという、それは。武岡の名前をちょっと確認しなければいけませんね。

吉川　根占の場合は建部（タケベ）という集落があります。それから、さっき云ったように「デメさぁ」と云います。

小川　江戸時代は、大概ですね、大明神と云うておった。例えば、指宿の方に豊玉姫神社というのがありますが、江戸時代は大明神、中宮大明神と云うておった。明治になってから豊玉姫神社になった。大明神じゃ具合が悪いというわけですね。仏教臭いというわけで、そうなったんですよ。しかし今でも「デメジン」というのですよ。その前にですね、湧き水があるんです。「デメジンノカワ」という。今でも云うておる。大明神という名前は大概古いようですね。神社というのもあったでしょうけどね。

浜崎　開聞神社が三代実録に出て来るのは、大体西暦 880年ぐらいです。頴娃郡開聞明神と書いてある。それが「頴娃」という表現の初見だという。

平田　三代実録にですか。

浜崎　はい、開聞明神という名前で出て来る。

小川　明神というのはですね、「明」を書いてありますけど、本当は「名神」が古いらしい。

浜崎　「名」を書いたのもありますけど。

小川　あれが本当らしい。「名神・大社」という意味らしい。

平田　古くは神社と云っていたものを、仏教が盛んになってからそれと結びついて仏教的な呼び名が流行した。明治になって神社が強くなった。地名としては、仏教の影響が強かった頃が庶民の間に語り継がれているとみていいんじゃないですか。他にありませんか。読みながら気付いたことを出し合いお互いに意見交換をしている間に正しい解釈が出て来るだろうと思いますから、遠慮なく意見を出してください。

馬立（またて）

平田　一番最後のところにある馬立。これは馬立の神事。馬に神が降りて来るという所で、馬が単純に停ったということじゃないと思うのです。馬立・ノボリ立・柴立・花立など、「立」地名で整理をしたらいいと思います。こういう信仰を示す地名は、既に信仰は消えてしまっても地名だけが残っている例は多い。どういう信仰形態だったのか、ほとんど判らないものが多い。それほど早く消えてしまったものが多いのでしょう。

東京（とうけい）

松田　東京の人。109 ページの下の方の真ん中ぐらいに、性空は東京の人なり、とある。

平田　現在、東京と云えば東京都。江戸が東京になったので。うーん、これはあれでしょう。昔は、奈良や京都や大阪、あの辺に都が集中してますね。大阪あたりから見れば奈良が東であり、京都から見てもね。あれは南東になるわけか。だから、東京というのは奈良のことじゃないですか。

霧島の稲

平田　109 ページの上の段の真ん中辺に、霧島の山の中に自然の稲、陸稲があるということ、霧島米ということが伝えれれているとあるのですが、霧島米というのをどなたかご存知ですか。小園さんは霧島の産だが。

小園　霧島神宮の下に川があって、秋になって来ると稲が流れて来るというのがあるんですね、云い伝えが。だから自然の稲が生えているのだろう、川縁にね。そういうことでですね、この霧島米というのは私も初めて聞きます。霧島神宮の裏にそういう川があって稲が流れて来る、と云います。昔、吉松旅館というのがあった。霧島神宮から町へ向かう坂を下ったあたりに。

平田　うん、ある、ある。

小園　あすこを上る道があるんですよ、旧道が。旧道沿いの川ですね。幅２～３メートルの川がありますけどね。その川をそういうようです。

浜崎　お祓いに使った稲かも知れんな。

小園　陸穂だから畑ですね。田圃じゃなくて。

平田　他になかったら、前半は終りましょう。

喜界島の地形と地名

佐野武則

喜界島のことをお話したいのですけれども、実はここに村上先生がおられます。喜界島の上嘉鉄のご出身ですので、何かと助けて頂けると思います。４年間喜界高校におりまして、珊瑚礁台地と喜界島の開発を見て来ました。喜界島という所は珊瑚礁から出来ていて、しかも水に乏しい所だと云えます。水と集落と耕地開発というのを少し調べてみました。地名を特別に調べたわけでもありませんのでただこういう地名があるということだけを紹介いたします。

珊瑚礁台地というのは、鹿児島県では奄美以南、要するに喜界島とか奄美本島、それから徳之島・沖永良部島・与論島、という所にあります。勿論、沖縄県以南は珊瑚礁が発達しております。日本の中で珊瑚礁が発達しているのは鹿児島県と沖縄県であるということです。珊瑚礁というのは気候が暖かくないと出来ない。珊瑚礁地形を見てびっくりしたのは、水がどこでもかしこでもないということ。また、珊瑚礁地形は全然その成立ちが違うのですがちょっと見たら本土のシラス地形と非常に共通しているのではないかということを感じました。まず、どっちも水がないこと。それと、あるきまった所から水は出て来る。広大な台地をなしている、と。珊瑚というのはあまり見たことがないかも知れませんが、珊瑚の風化したのは赤色をした土壌です。われわれはテラロッサと云うんですが。平坦なもんですから、シラス台地と同じように風の害を受け易い所だ、と。まぁ、そんなことも共通しています。

喜界島は周囲が50Km. 足らず。人口が大体１万。昔はもっと多く、１万４～５千でした。断層が非常に沢山入っています。それともう一つは、珊瑚礁が何回も隆起しまして、台地になっています。一昨年の３月、珊瑚礁段丘研究会というのが喜界島でありました。珊瑚礁の研究では非常に有名な方なんですが、米国のコーネル大学のブルーム博士という人が来ました。喜界島というのは、珊瑚礁の研究という

点でユニークな、まぁ面白い所だということです。隆起速度が世界でも大きい方で、きれいな段丘が残されている所だということです。

喜界島で一番高い所は百之台と云いまして、大体 214 ～5 メートルあるのではないかと思いますが、まぁ、ここの城山の大体２倍ぐらいだと思って頂ければいいんですが。珊瑚礁台地ですので、全体的にべた一っとした感じの地形をしております。遠くから見たら平べったい所で、山というのはない所です。それで、まぁ、水がない。それと、風が強い。それで、集落はどんな所にあるかと云いますと、資料の102 ページに書いてありますが、段丘が四段になっています。一番下の段には湧水があるし、二段目にもあるし、三段目にもあります。一番上の所は湧水がないわけで、湧水のある所に集落がある。湧水を中心にしてかたまっている。そこに大体70％と書いてありますけど、34集落のうちの大体24ばかりがそういうふうになっています。一部には全然湧水のない所も幾つかあります。私も調べてみたのですが、そこには非常に古い井戸があります。古い人に聞いてみても、もう明治の中頃にはあったし、判らんということで、おそらく江戸時代の頃じゃないかという古い井戸が一つか二つある所があります。しかし、そう云った所も海岸に行きますと湧水がありまして、それを利用できたのではないかと思います。ただ、その湧水は満潮になったら利用できないのですが、そんな所を利用しながら集落は出来たのではないか、と思っています。

要するに、四段あるうちの一番上の百之台を除いた所には集落が出来ていて、その中でも一番海岸に近い、一番低い所に大部分の集落がある。そして、下から二番目の所に集落が、全部で34のうち７つばかりあります。だから集落の大部分は一番低い所の段丘と二番目の段丘にある。二番目の段丘というのは、喜界島で一番広い湾頭原(ﾜﾝﾄｳﾊﾙ)とか荒木原(ｱﾗｷﾊﾙ) とか志戸桶(ｼﾄｵｹ)丘陵といわれる所で、非常に広い耕地になっています。

それから三つほど高い所に集落があるんですが、そこはちょうど90メートルから 100メートルぐらいの所に湧水があります。滝川(ﾀｷｶﾜ)とか城久(ｸｽｸ)とか長嶺(ﾅｶﾞﾐﾈ)とかいう集落のある所です。そういうふうに喜界島の集落は水のある所、湧水を中心とした低い所に多い。水のある所は、集落は少ないながらも高い所にもある。

それで、地学の先生方の話を聞いてみましたら、一番上は今から大体12万年前だ、ということです。隆起速度を放射性同位元素で測定すると、約12万年前で、一番広い湾頭原の辺が大体 6万年から10万年前だろう。そして、一番低い所は大体 6千年以降だということです。だから現在集落がたくさんある所は 6千年前の俗にいう縄文海進の時には海だった、と。まぁ、そういうことになると思います。

それと、もう一つは藩政時代に薩藩が砂糖キビを強制耕作させて、非常に難儀をした所だったということです。藩政の初期の頃までは、まだ溜池なんかがいっぱいありますから、水田を中心とした耕作が行われていたらしい。桐野先生が『奄美の糖業と散村』という非常に詳しい研究をされています。徳之島、奄美の本島を中心とした分析です。江戸時代の初め、砂糖キビとカラ芋が伝わって来た。砂糖キビは藩の重要な商品作物になって、藩が独占して大島に作らせた。とくに延享二年(1745)からは、年貢は黒砂糖でするようになった。これ以後は、耕作可能な所は砂糖キビを作らせた。しかも幕末になり藩の財政が逼迫すれば逼迫するほどきびしくなって、定式買入れ、それから段々、惣買入れというようなことになって行った。そうして、人々は何を食べていたかというと、カラ芋だった、と。向うでは「ハンスー」と云いますけど、あすこのハンスー、カラ芋というのはこっちと違いまして霜が降りんもんで

すから、そのまま置いておけば一年中いつでもとれる、極端に云えば。年に２回はとれた。そう云った意味では人々の主食としては非常によかった。本土でも米は全部取りあげられる。ほとんど取りあげられるもんですから、シラス台地を開拓して、そして主にカラ芋を植えて、カラ芋で人々は生き伸びて来たわけなんです。奄美の場合もそういうふうにカラ芋を栽培しとった。家に近い所、地味の良い所は砂糖キビを植えて、家から相当遠い所は、地味の悪いような所は、カラ芋を作るとか茅場になっていた。

最初行きまして、地名なんかもいろいろ聞いてみまして、随分本土と違う。いろんなのを読んでみましたら、奄美というのは、日本の古代に使われた言葉がそのまま残っている所だ、と。次は琉球の支配を受けた、と。そのために言葉や風俗や習慣が沖縄の方の影響を受けている。その後、薩藩が支配したわけで、今度はまた薩摩の影響を受けているということで、そんなことを考えてみなければ地名は理解出来ない。まぁ興味は持っているんですが、地名の読み・音韻があまり判らないもんですからよく云えませんが、非常に大島本島と似たようなものがあります。例えば上嘉鉄(カミカテツ) という所があります。村上先生の所なんですが、大島の古仁屋の近くにも嘉鉄という所があります。それから伊実久(イサネク)というのもやら、実久(サネク) というのがあったり。字は違いますが、伊砂根久(イサネク)というのが大島本島の南部の方、加計呂麻島にあるようです。それから嘉鈍(カドン) ・諸鈍(ショドン)とか屋鈍(ヤドン) 。それから赤連(アガレ) 。これは具連(グレン) でしょうか。だから大島本島あるいは沖縄との結びつき、そう云った音韻的なことやら歴史的なことやらを加味しながら考えて行かなければ判らんのじゃないか。

何かで読んだのですが、金久(カネク) というのは海岸に沿った開けた土地を云うんだそうです。金久とか前兼久ちかいう地名はたくさんあります。もう一つは、平家の落人伝説が非常に多い所です。平家森とか、平資盛・有盛・行盛の話とか、平家に関する伝説による地名も多い。それから城(グスク) なんてのが多い。これは奄美から沖縄にかけてあるのではないかと思いますが、これが何なのか。要するに、小高い所にある見張りの場所というのでしょうか。グスクというのは「城」と書きます。他の所は城という字だけでグスクと読むのですが、喜界島の場合は「城久」と二字で書いています。

あまり調べたわけでなく、紹介も不充分なんですが、今度は上嘉鉄出身の増田先生から地名を読んでもらって録音しておりますので、聞いてください。荒木の言葉、嘉鉄・小野津の言葉と、向うの人はどこの出身だと聞き分けることが出来る、よく判るのだそうです。極端に云えば、集落ごとに違うと云っていいぐらいなんです。ちょっと聞いてみて下さい。荒木から行きます。

喜界島の地名と呼称

荒木	アラチ	中里	ナートゥ
湾	ワン	赤連	アガレー
池治	イチジ	中間	ナーマ
先内	サンニェ	中熊	ナカグマ
坂嶺	サンミ	伊砂	イサグ
伊実久	イサネク	前金久	メーヌク
神宮	カミヤ	小野津	オノツ
志戸桶	シー	佐手久	サディク
塩道	シュミチ	早町	ソウマチ
白水	シラミズ	嘉鈍	ハドゥン
阿伝	アディン	蒲生	カモウ
花良治	ヒラジ	浦原	ウラバル
崎山	サキヤマ	嘉鉄	ハティツ
手久津久	ティーヅク	川嶺	ハンミ
羽里	ハァドゥ	山田	ヤマダ
城久	グスク	島中	シマナー
大朝戸	ウィンサト	西目	ニシメ

長嶺　ナガミネ

佐野　速かったんじゃないかと思いますが、時間がなかったので済みません。要領が悪くてまとまりませんでしたが、そういうことで。まだ地名がどうなっているかというところまでは行っていません。

（質疑応答）

平田　どうもありがとうございました。喜界出身の村上先生もおられますから、遠慮なく質問して下さい。一通り説明を聞いていて気がついたのは、キとチが入れ代っていますね。例えば、荒木はアラチですね。喜界はチカイとは云わないわけですね。上に来たら、キカイ。方言で喜界の云い方があるんですか。

佐野　村上先生、方言で喜界というのは？

平田　やっぱり「キカイ」というの？

村上　そうですね。

佐野　お年寄なんかはどう云うのですかね。キとチが入れ代っていますか？

平田　崎山はサキヤマだね。サチヤマとは云わないよね。だから、喜界(キカイ) 。上の方に来たり二番目に来たら「キ」と云って、語尾に来たら「チ」というのかな。それから、東側の北の方にある塩道。シオがシュになるんですね。シュミチ。これはチと云うんだね。「ナートゥ」とか「ハートゥ」。里は「サト」と読まないの？

佐野　「ハァトゥ」と云います。中里の方は「ナートゥ」ですね。

小園　今考えているんですが、本土の言葉と地元の言葉があるようです。与論島に四年おって感じたことですけど、本土の言葉は、例えば早町(ソウマチ)・白水(シラミズ)・蒲生(カモウ) ・浦原(ウラバル)・崎山(サキヤマ)というのは本土から来ている。これらはほとんど同じ系統ですね。それに比べて、昔からの地名というのがあります。中熊は別として、大熊はウフグマと読むのですけれど、長嶺(ナガミネ)も同じ系統です。先ほど話題になった「チ」も昔からの地名のようですね。ただ思いついたことを云ってみました。

平田　それでね、まず赤連(アガレー)。「レ」語尾の地名は奄美に多い。それが一つ。中間とか母間とかの「マ」語尾ですね。それから仲熊とか大熊とか。「クマ」は何ですか？入江みたいな所？

佐野　大熊(タイクマ)といえば、あそこ。

平田　奄美本島は大熊(タイクマ)だな。

佐野　ちょっと入った所。入江なんでしょうね。

小園　なるほどね、体育館のある所。あのあたりを大熊と云いますね。名瀬から大和村へ行くところの入江でしょう。

村上　浦上川の河口じゃないですか？

小園　あそこも入江だもんな。

平田　それから嘉鈍とか諸鈍とか「ドン」という地名。それから手久（テク）というのは何ですか？

佐野　それから伊佐根久（イサネク）。

平田　奄美の地名も全部拾って整理をしなければと思っているのだけど、まだそこまでは手が回らない。整理をすれば何か手掛かりが出て来るとは思うのだけど。

佐野　私が聞いたところでは、赤連(アガレー)というのはですね、本当はこうなんだそうです。向うに、『喜界今昔物語』というのがあって、その中に書いてありました。喜界島ではどこが最初の港だったかというと、反対側の早町(ソウマチ)だそうです。帆船は必ず此処に寄って、それから山川の方に。それから帰りも此処に最初に入って来て、それから行きよったんだそうです。仮屋は湾という所にあったので、この二つが中心だったのです。早町と湾が合併して喜界町になったのですが、湾の方が大きくなって早町はただ支所だけが残っているという状態で、段々さびれて来ました。昔はここに仮屋があったと云います。現在はここに20軒ばかりですかね。塩道の東の方に屋敷を構えておった役人が、毎日此処まで馬

で通勤しよったんだそうです。あんまり大変だもんだから今の赤連の所に屋敷を構えたそうです。塩道の一番東の方を赤連と云います。太陽がアガるのでアガレーと云います。それで「アガレ屋敷」と云うようになり、それから赤連(アガレー)と云うようになったんだそうです。

平田　あぁ、そういう呼び名を付けたわけか。

佐野　後の人たちが、そのように付けた、と。もともと「アガレー」というのに、そう云った漢字を当てた、と。そういうふうに載っとていました。

平田　いいついでだから、村上先生。あなたが知っていることを何でも話して下さいな。

村上　話すようなことは、まだ調べていません。

小川　小野津に神宮とありますが、「カミヤ」。ここには神社か何かありますか？

村上　えー、あります。

小川　何という神社ですか。

村上　えーと、あれは。

佐野　喜界島にはいっぱい神社があるんですが、あすこのは八幡神社じゃなかったかと思います。

小川　あぁ、そうですか、八幡。

佐野　はい。大内八幡だったですかね。江戸時代の中頃に書類やら古いものを取り上げて、こっちの神社を押し付けたようです。そのために神社が多いのです。各集落にあります。

納　御嶽というのはないのですか？沖縄から奄美にかけての信仰ですが。

佐野　何ですか？

平田　御嶽信仰は？ウタキ？

佐野　昔の信仰、ノロとかユタ。

平田　そうそう。

佐野　ユタ神というのはあっですよ。

納　ありますか。そうすると、本土の神社系統のものと沖縄系統のノロの形とが此処でたまたま一緒になった形なんですね。

佐野　神社というのは、こっちからの薩藩からのものだと思うのですが、そうしたノロとかユタというものは民間の信仰として残ってるのじゃないでしょうか。

納　民間の家とは別にですね、御嶽と云って、祭場があるわけです、山の中に。

佐野　村上先生、ノロの？

村上　喜界島には、それはないようですね。ノロの家に。

納　ノロの家に？

佐野　あの一、花良治にですね、花良治に2軒、ノロの道具があってですね、栗山さんだったか来島さんだったか、そこにあると云って、本土から奄美から来たりして、それを分けてくれと云っていたということです。沖縄からもやって来たりした。何かそんなのがあるんだそううです。

小園　ノロは薩藩時代は禁止されるんですよ。それから大島だけが現在も残っている。他の所は、もうノロは消えて、与論島のあたりにもない。それで、ノロでなくて、ヤボと云いましてね、男の巫的存在。それから、ユタというのが今もありますが、各集落に神社がありましてね、与論島あたりにも森山というのが沢山あったようです、享保年間に。

佐野　桐野先生が書かれたことがあるんですが、それを禁止したのは薩摩に同化するということの他に、そんなにいろんなのがあったら入って行きにくい、開拓に困るのだという。桐野先生、そういうことではなかったですか。

桐野　開拓はいろんな条件を考えなければならなかったでしょうが、それを無視して藩はやった。ノロのお告げなしにやれば、災害が来るとか病気になるとか云われておったのを無視してやって、どうもなかったじゃないかということを見せて、山をどんどん開発して行った。そういうことはありますよ。それはありそうなことですよ。

それからね、私は思うんですがね、サネクとか○○クというのが多いですよね、大島には。それはどういう意味があるのですか。

佐野　イサネクとかカネク。

桐野　カネクも多い。それから、「城」と書いてグスク。あれはどういう意味があるのですか。あるいはね、諸鈍とか、ドンの付いたもの。グスクというのは見張りの場所とか、あるいは城とか、先程話があったのでそうかも知れませんがね。それでね喜界島でも本土でもどこでも共通の地名があるわけですから、何か意味があるんだろうと思うんですよね。私はね、奄美のことは、本島と徳之島は調べてみましたがね、地名は全然調べていないのですよ。全然地名は判りません。喜界島とか沖永良部島とか実際に行ったことは行ったんですが、特別に腰を据えて調査したことはありません。しかし共通のものがあるんですね。地名も共通なものがある。地名のその呼称の調査は全然しておらないけれどもね。ちょっと考えておるのは、琉球王朝時代のね、地名というのが奄美全体にあるのだ、と。例えば、サネクとかは続いているからね。諸鈍とかグスクとか。これらは琉球にもありますからね。琉球じゃない、沖縄にもありますからね。それで、琉球王朝の地名が、やはり相当に優勢なものがあるんじゃないか。さらに琉球王朝以前のものもあるんじゃないか。それから島津支配以後のもの、新しいものもある。そういうふうに分けて考えると、そうであれば奄美の地名の特色というのを考えることが出来るんじゃなかろうか、と。ただ思うだけでね、自分で調べたことは全然ありません。私は奄美の本島と徳之島だけは、まぁ腰を据えて相当やりましたけれども、島の開発とか農作物とか、そんなものの変遷に対して島津藩がどんな態度をとったかということを調べたんですけどね。いくら島津藩が大きな藩でもね、奄美の自然には勝てないですよ。私はそう思っておりました。日本屈指の搾取をしたんですからね。本土からも搾取したし奄美からも搾取したんです。収奪の限りを尽したんです。収奪の限りを尽した。そういう大名というのは、日本でもいくつもはおらんですよ。本土では奄美のようにサトウキビを作らせるわけにはいかん。米を作らせにゃしょうがない。米は全国的な商品作物でしたから、本土では米を作らせるのが一番いい。これは当り前のこと、常識ですよ。われわれがその時代におっても米を作った方がよかどということは、考えてみても当り前のことです。奄美でサトウキビ以外に銭になるものはなかった。これは奄美という場所だけの問題でなく交易ルートと云いますかね、交通手段を持っておったから出来たので、奄美にはサトウキビを作らせるのが一番よか、と。そして、大阪や遠い所に持って行って砂糖を売った。鹿児島の本土では、米を作れと。奄美ではサトウキビを作らせて、出来るだけ収奪をする、ということをやったんですから。本土では米を作らせてですね、門割制度の下で八公二民と云われるほど、八割は取ったんですから、農民には二割しか残さんかったんですから。それで食うて行くのは簡単なことじゃないですよ。まぁ、実によく我慢をしたもんだと思うんです。それから奄美では徹底的にサトウキビを作らせた。そして砂糖を持って行く。大阪に持って行けば、莫大な金額になるのですからね。これほどの儲けはなかったのです。莫大なものだった。天保の改革の当初においては島津藩は何でも転送する貧乏殿様だったのが、天保の改革の四年足らずの間に、日本で一番の金持ちになった。その金をね、島津がよかったのは、これを無駄使いしなかったこと。自分で使わなかった。磯の庭園も、あれは大したものじゃないですよ。日本の他の大名から見れば、他の大名から云えば（笑い）。例えば、岡山には後楽園があるでしょう。金沢には兼六公園があるし、水戸には常磐公園があっとです

が、膨大なものを作っておりますからね。島津藩は日本一の金持の殿様だから作ろうと思えばあんなのは簡単に作れた。ところが、そんなのに使わなかった。ほんとに金の無駄使いをしていない。そうして明治維新のために西郷さんたちが勝手にわっぜえ使われたわけですから（笑い）。それからすると、これは大きかったですよ。島津藩は日本一の金持ちでして、その金をもって明治維新を育てたんですから、相当ないいことをしとるわけですよ。そういうわけで、私なんかは小さい時から、私は百姓の子供ですがね、カラ芋の草取りを毎日して、小学校の二年・三年の頃から親がカラ芋の草取りに連れて行っごったし、こんなことばっかいで、私は仕事をすっとが好かんでですね、そして飯はカラ芋の飯ばっかいだった（笑い）。私はカラ芋飯が嫌でですね、よかもんは沢山食いたい。よかもんは人よりも余計食いたい、と。カラ芋はほんとに好かん。われわれの先祖をずいぶん搾取したんだと思うと、もう笑ってはいられなくなると思って調べております。

今日の会のことにかえりますが、私は琉球王朝時代の地名というものが残っているというふうに考えて、そのことを一つのヒントとして地名の研究をすればいい研究が出来るんではないかと思っとるんです。それから琉球王朝以前の地名、すなわち南嶋の古代の地名も恐らく残ってるんだろうと思うのですよ。それを見出すことが出来れば、それは大したもんだと思う。それから島津藩以後ですよ。その三つの大きな領域がね、どうですかね。

小園　私もそういうことを考えています。与論島にも、いわゆる琉球系統の地名があります。それをこっちから行ってですね、適当な漢字を当てている場合がある。例えば「茶花」とあるでしょう。茶花という港ですね。役場のある所。あれはチャバナという。

平田　チャバナ？

桐野　それは日本の地名な？

小園　茶花は当て字なんですね。えー、アガサ。そして現在は赤佐と書く。アーサという。赤崎はアーサキと云いますからね。こんな形が当て字ですね、全部。統一的に調べて行けばね、大体判るようになる。例えば、安里というのは、アシトと云います。

平田　アシト？

桐野　安里という地名もあっちこっちありますからね。

小園　それから、中間（ナーマ）というのがありますね。ナーマは与論島にもあります。ところが現代的に那間（ナマ）と表記する所が出て来ました。「那間」ですね。江戸時代の書類には「中間」と書いてありました。これをナーマと読みます。

平田　漢字だけを当てるの？反って判らなくなるわけだな。今、いろいろな話が出ました。琉球方言としてとらえる見方、それから、こちらから入って行ったのをはっきり分けるためには、やっぱり奄美は奄美だけで地名を類別して行く方がよい。例えば鈍（ドン）を抽出するとか、熊（クマ）を抽出するとか、鉄（テツ）を抽出するとか、勝（カチ）とか。そうしたら何か手掛かりがあると思う。ただ、われわれが判らないのは現地で何と読むかということを知らないわけでやっぱり現地の読みを知ってる人がね、解説しなければいけないだろうと思うのね。・それから、もう一つ、鹿児島は奄美・琉球を収奪したという話。鹿児島の人は収奪してほんとに申しわけなかったということを、どこかでね、謝罪しなければいけないと思うのだけど、ね。それが済んでいないと思う。

桐野　それはそうですよ。それでね、私は思うんですが、サトウキビばっかい作らせてですね、水田の開発が本島の方でも全然進んでいない。藩政時代は全国的に水田の開発に手を入れたのですが、全然手を入れてないのですよ。だから、私は奄美の本島

に行った時にね、他の所ではみんなやってるのに、公の水田の開発をやらなかったんだから、それはやってくれという理由がある、と。そう云ったらいいじゃないかと話したことがあるんですがね。だから、何と云うてもね、やっぱり歴史的にね、相当考えてみてね、やらんと本物は出て来んど。

平田　それから、さっきの話の続きですけどね、佐野先生が最初に云われたように、種子・屋久は室町時代のことばが多く残されている。奄美と沖縄は平安、いや奈良以前の日本語というかな。そうすると、沖縄とか奄美、種子・屋久の地名はやっぱり、きちっと整理して、こちらの地名と比較することによって古い時代の地名というのをリスト＝アップ出来るのですね。だから大事な研究の場所だろうと思うんだけど。案外やってないんだよね。そう思いますがね。

桐野　それからな、城（グスク）というもの。これは奄美にも沖縄にもずーっとありますからね。これは歴史的に考えれば簡単じゃないかと思うですよ。

平田　その広がりをね。

桐野　琉球王朝というのは豊かな国たったんですからね。交易によって非常に豊かな文化の進んだ国であったんですから。貿易をすることによって豊かになると海賊にねらわれることは決まっておるんですよ。昔は、どこでも宝のある所は海賊が出る。海賊が出て来れば悪さをすることは決まっているから、皆、海賊の見張所を作った。山の上に見張所を作った。それをグスクと云ったんじゃないか。琉球王朝とね、グスクというのはきわめて密接な関係があると私は思っとるんですがね。琉球王朝の富を考えた場合ですね、それはすばらしい富があったんです。あれは相当交易をしなければ、あれほどの富は出て来ないですよ。そうすれば、海賊が出て来るのは決まったこと。どんな海賊がおったか知りませんけれどもね、たくさん海賊がいたことは間違いがないと私は思っている。そうすれば海賊に対する対策を考えにゃいかんでしょうから、どこの島でもなー。そこで海賊の見張り番というのを考えた。よか場所は山の上だから、山に城を作るということはあり得ることじゃないですか。中世以前も海賊はおった。その程度のものじゃなかったと、私は思うのですよ、海賊にやられたその時代のことはね。隣近所の豪族が衝突した程度のものじゃなかったと思うのですよ。城（グスク）を作った時代というのは、ものすごい争いがあったと思うのですがね。

佐野　先生。その海賊というのは倭寇とは、又。

桐野　倭寇なんてものは、ちんけ（小さい）。あれは、ちんぴら海賊よ。倭寇というのは海賊という面もあったけど、あれは体裁よく云えば、やっぱり貿易商人だった。

平田　昔は、商人と海賊は裏と表ですからね、世界的に。

桐野　あれは裏・表ですから、調子がよくなれば海賊をやるよりは商売の方がいい。取り締りはげしくなれば、うんにゃあたいどんな商売人やと云うて儲けた金をちっとやれば、それで済みよったわけよ

小川　ちょっと質問がありますが。

平田　はい、どうぞ。

小川　白水（シラミズ）という所は、湧水かなんかありますか。

佐野　ここの地形を見ますと、崖になってるんです、200メートルばっかいの。100メートルばっかりすーっと降りて来るもんですから、その崖の下に大きくはないんですけど、たくさん湧水があります。

小川　その湧水についた名前でしょうか。

佐野　はい。

浜崎　志戸桶と書いて「シー」としてあるのは、どんな地形でしょうか。

佐野　志戸桶はですね、入江になっています。昔は「沖縄泊」と云いよったそうです。それが何なの

か。現在は志戸桶港。古くは沖縄泊。

浜崎　神宮(ｶﾐﾔ) がありますね、神社などと関係があったような。由緒とか何か出ないもんでしょうか。

佐野　志戸桶は、こんなふうに云われています。この集落は昔からすると海岸の方に少し移動した、と。集落のちょっと上の方に大きな湧水があるんですが、昔はそこが中心だった、と。そこに神社があります。少し移動した集落だということです。

浜崎　「桶」がついているのが。「志戸」というのは私の所の近くにもあるんですが、「桶」というのに特別な意味があるのか。

佐野　どうですかね、向うじゃ、志戸桶（シー）と云いますね。

浜崎　シー？　桶は云わない。

佐野　このテープを聞いとったら、「シー」。

平田　さっき「桶」は云わなかった。

佐野　何故、志戸桶と書くのか。私たちは志戸桶(ｼﾄｵｹ)と云ってたのですが。それから、カラ芋は「ハンスー」と云います。

浜崎　ハンスー？

佐野　ハンスーというのはですね、中国の福建省あたりでファンスーとかクァンスーですかね、要するに似た言葉で云うんだそうです。

平田　はい、松浪先生。

松浪　金久。大金久や小金久ですが、私の記憶では、砂利・石ころの多い海岸をそう云った。大島に居た頃、聞きま　　nから、勝。西仲勝とか安勝とかいう。あれは人が集まっている所という意味だったような気がするんですけどね。その頃は地名の方に、まだ－－－－。

佐野　大勝とか仲勝とかありますね。

松浪　それから、城(ｸｽｸ) ですけれども、グスクは城を築く。ところが、ロシアには○○スクというのがありますね。奄美には宇宿(ｳｽｸ) 。意味は同じで音声も似てますので、面白いですね。あれは共通するところがあるんじゃないかなとも思います。

小園　本土の地名は、そこの生産物とか村の状況とか、こういうことで割合追求し易いのですね。ところが島の方には金久とか嘉鉄。嘉鉄というのはハテツとしか聞こえない。発音の変っているのも、漢字を当てているから、追求の仕方は、共通の点もありますが、ちょっと違うような感じもします。向うの言葉も考えなければ。

平田　うん。だけどね。

小園　何か法則があるんだろうか。

平田　法則は見付ける必要があると思うんだよね。われわれは判らないからと云って手を付けないけれども、沖縄とか奄美の地名を整理することによって古い時代の地名が判って来たら、逆にこっち側の判らない地名がよく理解出来るという面も出て来る。例えばね、この前整理していて気付いたのだけど沖縄に具志川(ｸｼｶﾜ)という地名がありますが、クシというのは「うしろ」という意味。グスクのうしろを流れている川が、グシク川・グシ川になるわけでしょうから。明治の初めに沖縄を研究した笹森儀助という弘前出身の人がいます。南の島々を探検したことを書いております。笹森儀助の『南嶋探検』を読んでいましたらね、あれはどこだ、西表島かな、前良川(ﾒｰﾗｶﾜ) と後良川(ｸｼﾗｶﾜ) というのが出て来るんですよ（板書）。前良は前にある、前を流れる川、後良川というのはうしろを流れている川でしょう。そうすると、大隅の方の「串良」の手掛かりになりそうな一番有力な説明が出て来ることになる。だから、もっと積極的に沖縄とか奄美の地名とね、取り組むことが必要で、反ってこちらを振り返って眺め易くなるのではないか。

小園　沖永良部島では、前浜と書いてメーバマと読む。

平田　クシ浜はないの？

小園　それは聞かない。

佐野　喜界島でも前浜(ﾒｰﾊﾏ)と云います。

平田　時間が来ましたが、喜界の意味はどう考えているの？喜界島の人たちは。

桐野　喜界という地名はいつから出て来るんですか？

小園　この前の隼人研究会で、喜界の地名の説明ありました。鬼界のことだと判るんですけどね。まぁ、喜界と書いたり、貴海と書いたり。

平田　あれは平家物語に出て来るんだよね。

小園　平家物語に出て来るんだけどさ、それが喜界島なのか、硫黄島なのか。

平田　平家伝説があることと、それから俊寛僧都とか成経なんかが流されたのがどっちなのか、それも聞こうと思っとったんだけど。俊寛が流された伝説など、どの程度残っているの？

佐野　あれはですね、京都の大学の先生が発掘されたとか。ちょうど似たような骨格というか何というか、年令がですね。ところがその埋葬品というのが琉球系だということでした。

平田　ほう。

佐野　そんなことが書いてあってですね。それとこの前、原口先生が来られた時、当時どこまで流すかということを云われました。あんなに遠くまで流したら、見せしめにならんのだ、と。だから近い所に流して見せしめにした。それがまぁ妥当だろう。だから、そこの硫黄島だろう。こっちはどうしても云いたいなら、伝俊寛墓とかですね。

平田　喜界島の場合？

佐野　そう云った方がいいんじゃないか、というような話をちょっと聞きました。要するに高貴な方の骨格であったそうです。

桐野　俊寛の流された島がどこの島だったかということは、まだはっきりしないの？

平田　いろんな説があるんですけど、やっぱり硫黄島説がだんだん有力になるんじゃないですか。

佐野　なんか、そんなことを云うてる。硫黄島の方が史実に近いんじゃないか、と。

平田　平家物語に書いてあるいろんな島の名前をずーっと拾いあげて行けば、こっち側に落着きますよね。

小園　俊寛が死んで、有王という家来が来て、骨を拾って高野山に納めたというのが、平家物語に書いてありますよね。

平田　そんなに遠くはないと思わなければね。

小園　骨が残っているということは、あり得ないのではないか。

佐野　しかし、遣隋使・遣唐使の頃は、南島路というて、あすこをずーっと行きよったわけですね。それから、平家が滅んだのはもっと後ですからね。その頃の航海術から云ったら、案外に平家の落人が来たと云っても不思議はないんじゃないかという気はする。

小園　そうですね、離島には、平家の落人伝説は大島にもありますからね。奄美大島には平有盛が落ちて来たという。

佐野　有盛とか資盛とか。

小園　そして、追手が来たという話やらありますから。

佐野　徳之島なんか、そうじゃないですか。

小園　そうですね。

平田　そこまで追手が来ますか。

桐野　われわれの想像する以上に遠くまでね、人間の息がかかってるんですよ。実際の時点では人間は遙か彼方まで行ってると思う。

佐野　縄文・弥生なんかのね、遺跡なんかはいっぱい出て来るという、島の方でも。

平田　それは、そうだけど。物や文化と、人は一緒にすることは出来ない。

佐野　ただ、こんなことはどうですか。今さっき

云われた、ここの地名は非常に古い。古代の日本の地名と琉球の地名が重なっている。そしてまた新しく本土から来た地名が重なっている。そういう伝説も、いろいろ重なった部分もあるんじゃないですかね。なんか、あそこを見ておったら、そんな気がして。ただ、喜界島ばっかりををいくらやってみても、ちょっと判らない。

平田　広い、こっちとのつながりをね。

佐野　そういう意味で、重なりぐあいを考えて行かんとなかなか判らない。先生方の話を聞いてそう思いました。

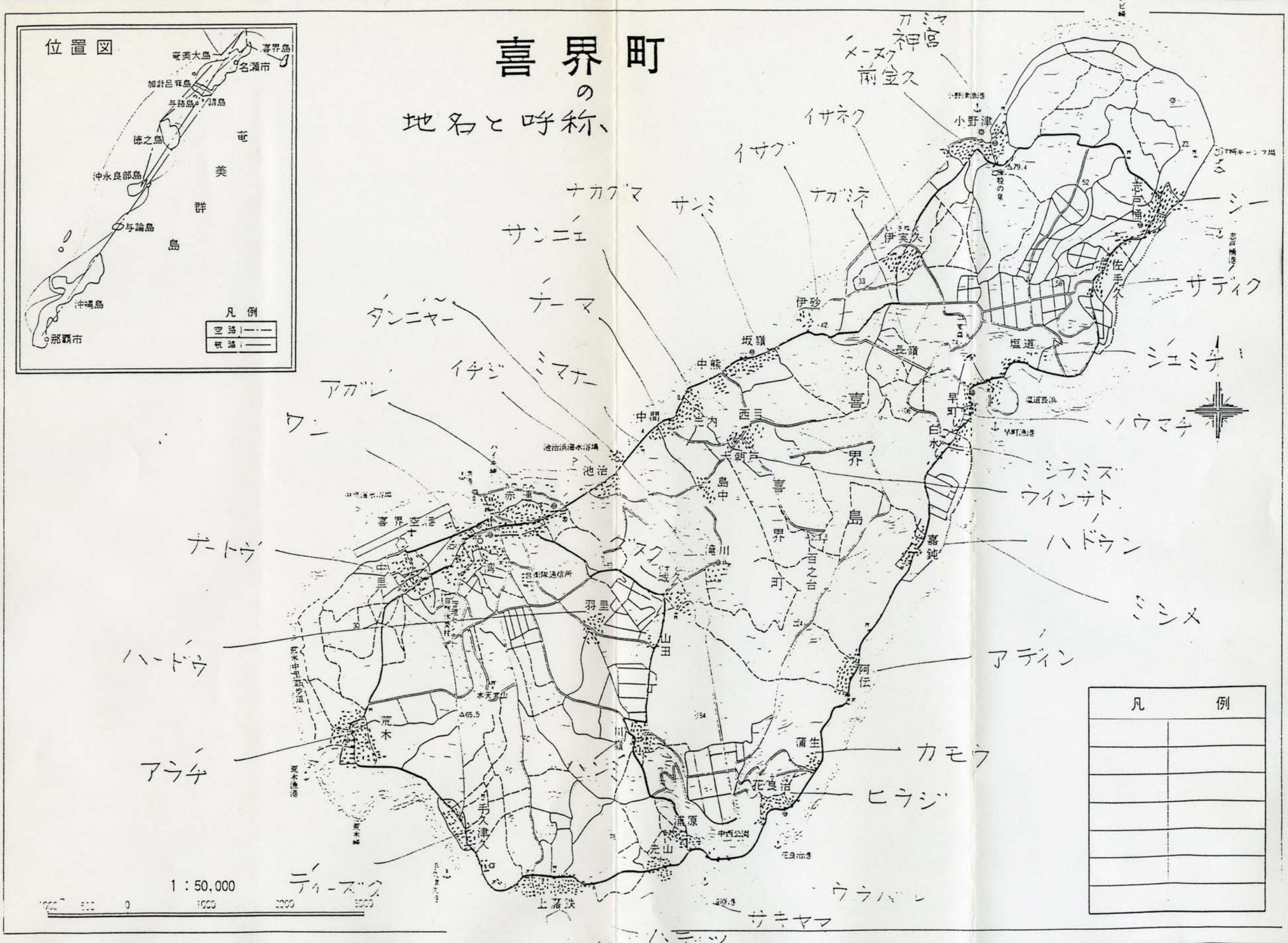
小園　私は徳之島について調査しているもんですから、思うのですが、島では次の島が見えているんですよね。柳田国男の海の道というのは生きているわけです。あれを目安にして、とにかく、古くから縄文・弥生の人たちが北上し、また下って行ったというのですね。おっしゃったように、平家の高貴な方がそこで死んだこともあり得るわけですね。平家伝説にしても、何にしてもですね、伝説をひっくり返す、否定しない方がいいと思うんですけど。

平田　伝説はあってもいいけど、ある程度は裏付けておかなければいかんのでしょう。地名も何かを裏付けて歴史的なつながりをもたなければいけないので、逆にいうと、小さい所の地名だけど、広い視野の下で調べて行ったら、これは大きな問題につながるのだ、という共通理解で進めばいいのではないでしょうか。

ありがとうございました。今日はこれで終りにします。六月は花田さんが「天道信仰と地名」について話をされます。何か発表予定がありましたら、申し出て下さい。

昭和六十二年七月

喜界町の地名と呼称



鹿児島事務機商会

鹿児島県大島郡

喜界町

珊瑚礁台地喜界島の開発

佐野　武則

わたくし達の郷土・奄美はどんなところでしょう。日本列島南北およそ3,000kmのうち，奄美諸島は琉球諸島とともに，南のおよそ1／3・1,000kmを占める海洋諸島である。

ここは本土と異なり，ガジュマルやアダンが繁り，パパイヤやバナナが実り，ハイビスカスやブーゲンビリアが咲き乱れ，サトウキビが栽培されている亜熱帯性気候の地域である。

沿岸を黒潮が洗い，珊瑚礁が発達し，海中には色あざやかな熱帯魚が群泳いでいる。実に豊かな自然の残っているところである。

古くから海外文化の伝わる主要なルートの1つであり，かっては道の島とも呼ばれているところである，貴重な文化遺産を数多く残している地域でもある。

藩政時代は薩摩藩が支配し，サトウキビ栽培を強制して，世にいう苛酷な“黒糖地獄”の支配が行われもした。中でも喜界島・徳之島・沖永良部・与論島は水に不自由する乏水性の珊瑚礁台地をなす島である。

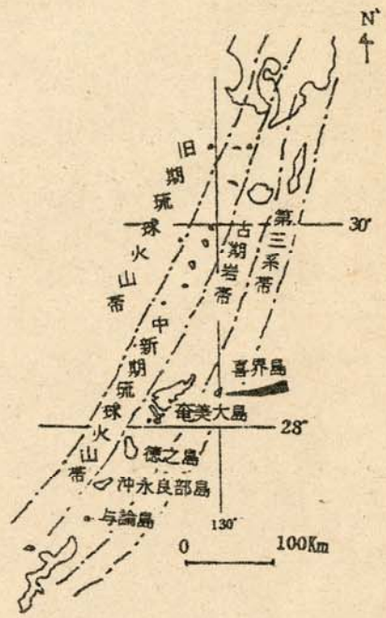
奄美の先人達がこれらの環境の中で，いかに努力し，工夫して生き抜いてきたか。先人の知恵を知り，地理的特性を明らかにすることは今後の郷土の発展と将来への展望を開くために，是非とも必要なことである．郷土教育の見地から喜界島についてみることにする。

1．乏水性の珊瑚礁台地である

(ア)位置と地形・地質の特色

喜界島は第1図のように鹿児島よりおよそ380km程・度離れ，大島本島の東・25kmに浮かぶ平坦な隆起珊瑚礁の島である。(北緯28°19，東経130°）北東から南南西に細長く14km，南北の最大幅8km，周囲48km，面積55kmの台地状の小島で，ひょうたんの形をし，およそ1万人の人々が生活している。

(第1図)　喜界島の位置

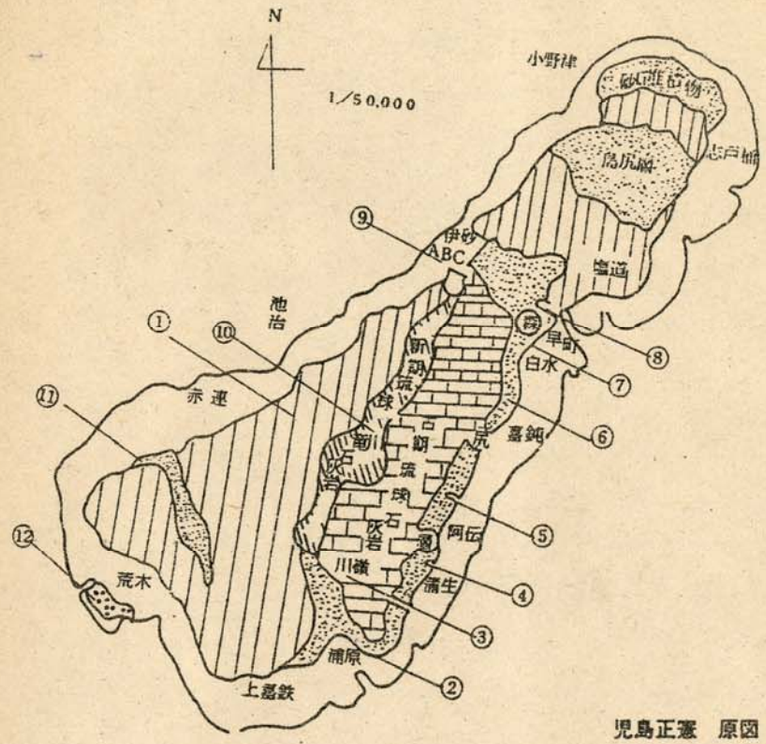


基盤の地質は第三紀の島尻層で北へは種子島や宮崎県の日南地方，南へは沖縄県の宮古島の島尻海岸などに続いている。その島尻層の上に珊瑚礁が乗り，過去にそれが隆起し，大まかにみて4段（正確には6段）の段丘になっている。これに多くの断層が生じている。

珊瑚礁にはキ裂やすき間が沢山ある。このために降った雨はすぐに地下に浸透してしまい，その基盤である島尻層が不透水層をなして，その境目付近から湧水する。

喜界島はこのように隆起珊瑚礁の島で4～6段の段丘があり，多くの断層がある。しかも1本の永久河川もない。ところどころに湧水がみられる。乏水性の台地である。

第2図　喜界島の教材地質図



児島正憲　原図

喜界の教材地質図

①・新期琉球石灰岩のトリウム230による絶体年代の測定地(59,000年±5,000年前)

・小型有孔虫を含む島尻層下部暗灰色泥岩

②・島尻層中部黄カッ色砂泥……砂鉄層をはさむ

・〃　〃　暗青灰色泥岩……小型有孔虫

③・島尻層とその上の堆積層（伊砂層）との不整合

④・新道工事現場，島尻層中部砂・泥互層

偽層・断層・岩石の風化の観察

⑤・百之台最高所　断層崖・地質と浸食の関係

⑥・島尻層中上部～上部の観察，琉球石灰岩の観察

⑦～⑧・島尻層上部層の観察，上部琉球石灰岩との関係の観察

偽層・小断層・砂鉄層・凝灰岩・火山角礫軽石などの観察，凝灰岩・軽石・砂鉄・有孔虫化石・硅藻化石などの採集，石灰岩の風化によるテラロッサ土壌生成の観察

⑨・島尻層上部～最上部の観察

9Aモデル河川　　・不整合

9Bモデル断層・地ろい・地溝

9Cかなり固結した砂岩層

9D巻貝化石・レンズ状サンゴ層

⑩　下部（最古）琉球石灰岩と中部琉球石灰岩の境界およびその付近からの地下水流出

⑪　砂丘堆積物中に見られる不整合

⑫　火山角礫軽石の二次堆積層……荒木崎一帯に隆起サンゴを覆い，かっ砂丘層の下に軽1～2㎝ていどの円摩された軽石層が，厚さ10～20㎝ぐらいで1㎞四方以上に分布している。

(イ)喜界島の集落はどんなところにできているか。－水との関係－

人間が集落をつくる（島立（しまだて）する）とき，まず水が得やすいかどうかが重要な条件となる。喜界島には永久河川は1つもなく，湧水だけである。

この湧水は地質構造との関係からみると，第三紀層の島尻層（早町層ともいい，砂岩・粘板岩の混じったもの）が不透水層をなし，これに断層が影響している場合も多い。

湧水の型は次の3つに分けられる。

①基盤の島尻層（早町層）が不透水層をなしているもので，中小規模の湧が多い。

②断層線に伴うもので大規模湧水が多い。（滝川・花良治など）

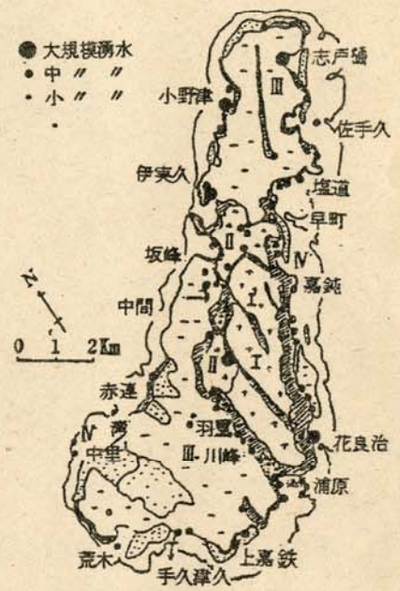
③海岸地帯に湧水するもの（中間・湾・荒木など）汐の干満の関係で利用しにくい。

第3図は喜界島の湧水分布を表わしたものである。

これによると，滝川・花良治・大朝戸・伊実久・小野津・志戸桶・浦原などに大規模湧がみられる。中小規模の湧水も喜界島では重要であり，現在のように上水道になる前は，ほとんど集落の飲料・生活用水源として利用されていたのであり，余り水は灌漑用水として貴重な水資源であった。

第4図は喜界島の集落の水道以前の状態を示したものである。これによると，全島34集落のうち湧水依存型集落が24にもなり，全体の70.6％に達し圧倒的に湧水依存型集落が多い。

（第3図）　喜界島の湧水分布



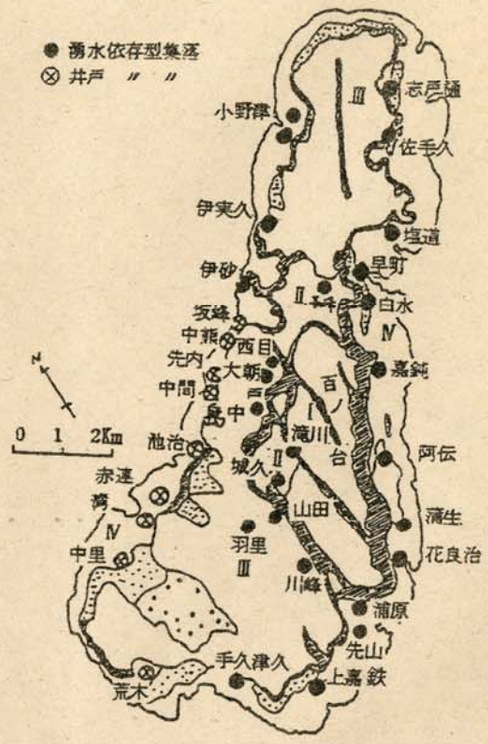
地表には一本の永久河川も無い喜界島では，湧だけが利用し易い，安定した水源であった。

湧水依存型集落では，集落内に2～3の湧水池があり，これをハーと呼んでいる。伊実久集落にはハッカー，ウッガーハー，シュンニャンハーの3つの湧水がり，集落の人々はこの3つの湧水のいずれかを利用していた。水汲は主婦や子供達の仕事であり，オケを頭にのせるか，バケツで朝夕荷ないあげていた。明治の末頃，井戸が堀られるようになり，昭和初期頃全戸に普及した。しかし，野菜を洗ったり，洗濯をしたり，

水浴をしたり，ハーは上水道が設置されるまで集落の重要なオアシスとして機能していた。現在では水道になり，その重要性も低下したが，古い歴史的文化遺産として大切に保存したいものである。

（第４図）　喜界島の集落（水道以前）

―昭和30年代以前―



井戸依存型集落は，荒木・中里・湾・赤連・池治・先内・坂峰など８集落で，全集落の23.5％にあたり，集落内に数個の古井戸がある。喜界島で最も古い縦井戸は大朝戸の磐井家の古井戸で天保８年（1837）といわれている。おそらく，この頃から経済力のある家が井戸を掘りはじめたであろう。それ以前は海岸付近の湧水を汲むか（この湧水は干潮の時だけしか利用できない），天水を利用したであろう。庭の木の幹に，サネンの葉やクバの葉をしばりつけ，幹を伝って来る雨水をハンド（甕）に溜めている風景は，明治中期ごろまで見かけたものだという。現在では，ほとんどの家に，りっぱな井戸があるが，これをつくるには固い石灰岩を掘り抜かねばならず，多大な労力と技術が必要である。各戸に普及したのは戦後の20年代以降のことである。

古老によれば，喜界島男子一生の仕事として，家を建てること，井戸を掘ること，墓をつくることの三つがあるという。それ程，湧水に恵まれない集落にとっては，井戸を掘り，水を確保することが大事であったのである。県本土のシラス台地である笠野原台地の深井戸や，南薩台地の溶結凝灰岩を掘り抜いた深井戸などと同じで，先人の努力と知恵に驚くばかりである。

（ウ）喜界島の集落と耕地はどんなところにあるか

（ａ）地形と集落

喜界島の地形は大まかにみて４つ（正確には６つ）の段丘からできている。（第５図参照）

（第５図）　喜界島の地形分類図

最上段の第１段丘・・（百ノ台）を除く，他の３つの段丘にはそれぞれ湧水がみられる。

全島34集落のうち25集落が最も海抜高度の低い　①後氷期段丘・・（Ⅳ段丘）上にある。（71.4％）　②低位段丘（Ⅲ段丘）は喜界島で最も面積の広い段丘で，７集落）（川嶺・山田・羽里・島中・大朝戸・西目・伊実久）がある。（20.6％）

③中位段丘（Ⅱ段丘）上の集落には，城久・

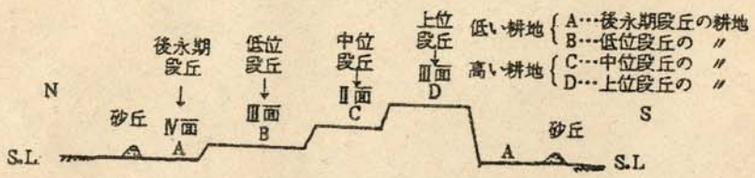
滝川・長峰の3集落（8.6%）があり，最も高いところにある集落で，みはらしがよい。段丘は小さく，断片的であるが，湧水もある。

④上位段丘（Ⅰ段丘）の百ノ台は喜界島で最も高い段丘で，湧水もなく，風当りも強く，地味もやせて，集落も立地していない。

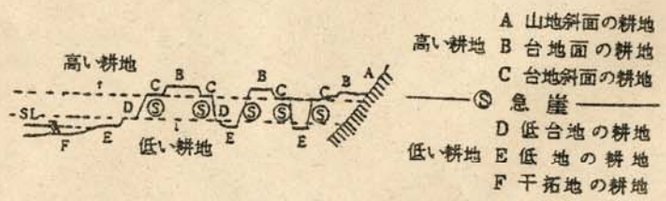
（b）地形からみた耕地の種類と特色

喜界島の耕地を海抜高度の低い順にみてみると，後氷期段丘の耕地（A），低位段丘の耕地（B），中位段丘の耕地（C），上位段丘の耕地（D）の4つに分けることができる。

（第6図）　喜界島の地形と耕地



（第7図）　鹿児島県耕地の地形学的分類（桐野利彦　原図）



Aの耕地……最も海抜高度が低く，若い耕地であり，防潮林として，モクマオウを植えてある。その内側は耕地や宅地となっているが，外側は未だ耕地とはなり得ない珊瑚礁の裸地である。

Bの耕地……海抜20～80m位で喜界島で最も広い耕地である．湾頭原・荒木原・志戸桶丘陵などがそれにあたり，耕地の中心をなしている。

Cの耕地……面積も狭く，かなり浸食されて階段状をなしている。しかも断片的にしか分布していない。（80～120m）

Dの耕地……喜界島で最も海抜高度の高い（140m以上），百ノ台にある耕地である。湧水がないので集落もない。高いところにあるので，風が強く，地味もやせて，耕地としての条件は余りよくない。

縁辺部分だけが台地下の，阿伝・嘉鈍・城久・滝川・大朝戸の人々により耕作されていたが，大部分は山林，原野として放置されていた。

本格的に開発されはじめたのは1960年代以降からである。大型製糖工場（生和糖業）が池治にできて，急激にサトウキビ栽培面積が増加しはじめてからである。現在ではサトウキビ畑・牧草地・牧場・山林などになっている。

（c）珊瑚礁台地とシラス台地との地形分類上の比較（第6・7図参照）

桐野利彦氏は鹿児島県本土の耕地を地形上，6つに分類し，シラスの急崖を境に高い耕地（山地斜面の耕地・台地面の耕地・台地斜面の耕地）と低い耕地（低台地の耕地・低地の耕地・干拓地の耕地）とに分類され，耕地の種類・開発の時期・開発主・開発労力・作人等について明らかにされている。

喜界島は隆起珊瑚礁台地の島で，大まかにみて4段（正確には6段）の段丘があり，特に南側のA～D間の急崖が目につく。北側ではB～C間の急崖がよく目につく。そこでB～C間の急崖を境に，低い耕地（A・B）と高い耕地（C・D）とに分類し，県本土のシラス台地と対比してみる。

シラス台地斜面に相当するのがC（城久・滝川・長峰）で，シラス台地面に相当するのがD（百ノ台）である。低台地に相当するのがB（湾頭原～荒木原・志戸桶丘陵）で，低地にあたるのがAとみなせる。

湧水はA・B・Cまであり，集落が立地し，一部水田も開発されて

いる。しかし，一番高い所にあるDの百ノ台だけは崖下の（阿伝・嘉鈍・城久・大朝戸など）人々により，わずかに縁辺部分だけ耕作されていたにすぎない。湧水がなく，風が強く，地味がやせており，しかも集落からの比高が大きい。このように耕地開発の条件の厳しいところである。ことに阿伝や嘉鈍の人々は，ほぼ垂直に切り立った崖を比高200ｍ程もよじ登らなければならなかったのである．鹿児島湾岸カルデラ壁下の竜ケ水付近の人々が壁をよじ登り吉野台地（上野原）を耕作するようなものである。現在では車でものの10分もあれば往復できるが，先人の苦労は想像を絶するものがある。そのようにして耕地を開発していったのである。

このように百ノ台の中央部分は広大なシラス台地，例えば，笠野原台地や十三塚原台地などの台央部分に相当するといえよう。しかもシラス台地斜面に相当する城久・滝川・長峰などに湧水がある。鹿児島県のシラス台地の型を三区分された桐野利彦氏の分類に当てはめるならば，喜界島は十三塚原型（不透水層が２～３層あり，かなり高いところに湧水がある）に近いといえよう。

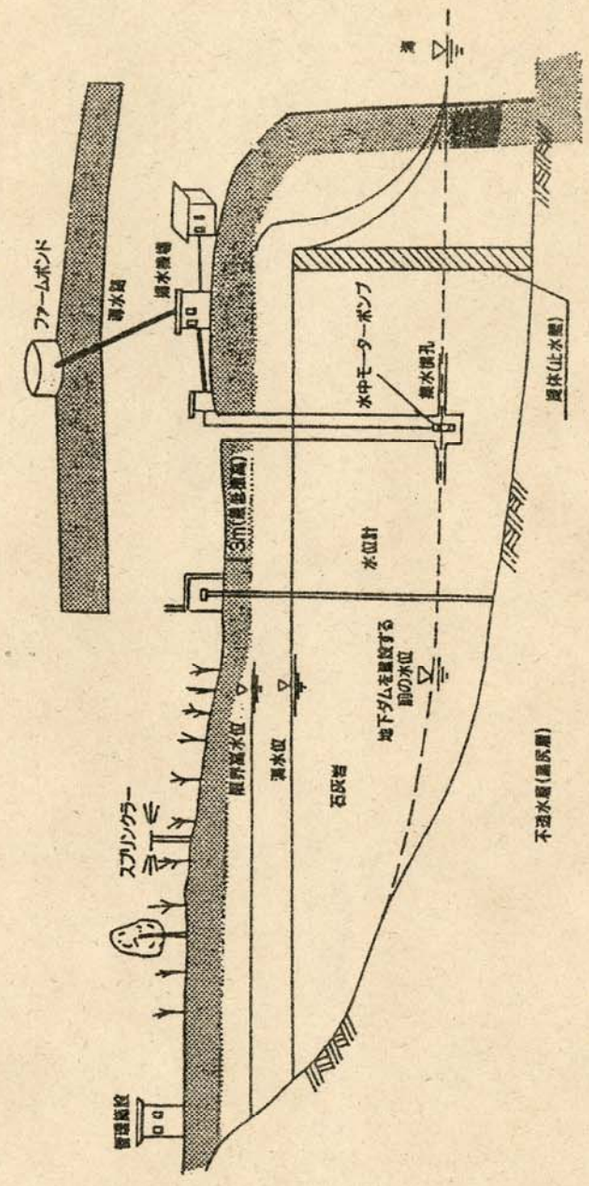
(エ)地下ダム構想

喜界島には１本の永久河川もない．年降水量も2000㎜以上ありながら，亀裂や空隙の多い珊瑚礁台地のために降水の大部分が浸透してしまい，海岸付近や海中に流出する。このため毎年のように夏には干魃にみまわれる。

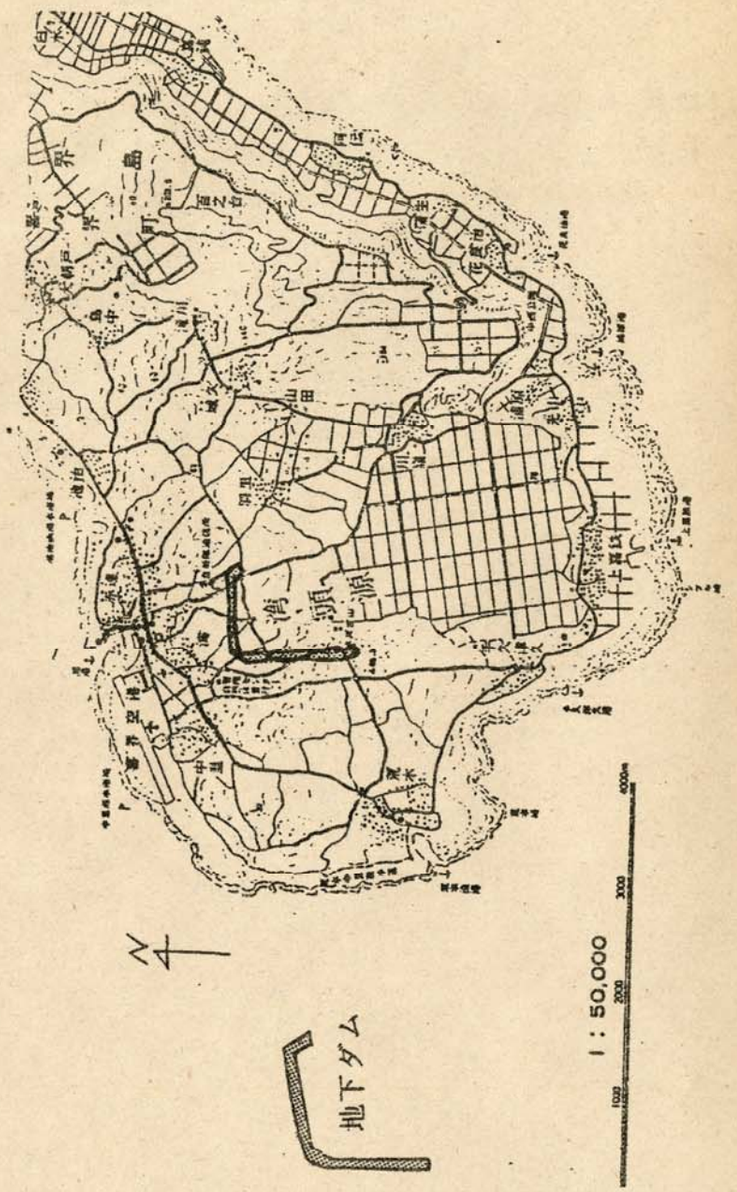
このような状況のもとで考えられたのが第８図の地下ダム構想です。

これは島内一の広大な面積の湾頭原に国営事業で畑地潅漑をしようとするもので，すでに昭和62年から工法テストが行われている。第９図のように，湾頭原は南東から北西の方向へゆるく傾斜した段丘である。

基盤である島尻層に達する堤防を地下に築き，亀裂・空隙の多い石灰岩中の地下水をせきとめ，これをポンプアップし，潅漑用水として利用



（第８図）　地下ダムのしくみ



（第６図）　湾頭地下ダム計画地区

する計画である。

すでに沖縄県の宮古島（総貯水量4060万トン）や沖縄本島南部(550万トン）では完成し，良い成績をあげている。

湾頭原の地下ダムも計画によると，流域面積4.25km，総貯水量210万トン，堤高25ｍ，堤長1840ｍ，１日当り25000トンをくみあげ，763haに灌漑する予定である。

これにより，喜界島の農業も夏の干魃が防止でき，サトウキビはもちろんのこと，各種園芸農業が可能になり，フライト農業と結びつけば，喜界島の農業は飛躍的に発展することが期待される。

第１表　湾頭原ダム（Ｓ59年度報告より）

流域面積	総貯水量	有効貯水量	堤　　高	堤　　長
4.25km	2,161千ｍ	1,861千ｍ	25　ｍ	1,840ｍ
ダム天端高	満水面積	かんがい面積	日最大揚水量	計画基準年
E.L.20ｍ	1.93km²	763ｈａ	25,000ﾄﾝ／日	昭和47年

２．サトウキビとカライモ（ハンスー）の果した役割

藩政時代初期，サトウキビとカライモ（ハンスー）が奄美に伝わってきた。その結果，奄美の歴史は大きく変化していった。藩は黒糖生産の有利さに目をつけ，喜界島・大島・徳之島の三島にサトウキビを強制耕作させ，言語に絶する厳しさで年貢としてとりあげたのである。藩の財政が苦しくなればなるだけ，その厳しさは度合を増していった。しかしながら，奄美の先人達はよくこれに耐えた。これを救ったのがカライモであり，人々の主食となった。(本土では年貢として米がとりあげられ，カライモが主食)

しかも，その結果，幕末には財政にゆとりさえできた。木曽川の治水工事・集成館の各種事業・留学生の派遣・明治維新の大事業など，数々

の歴史的偉業がなされたのも，奄美の先人の汗と涙の結晶である黒糖のおかげだといっても過言ではない。(もち論，その他に琉球を通じての密貿易・金山開発・本土の米・大阪商人への借金の無返済などがあるが)

そのような苛酷な状況の中で奄美の先人達は生き抜き，すばらしい自然や伝統・風俗・習慣などの遺産を今日まで残してくれているのである。

(ア)サトウキビとカライモの伝来

①サトウキビの伝来

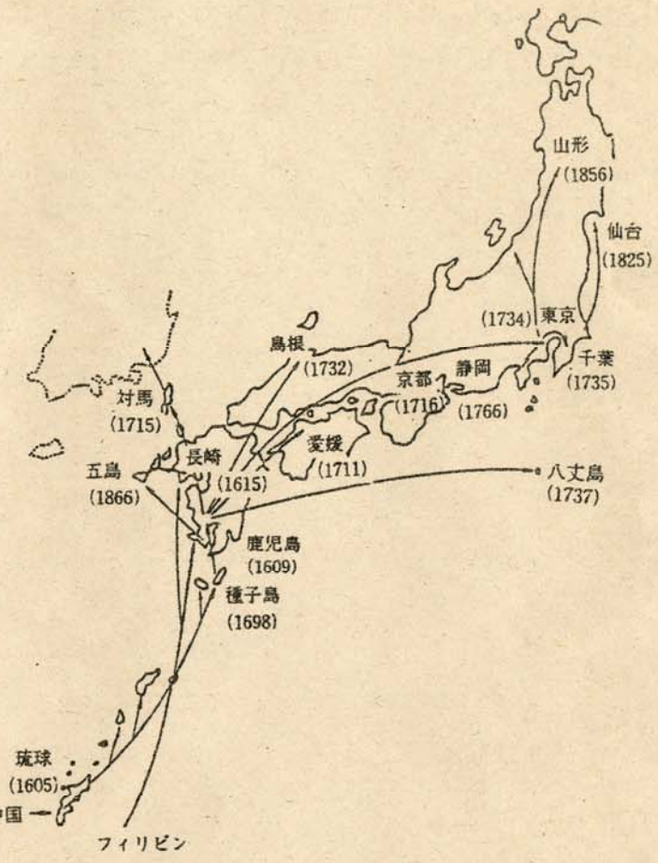
慶長10年（1605）に大和浜の直川智(なおかわち)が琉球へ渡ろうとして台風にあい，中国の福建省に漂着した。そこでサトウキビをはじめて知り，栽培法と黒糖製法の技術を学び，帰国する時，数株を密かに持ち帰った。

それを郷里の大和浜で栽培し，翌春百斤の黒糖製造に成功した。これがわが国の最初のサトウキビ栽培であるといわれている。しかし一説には藩が島に“黍検者(きびけんじゃ)”などをおいて生産監督にあたらせた元禄8年（1695）からほど遠からぬ以前，つまり元禄の直川智時代と考えられている。

②カライモ（ハンスー）の伝来

熱帯アメリカ原産のカライモはまずコロンブスによりスペインに伝えられ（15C末），次にスペイン・ポルトガル人によりスペインの交易基地であるフィリピン（マニラ）に伝えられた。(16C中頃)16C末福建省の陳振龍がフィリピンから中国南部へ伝えた。沖縄の宮古島へは宮古島の長真氏旨屋(しんや)が慶長2年（1597）に福建省からイモづるを持ち帰り島内に広めた。沖縄本島へは野国(ぬぐん)総管が慶長10年（1605）福建省から鉢植にして持ち帰り植えた。それを儀間真常が広めた。本土へは山川の前田利右衛門が宝永2年（1705），琉球に渡りカライモ数個を持ち帰り広めているが，奄美は琉球との距離も近く往来が頻繁であったので，本土に伝わる，かなり前に伝わり栽培されていたものと考えられる。慶長10年（1605）～宝永2年(1705）の間であったに違いない。

第10図　北上を続けたサツマイモ



「サツマイモのきた道」小林仁著　58P

注)（　）内に示した年代は資料によって多少異なる。

このように17C前半に相次いで中国南部から伝わってきたサトウキビとカライモは奄美に根をおろすことになった。サトウキビは藩の重要な商品作物として強制耕作させられた。そのために苛酷な労働と犠牲をしいられる作物として，他方，カライモは主食として人々の命のもととなる作物として奄美に根をおろしたのであった。

カライモは藩政時代，薩摩藩だけでなく，青木昆陽を通じて全国へ普及し，救荒作物として，主食として人々の生活をささえたのである。

(イ)喜界島の栽培作物の移りかわりと耕地開発

喜界島は文正元年（1466）琉球王の支配下にはいり，140余年を経た慶長14年（1609）に薩摩藩の統治するところとなった。そこへ，17C前半あいついでサトウキビとカライモが伝わってきたが，まだこの頃までは，米・麦・粟・大豆などの自給作物を栽培していた。

喜界島代官記によると，享保3年（1718），代官平田平六による新旧溜池の普請についての達示にみられる通り，米作に力を注いでいた時期にあたる。現在でも川嶺や山田・西目などに残っている溜池がそれであろう。湧水や溜池を利用して，大いに米作が奨励されていたと考えられる．

元禄～享保年間（1688～1735）頃は藩によるサトウキビの強制買上げの定式買入とはいえ，まだ水田可能なところにはかなりの米作がおこなわれていたのである。しかし，藩財政が逼迫するばする程，財政立直しのため，強制の度合いは強くなり，ついに延享2年（1745）には年貢はすべて黒糖で納めさせるという換糖上納令が公布されたのである。

安永6年（1777）になると三島（大島・喜界島・徳之島）に惣買入を実施した。これは定式買入とは異なり，栽培面積を決め，黒糖は全部藩が買い入れる方式で藩にとっては最も有利な方法であった。藩は監督を厳重にし増産につぐ増産にかりたてた。人々は1片の黒糖すら口にできず，違反した者は厳しく罰せられたという。

幕末になるにつれてさらに強化され，天保10年（1839）からは羽書を人々に与え，必要な日用品を藩が購入，交換するようになり，貨幣の流通をいっさい禁止した。このため喜界島の黒糖生産は明治元年（1867）309万斤（1854トン）の最高に達した。（奄美全体では明治2年がピークで2002万斤，12012トン）明治6年（1873）の勝手売買が許されるまでこのような苛酷な状態が続いたのである。そのような生活の中で主食として人々の生命を支えたのがカライモであった。

黒糖の自由売買が認められるようになると自分達のための自給作物で

ある，米や粟・麦などの雑穀やカライモを植えはじめた。このためサトウキビは激減する。しかし政府による奨励策がとられるようになると徐々に増加し，明治42年（1909）にはそれまでの最高の明治元年の量を上まわり，401万斤（2406トン）を記録した。このような状態が大正中期まで続いたが，その後外国産の安い砂糖が輸入されるようになると，大正7年をピークとして減少し続けた。さらにその後の世界的不況や戦争などのため激減し，戦後の昭和21年（1946）には大正期のわずか1／10まで減少した。

戦後は，もっぱら自給作物の雑穀（麦・粟）・カライモ・米の栽培に力が注がれた。昭和34年（1959）度の栽培面積をみても，①位…カライモ　②位…サトウキビ　③位…雑穀　④…水稲の順になっている。喜界島で水稲の順位の低いのは，湧水か溜池潅漑による水田しかなく，もともと水田適地が少ないからである。

しかし政府による甘味保護政策とともに大型製糖工場（生和糖業が昭和34年に設立）が出現するや否や，サトウキビ栽培が爆発的に増加した。さらに米の作付制限（昭和45年以降）がこれにはくしゃをかけ，今や喜界島の全耕地面積の92％（昭和62年度，1777ｈａ）を占めるにいたっている。トラクター・耕運機・脱葉機・収穫機などの普及・高収量品種の普及（ＮＣＯ310）・化学肥料・薬剤の使用などのため，歴史的にみると実に三度目のピーク，それも最大のピークとなっている。これに伴い米やカライモ・雑穀（麦・粟）などはほとんど姿を消した。そのため教材で実物をとり上げる時にも不自由を感じる程である。

第2表は藩政時代から現在までを大まかに4期に区分し，その時代の代表的作物・主な社会的でき事・主として開発されていたところ・耕地の種類をまとめたものである。

それによると，①期…琉球時代～藩政前期の頃までは米・麦・大豆などの自給作物中心で湧水や溜池のあるところでは米作がおこなわれ，集

（第２表）　喜界島における栽培作物の変遷と耕地開発

	栽培作物	主な社会的できごと	おもに開発されていたところ	耕地の種類
①琉球時代～藩政前期	○水稲・麦・粟・大豆など自給作物中心	○慶長18年（1613）代官所大島におく ○元禄６年（1693）喜界島代官所設置 ○元禄11年（1698）キビ横目をおく ○享保３年（1718）代官平田平六新旧溜池普請命ず	○湧水のあるところ……水田 ○溜池のあるところ……水田 ○集落近くの肥沃な畑地……畑	A・B・C
②藩政中～後明治６年	○サトウ・ビ中心カライモ主食	○第１次定式買入（正徳～安永６）1713～1777 喜界島58万斤 ・大島350万斤・徳之島73万斤 ○換糖上納制導入・延享２年 1745 ○第１次惣買入（安永６～天明７）1777　1787 ○第２次定式買入（天明７～天保元）… 1787　1830 喜界島・買重糖15万斤増（計73万斤） ○木曽川の治水　宝暦4～5（1754～5） 寛政９年（1797）買重糖４万斤増（計77万斤となる） ○第２次惣買入（天保元～明治５年）… 1830　1872 喜界800町・大島2400町・徳之島1080 ○明治２年黒糖生産ピーク奄美全部で2002万斤 喜界（明治元）309万斤 ○明治６年…勝手売買許される。	○集落近くの肥沃な畑地（サトウキビ） ○湧水のあるところ（サトウキビ） ○溜池のあるところ（サトウキビ） ○カライモ…集落雑穀より遠いやせ地 ○百ノ台　石灰岩裸地砂丘地－未開地（薪炭材）－一部カヤ地（屋根ふき用）	A・B・C

③明治～大正～昭和34年	○水稲・サトウキビ・カライモ・雑穀 ○明治41年 ①位サトウキビ，②位カライモ，③位雑穀④位水稲 ○昭和34年 ①位カライモ768ｈａ，②位サトウキビ670ｈａ，③位雑穀458ｈａ，④位水稲360ｈａ，	○サトウキビ…生産激減 ○奨励政策がとられる。明治42年…明治２年の生産を上まわる…奄美群島2350万斤・喜界401万斤 ○大正７年戦前期のピーク ○昭和６年アリモドキゾウムシ広がる ○終戦後（昭和21）大正期の１／10（サトウキビ）	○湧水のあるところ…水田 ○溜池のあるところ…水田 ○畑地 集落近くの肥沃なところ……サトウキビ 遠いところ……雑穀，カヤやせ地…… ○石灰岩の裸地……未開地（薪炭材）	A・B・C カライモDの縁辺
④大型製糖工場時代～昭和35年以降	○サトウキビ栽培面積急増（1700ｈａ全耕地面積の３／４） ○昭和60年 ①位サトウキビ（1400ｈａ） ②位自給野菜（87ｈａ） ③位飼料（64ｈａ） ④位果樹（37ｈａ） ⑤位輸送野菜（20ｈａ） ○メロン，スイカ，花卉（キク），観賞用植物（ガシュマルなど）の栽培始まる	○大型製糖工場（生和糖業株式会社昭和34年）設立 ○昭和43年より構造改善事業始まる。 ○水稲作付制限（昭和45年－） ○機械の普及（耕運機・トラクターなど） ○S61年93520トン ○S60年21000円／トン	○石灰岩の裸地や海岸付近の沼沢 ○百ノ台（D）や海岸砂丘などの耕地化	A・B・C

（鹿児島県史，その他の資料で作成）

落近くの肥沃な耕地で麦・粟・大豆などがつくられていた。(耕地の種類A・B・C　第6図参照)

②期…藩政中期～明治6年　換糖上納令がしかれ，年貢はすべて黒糖で納入しなければならず，耕地のほとんどにサトウキビが強制耕作された。カライモが主食となった。このため湧水や溜池の近くはすべてサトウキビが栽培されるようになり，人々の主食であるカライモや雑穀は集落から遠いやせ地に植えられた。百ノ台・石灰岩裸地・砂丘などの未開地は薪炭用やカヤ地（屋根ふき用）として利用された。(A・B・C)

③期…明治～大正～昭和34年　自分達の必要な作物を自由に栽培できるようになった。このため，湧水や溜池のあるとこには米がつくられ，集落近くの肥沃なところにはサトウキビ，遠いところには雑穀・かや，やせ地にはカライモが植えられるようになり，石灰岩の裸地や未開地は薪炭用として利用している。(A・B・CとのDの縁返部が開発)

④期…大型製糖工場時代（昭和35年）～現在　サトウキビ栽培が爆発的に増加し，機械化が進み，構造改善事業がはじまり，地下ダム計画が進行中である。近年冬の温かさを利用したメロン・スイカ・キク・鑑賞用植物などの栽培がはじまり期待されている。石灰岩の裸地や海岸の沼沢地の開拓や海岸砂丘，百ノ台(D)の本格的耕地化が進んでいる。(A・B・C・D) このため喜界島のカルスト地形のドリーネなどの微地形はほとんどなくなり，畑のまわりに防風垣としてあった蘇鉄も随分少なくなってきている。平担な珊瑚礁台地であるので，圃場整備の際は，必ず防風・防潮の為防風林を設置するなどの配慮が必要である。一担台風にでもみまわれると，その風害・塩害は甚大なものとなる。

工事中の赤土が海岸に流れこみ，付近のサンゴを痛めつけるのを目のあたりにして，開発と環境保全の難しさをあらためて考えさせられる。

3．亜熱帯性気候――その特色と利用

奄美を初めておとずれた人に，何が印象的かと尋ねると，海が綺麗い，空気が澄んでいる，空が青い，バナナやパパイヤ，アダンが実っている，ハイビスカス・ブーケ・ブーゲンビリア・クロトンなどが色鮮やかである。ガジュマルが繁っている，サンゴの石垣が珍しい，小鳥やチョウが多い，などの答えがかえってくる。喜界島に住むわれわれにとっては，余りにも身近すぎてあたりまえに思うが，本土とは異なる自然環境を有しているのであり，その事を認識し，いつくしみ育て，また利用しなければならない。

(ア)喜界島の気候の特色――（東京や鹿児島に比べて冬が暖かい）

第3表は喜界島と東京・鹿児島・那覇との気候の比較である。これによると平均気温が東京や大阪に比べて高い。(東京より＋7.0℃，大阪より＋6.1℃，鹿児島より＋5.0℃）これは名瀬市より，いく分高く，沖縄の那覇とほとんど変わらない。特に12・1・2・3月の冬が暖かい。冬の月平均気温は東京とりも約10℃高く，鹿児島と比べてみても6～7℃高い。那覇とほとんど同じで霜や降雨をみることはまずありえない。

第3表　　喜界島の気候と三都市との比較

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	全年
東京	4.7	5.4	8.4	13.9	18.4	21.5	25.2	26.7	22.9	17.3	12.3	7.4	15.3
	54	63	102	128	148	181	125	137	193	181	93	56	1460
鹿児島	7.0	8.2	11.2	16.1	19.8	23.0	27.2	27.7	24.9	19.6	14.3	9.2	17.3
	95	106	147	256	275	475	323	209	211	108	92	80	2375
喜界島	17.0	16.3	18.2	20.8	24.0	26.3	30.0	28.9	28.7	25.5	20.2	17.4	22.8
	270	211	304	180	153	515	55	108	116	116	130	38	2196
那覇	16.0	16.4	18.0	21.0	23.7	26.1	28.1	27.8	27.1	24.3	21.3	18.1	22.4
	120	118	144	168	249	293	193	260	166	186	142	117	2128

雨量は東京よりも約1000㎜程多い，年2300㎜程で，那覇よりも多く，鹿児島や名瀬と同じくらいである。梅雨時期の５～６月と台風・秋霧時期の９～10月に年間降雨量の約半分が集中する。梅雨も本土より約１ケ月早く入り６月いっぱいで終わる。盛夏７～８月にかけて雨量が少なく，干越になりやすい。

夏から秋にかけて３～４個の台風が接近・通過してかなりの被害をもたらしている。

冬の（12・１・２月）北西のモンスーン（ミイニシ）も強く，海上の交通はとだえやすく不便である。

（イ）亜熱帯植物が多い

本土ではみられない亜熱帯植物が多い。パパイヤやバナナ・アダンが実り，道ばたにハイビスカス・ブーゲンビリアが咲き，畑の土手にソテツが生え，海岸の荒地に町花のリューゼツランが無造作に生えている。

家の周りにクロトンが色彩豊かに植えられ，石垣にガジュマルが繁り，屋敷を守り，木陰を与えている。ほとんどの亜熱帯植物が，葉っぱが大きく，色どりが実にあざやかである。

◎　海岸にみられる植物

テンノウメ（テンバイ）・マッコウ・イソヒメ・クサトベラ・アダン・モンパノキ・ハマカシ・ハマボウフウ・トベラ・リューゼツラン（町花）・ハマヒルガオ・モクマオ（オーストラリア原産）…防潮・防砂林として植林したもの）

◎　山手にみられる植物

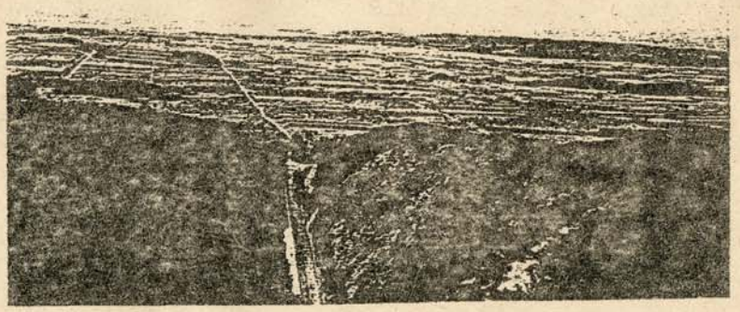
ソテツ・シマサルスベリ・ハマヒサカキ・クサギ・リュウキュウハゼ・タラノキ・アコウ・ガジュマル・イヌビワ・オオムラサキシキブ・リュウキュウエノキ・シマグワ・サンゴジュ・ゲキツ・リュウキュウマツ・バショウなど

（ウ）亜熱帯性気候の利用

冬の暖かいことが喜界島の特色である。この特色をいかに生かすかが今後の喜界島の発展の鍵といえよう。農業ではメロンが12月と５月・スイカが３～４月，ビワ３～４月に出荷され，高値をよんでいる。菊（12～５月）や観葉植物などの栽培もみられ，これらがフライト農業と直結するなら今後期待される。また冬でも牧草が育つので畜産も有望である。

牛肉の輸入自由化をひかえ，生産コストの安い喜界島にとってはサトウキビとの複合経営としても，今後重要であろう。その他冬の季節風を生かし（風力），夏の太陽エネルギーを利用する方法，海の養殖業，レジャーなど魅力ある可能性を秘めている。

①　百ノ台から見た湾頭原

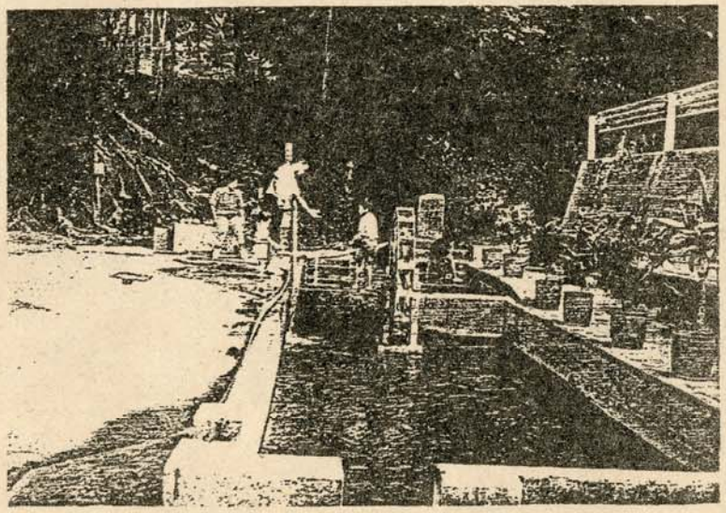


圃場整備のすんだ，喜界島一広い農耕地

② 珊瑚礁台地

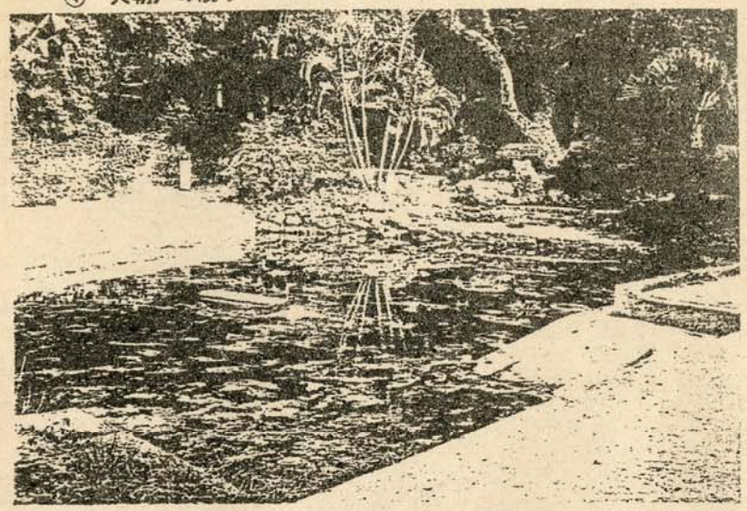
中西公園から花良浩・阿伝・早町方面をのぞむ
左手は台ノ台

③ 水量豊富な滝川の湧水

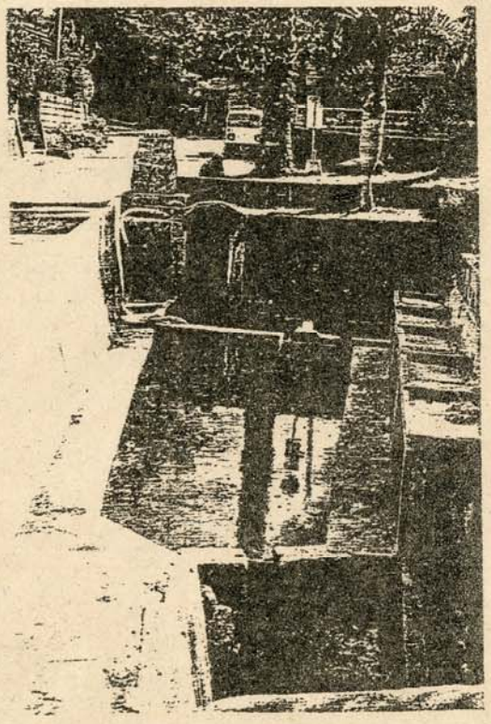


飲料水はもとより灌漑用水（滝川，島中）としても
利用されていた。（最も高いところの湧水　海抜90m）

④ 大朝戸の湧水



水神が祭られ，現在でも大切に利用されている。

⑤ 羽里の湧水

水道以前は集落のオアシス
としてにぎわった。
飲料水，野菜，洗濯物など
に区分され，
現在でも大切にされている。
（夏の旱魃に利用される）